

# 令和3年度の災害を中心とした事例集

令和4年11月

消 防 庁

# 目次

<b>令和2年12月16日からの大雪</b>	
令和2年12月16日からの大雪の概要	1
新潟県南魚沼市	3
<b>福島県沖を震源とする地震(令和3年2月13日)</b>	
福島県沖を震源とする地震(令和3年2月13日)の概要	8
宮城県亘理町	10
宮城県山元町	17
福島県相馬市	21
福島県新地町	26
<b>令和3年7月1日からの大雨</b>	
令和3年7月1日からの大雨の概要	32
神奈川県平塚市	34
静岡県熱海市	38
<b>令和3年8月11日からの大雨</b>	
令和3年8月11日からの大雨の概要	47
長野県岡谷市	49
佐賀県武雄市	59
佐賀県神埼市	66
長崎県西海市	76
<b>巻末資料</b>	
宮城県山元町(東日本大震災編)	81
福島県相馬市(東日本大震災編)	85
福島県新地町(東日本大震災編)	91

※ 各首長からのメッセージにおける被害状況の数値は、取材を行った時点のものです。

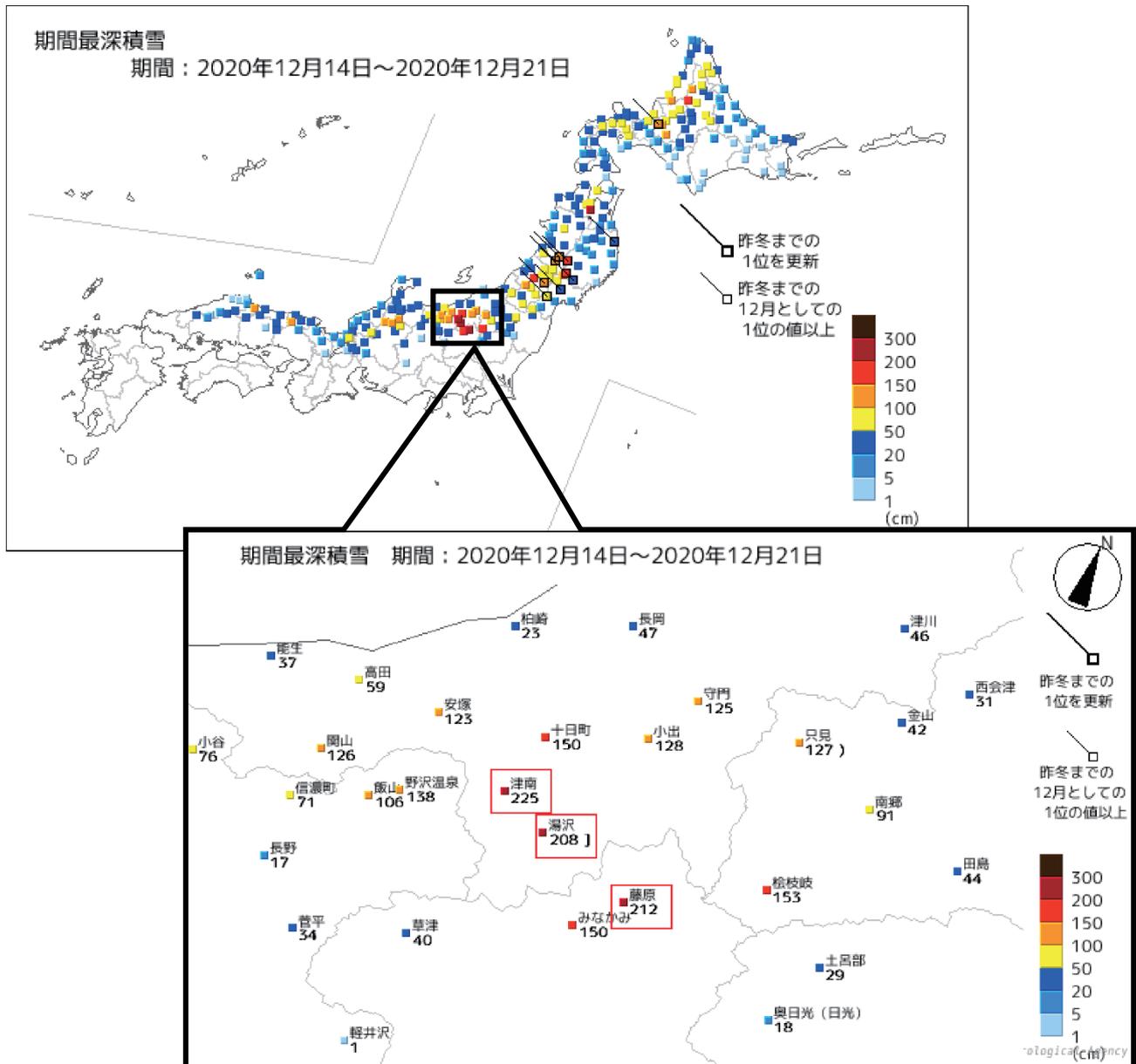
# 令和2年12月16日からの大雪

## 1 気象の概要

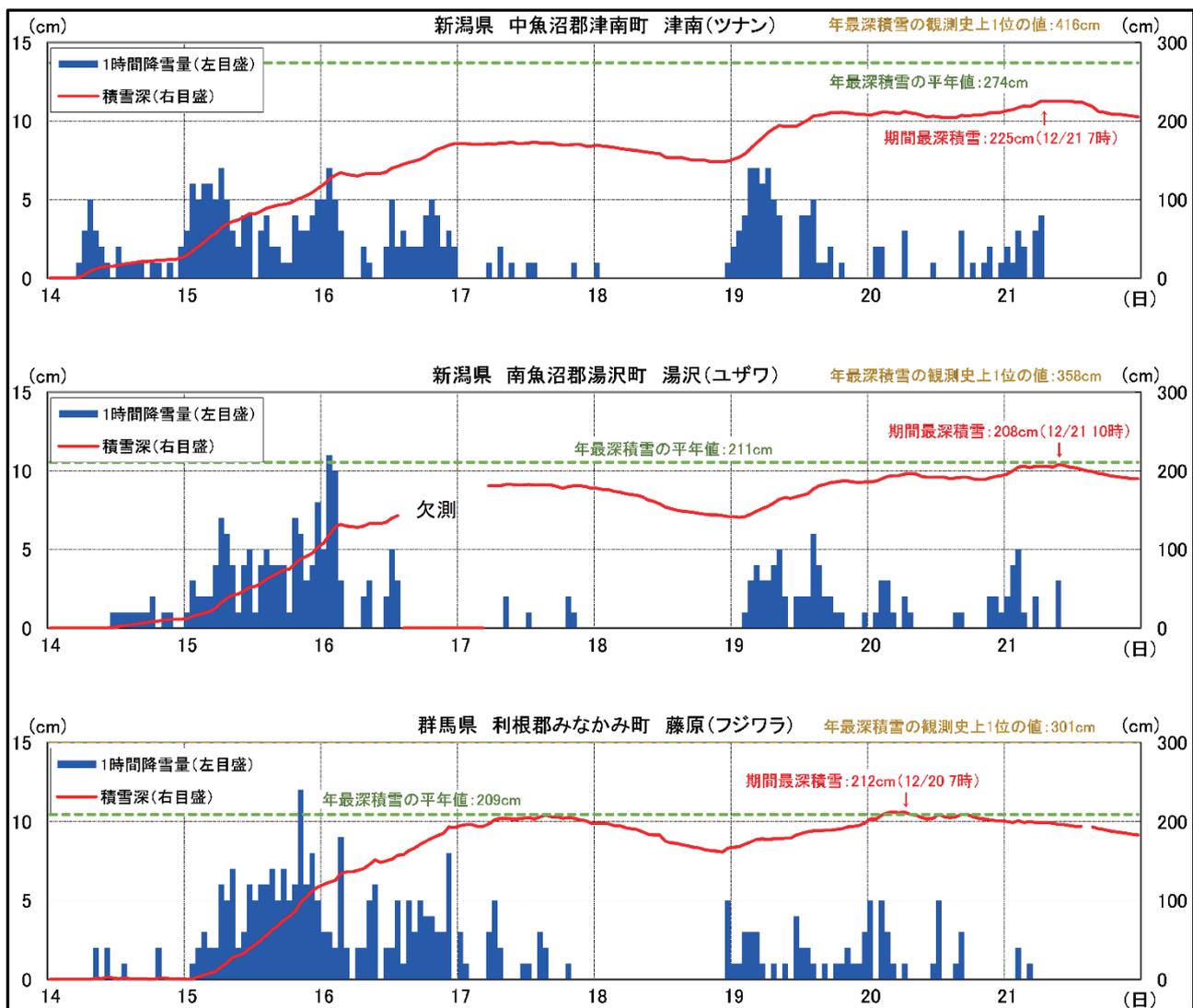
日本付近は、12月14日から21日にかけて強い冬型の気圧配置が続き、上空には強い寒気が流れ込み続けた。

この影響で、北日本から西日本の日本海側を中心に断続的に雪が降り、14日から21日にかけての期間最深積雪量が、群馬県藤原で212センチとなったほか、新潟県津南で225センチ、新潟県湯沢で208センチとなるなど、関東地方や北陸地方、東北地方の山地を中心に大雪となった。特に、群馬県藤原では、48・72時間降雪量の期間最大値が歴代全国1位（アメダス観測値による統計）を更新する記録的な大雪となった。

注）気象庁ホームページ：「災害をもたらした気象事例」（強い冬型の気圧配置による大雪 令和2年（2020年）12月14日～12月21日）から



期間最深積雪の分布図（気象庁ホームページ資料に加筆）  
（赤枠囲いの観測点は次ページに降雪量・積雪深の時系列を記載）



降雪量・積雪深の時系列（気象庁ホームページから）

## 2 被害の概要

この大雪により、群馬県、新潟県内の関越自動車道では、12月16日夕方から車両の立ち往生が発生し、最大で2,000台を超える車両が滞留した。この解消には2日以上を要し、立ち往生した車両内で体調不良を訴えるなど、軽傷4人の人的被害となった。

このほか、電柱の倒壊や倒木により、秋田県、福島県、岐阜県、兵庫県及び鳥取県の5県で孤立地域が発生した。また、北日本から西日本の各地域で停電、断水等ライフラインへの被害や道路の通行止め、鉄道の運休、航空機、船舶の欠航等の交通障害が発生した。

【人的被害】軽傷4人

【住家被害】なし

注) 消防庁ホームページ：「12月16日からの大雪による被害及び消防機関等の対応状況（第10報）」から

## 1 林市長からのメッセージ

南魚沼市長 林 茂男

## ●前代未聞の災害を経験して

2020年12月中旬、関越自動車道で積雪のためにスタック車両が出て車両の大渋滞を引き起こした事態は、前代未聞の出来事だった。そのために、現場の市長としては、高速道路の管理者や県、国の出先機関などと上手く連携が取れなかったことが、大きな反省点だ。例えば市役所内に現地指揮本部を設置するなどして、道路管理者、国、県、市といった連携が取れる体制をとっていれば、現場の降雪状況や地理に詳しい市の意見が取り入れられたのではないかと、という思いがある。

この地は、世界でも最高峰の豪雪地帯にあり、雪の量、重さは比類なきものである。市では、積雪が2m40cmを超えてようやく警戒態勢をとる目安となるが、逆に言えば、普段から市道や国県道はもちろん、高速道路の除雪作業には、素晴らしいエキスパートがおり、ほとんど渋滞などは起こさないが、異常な降雪量に加えて、高速道路上で複合的な要素が重なった事態だった。

## ●予期せぬ豪雪被害

2019年は異常な暖冬でほとんど大雪は降らなかったが、2020年は12月15日頃からの初雪だったが、異常な降雪だった。それでも、本市としては、別に例年と比べてもそれほど驚くような降雪ではなく、市内では、いつも通りの対策を取っていたので、降雪そのもので市内の被害はなかった。高速道路の大渋滞は、市の対策範囲を越えるものなのだが、もっと前に出て助言すべきだった。実際、対向車線は救急車両などが走行できる状態だったので、反対車線から閉じ込められている人々を救出して、市の救急隊が近くの市民会館や体育館に準備した避難所に搬送する、なども助言したが、実現出来なかったことは、非常に残念だ。

## ●想定外の災害への備え

先頭車両から最後尾までの車両数を把握すべきだったが、それすらできていなかった。市としては、高速道路と交差している市道や県道の交差点に消防車両を出し、下から渋滞車両の近くまで上がり、閉じ込められている人々を救助して、一般道の道路上におろして、市などが手配するバスなどの車両で避難所に搬送することもできたのではないと思う。道路管理者や県、国、市で協議できていれば、必要な体制が取れたはずだ。

高速道路上だけではなく、スタック車両を発生させないためのタイヤ規制や通行させないなどの法整備も必要だが、やはり、発生直後からの自衛隊の早期派遣、現場の市町村を含めた関係者で早急に現地指揮本部を設置し、現地の状況に詳しい市町村の助言を拾い上げること、様々な知見と知恵を皆で出し合って、想定外の事態に向き合っていかなければ、人命は救えない。

## ●過去の経験、常識の通じない災害

2020年の雪は本市にとっては、災害救助法が適用されるほどの降雪ではなかった。しかし、確かに最近の雪の降り方は異常だった。線状降水帯のような雪が局地的に異常に降り続く地域があり、同じ市内でも全く違う状況が生まれる怖さがある。昔と違う降り方で被害の偏りが出ないか将来的に心配している。

マスコミの報道は大切だが、大雪が降ると、「豪雪地帯」というひとくくりの取り上げ方をされる。雪で大変だ、大変だと報道されることは、もう勘弁してほしい。市内の建設業者たちは「世界一の除雪技術を有する」との気概があるが、あの高速道路の出来事は、彼らのプライドを傷つけたと思う。それはオペレーションを失敗したからだ。

## 2 災害の概要

今回の大雪により、新潟県や群馬県の関越自動車道で多数の車両の立ち往生が発生したほか、北日本から西日本にかけて道路の通行止め、鉄道の運休、航空機・船舶の欠航等の交通障害、除雪作業中の事故が発生した。

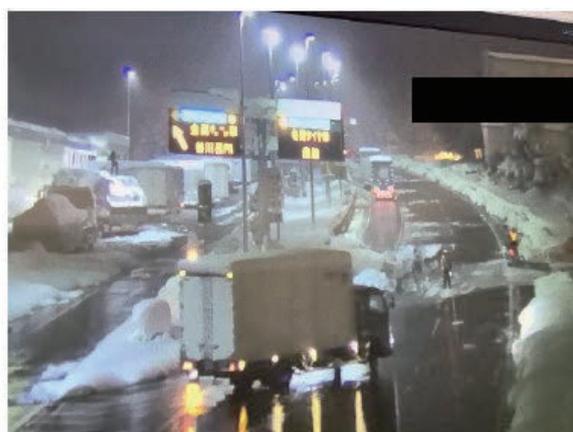
関越道の集中降雪により複数箇所で大規模な立ち往生が発生したことで、12月16日から18日の3日間にかけて、最大約2,100台の大規模な車両滞留が発生した。その解消に長時間を要したことで、滞留車両に取り残された人の人命や健康への懸念を生じさせるとともに、沿線地域の生活活動や、物流が滞ることで社会経済活動に多大な影響を及ぼした。



滞留車両状況

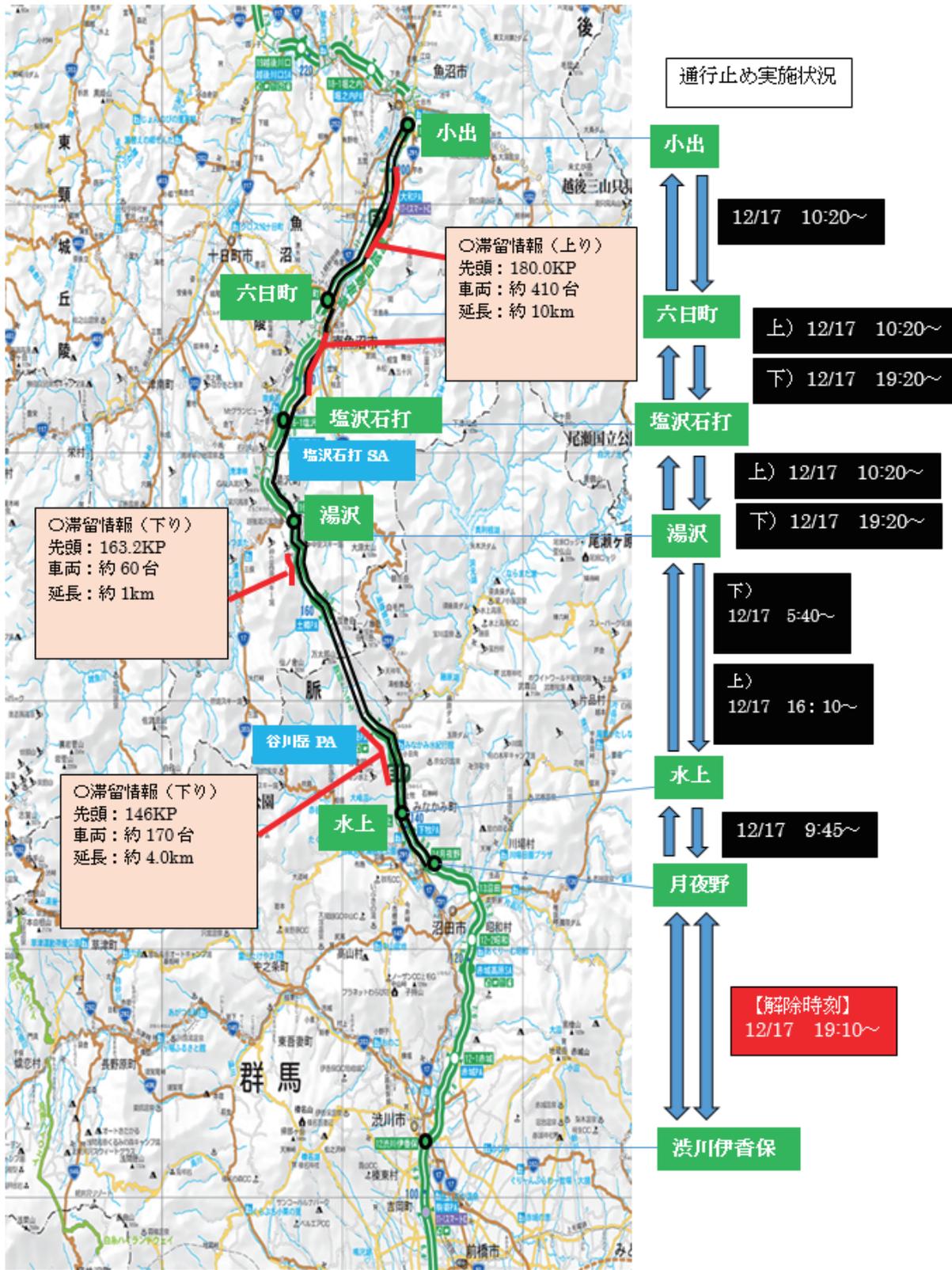


牽引作業状況



谷川岳PA下り線Uターン誘導

写真（南魚沼市提供）



渋滞情報 (南魚沼市提供)

### 3 被害の概要

【人的被害】 軽傷 4人

【住家被害】 なし

(消防庁ホームページ「12月16日からの大雪による被害及び消防機関等の対応状況(第10報)」から)

### 4 災害の時系列

#### 12月17日(木)

5:40 関越自動車 湯沢 IC～月夜野 IC(下り線) 通行止め開始

9:30 頃 市から新潟県に問い合わせる。11時からネクスコを交えて対策会議を行い、動画情報システムで中継する旨。

同じ頃 市からネクスコに問い合わせ。湯沢 IC前でトラックがスタックしており、除雪車で引き上げるなどの対応をしているが、復旧の目途が立たない。

10:20 南魚沼市消防署から。湯沢・小出間で渋滞している。救急車が石打 IC付近で立ち往生に巻き込まれている。車内に体調不良を訴える者がいるが、我慢してもらっている。

10:20 関越自動車道 湯沢 IC～小出 IC(上り線) 通行止め開始

10:45 JR東日本新潟支社から。JR上越線が終日運休する旨の連絡。代行輸送なし。

10:55 17時間ほど全く動いていないが、何か動きはないか?と立ち往生した車両の人から市に電話で問い合わせあり。

13:05 国道17号関ステーション・湯沢 IC間上り通行止め

14:20 国土交通省長岡国道事務所から、食糧支援について考えているが協力が必要か?問い合わせあり。

14:30 大雪による災害対策本部設置

16:25 総務省消防庁が、市内の停電、ライフラインなどの状況について情報収集

16:40 県庁から現在の対応状況について連絡あり。ネクスコは除雪作業を行いながら1台ずつ車両を出す方向。避難所はあくまで予備的措置であり、使用しない可能性もあると。県は自衛隊と協力しながら、現地SAに物資を運搬中。

17:30 長岡国道事務所が国道17号関ステーション・湯沢 IC間の通行止め解除

19:00 県防災企画課に市から情報照会

19:30 対策本部 高速道路上で立ち往生した人を対象にした避難所を市民会館内に開設

20:25 ニュースで自衛隊が現場到着と報道

21:20 県庁から、自衛隊が物資、ガソリンを配達中と情報提供

#### 12月18日(金)

9:30 県危機対策課から連絡あり。現在まだ600台が停留している状況。

3日目を迎える方が出てくる。下り車線を使って、バスによる避難をしたらどうか。避難所は受け入れできる体制であると報告。

県防災企画課からは、近隣市町に備蓄物資の提供可能数を確認中。水1,008本、ビスコ1,200食、リッツ700食を越後川口SA上りに運搬。

10:10 県防災企画課から、ネクスコが車に乗って高速を降りる人を市の避難所を案内すると連絡。県危機対策課から、体制を自衛隊300人規模、県職員も含めて増やす。

11:20 県危機対策課から、ネクスコは中央分離帯を安全に乗り越えさせることができないため、下り

車線を使った搬送は無理と判断。現状では、自衛隊を大幅に増員してよりスムーズな救出を目指す。

- 11:30 県防災企画課から、ネクスコが避難所の案内地図を説明し配布する。
- 13:50 県庁から照会あり。現在の避難者数は2人と報告。
- 16:05 県危機対策課へ市から現在の滞留台数を問い合わせる。県警調べで、14時半現在562台。
- 16:10 県から市民会館へ保健師を派遣。到着は17時15分の予定。
- 20:30 国交省北陸地方整備局から23人が市民会館に宿泊施設案内係として派遣。

**12月19日(土)**

- 6:35 最終の避難者が帰り0人となった。

### 【その他】

この渋滞事案に対して、ネクスコや国の関係機関、市との連絡調整に当たった新潟県防災部局の担当者によると、最大の教訓は、ネクスコに災害対応の「文化」が欠如していたことにより、渋滞状況を正確に把握ができなかったことで、関係機関で情報共有ができず、調整がうまくいかなかったことという。16日から17日にかけての初期対応で、トンネル内にとどまっている車両台数をネクスコが読み違えたことから始まり、17日午前中には、滞留車両を上り400台、下り500台としていたが、実際にはその倍以上あったという。ネクスコは高速道路管理者として、渋滞解消に目を捉われて、閉じ込められた人たちの人命や救助への考え方が遅れた。国から、救助のためのバスの準備や、避難するホテルを用意するように示唆があったが、自衛隊の出動要請なども遅れた。

こうしたことを教訓に、ネクスコと国、県、市で「乗員保護活動計画」を2021年春に作成。こうした事態が発生した時には、速やかに「現地調整所」を設置し4者で調整しながら、現場近くの自治体の知恵や経験も活かすようにするという。3月には湯沢IC付近で、実地訓練を実施。11月にも2回、図上訓練を含めた4者の訓練を実施した。

「情報の精緻な収集」と「関係機関での情報共有が必須」だという、災害が起きるたびに指摘されてきた教訓がまたも、忘れられた結果の事故だったといえる。事態が発生した後とはいえ、経験をもとに対応計画を作成したことは、同種の事態発生に参考になると考える。

# 福島県沖を震源とする地震

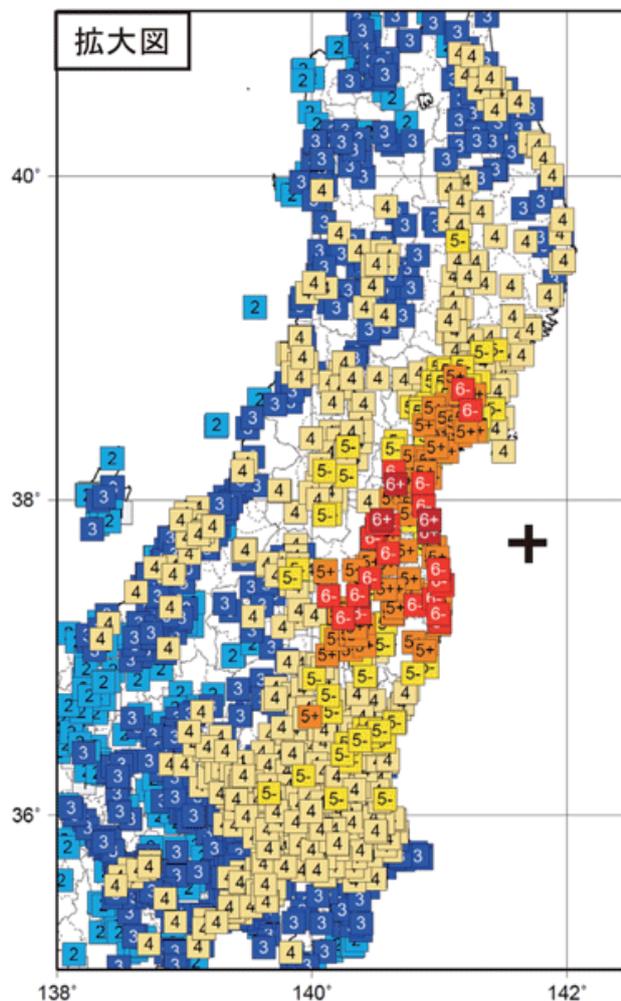
## 1 地震の概要

令和3年2月13日23時7分に福島県沖の深さ55キロメートルでマグニチュード7.3の地震が発生し、宮城県蔵王町及び福島県相馬市、国見町、新地町で震度6強を観測したほか、東北地方を中心に北海道から中国地方にかけて震度6弱から1を観測した。

この地震により、宮城県の石巻港で0.2メートル、宮城県石巻市鮎川、仙台市仙台港、福島県相馬市で0.1メートルの津波を観測した（津波の観測値は速報値）。

この地震の発生後、震源付近では地震活動が活発な状態となり、2月28日までに震度1以上を観測した地震が93回、このうち震度3以上を観測した地震が7回発生した。

注）「令和3年版 防災白書」から



震度分布図（「令和3年版 防災白書」から）  
（気象庁ホームページより内閣府にて作成）

都道府県	震度	市区町村
宮城県	6強	蔵王町
	6弱	石巻市、岩沼市、釜米市、川崎町、亘理町、山元町
	5強	仙台市青葉区、仙台市宮城野区、仙台市若林区、塩竈市、白石市、名取市、角田市、栗原市、東松島市、大崎市、大河原町、村田町、柴田町、丸森町、松島町、七ヶ浜町、利府町、大郷町、大衡村、涌谷町、宮城美里町
	5弱	仙台市太白区、仙台市泉区、多賀城市、富谷市、大和町、色麻町、宮城加美町
福島県	6強	相馬市、国見町、新地町
	6弱	福島市、郡山市、須賀川市、南相馬市、伊達市、本宮市、桑折町、川俣町、天栄村、広野町、檜葉町、川内村、大熊町、双葉町、浪江町
	5強	いわき市、白河市、二本松市、田村市、大玉村、鏡石町、猪苗代町、泉崎村、中島村、矢吹町、玉川村、浅川町、小野町、富岡町、葛尾村、飯館村
	5弱	湯川村、会津美里町、西郷村、棚倉町、矢祭町、石川町、平田村、古殿町、三春町
栃木県	5強	高根沢町、那須町
	5弱	大田原市、那須烏山市、那珂川町
岩手県	5弱	一関市、矢巾町
山形県	5弱	米沢市、上山市、中山町、白鷹町
茨城県	5弱	日立市、土浦市、常陸太田市、笠間市、常陸大宮市、那珂市、筑西市、鉾田市、城里町、
		加須市
埼玉県	5弱	加須市

各地の震度（5弱以上）

## 2 被害の概要

この地震により、死者2人、負傷者186人の人的被害が発生し、36,299棟の住宅被害が発生したほか、東京電力管内及び東北電力管内で最大95万戸の停電が発生するとともに、宮城県、福島県、茨城県、栃木県において最大26,000戸超の断水が発生するなど、ライフラインへの被害のほか、土砂崩れによる道路の通行止め、鉄道の運休等の交通インフラにも被害が発生した。

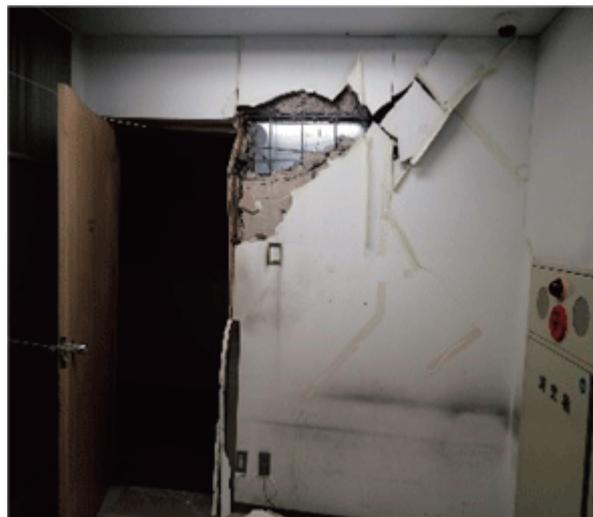
【人的被害】死者 2人、重傷 16人、軽傷 170人

【住家被害】全壊 123棟、半壊 1,937棟、一部破損 34,239棟

注) 消防庁ホームページ：「福島県沖を震源とする地震による被害及び消防機関等の対応状況（第18報）」及び「令和3年版 防災白書」から



路面のひび割れ（福島県二本松市）  
（「令和3年版 防災白書」から）



ホテルの壁面のひび割れ（福島県郡山市）  
（「令和3年版 防災白書」から）

## 1 山田町長からのメッセージ

亶理町長 山田 周伸

## ●災害情報の入手手段として携帯電話やスマートフォンと充電機器の重要性が増している

小学校高学年の夏、亶理町の海水浴場を訪れた時、父から1960年のチリ地震津波の話聞いた。津波というと三陸沿岸のことと考えがちだが、亶理町の漁港周辺にも津波が来たと。当時は、どうして海水浴場に来ている時にそんな話をするのだろうと思った。津波が発生したら亶理町も例外ではないのだと、子どもながらに意識をした記憶がある。

中学校3年の時に1978年の宮城県沖地震を体験した。剣道部に入っていて、体育館で部活動をしていた時に発生した。防具を着けていたので音は良く聞こえなかったが、足元で揺れを感じて、どうして揺れているのだろうと不思議に思った。壁に寄れと言われて、壁に張り付いた。体育館の骨材のワイヤーを留めているボルトが外れて床に落ちてきた。その時は、津波のことは考えなかったと思う。チリ地震津波の話思い出したのは2004年のスマトラ沖地震津波が起きた時だった。現地の津波や被害の映像をテレビで観て、津波の恐ろしさを認識した。

2011年3月11日は11時に会社を出て福島県相馬市、新地町に向かった。当日は金曜日で相馬市、新地町の民宿をまわって味噌醤油を補充する日だった。会社に戻ったのが14時半ごろ。売上げの集計をしている時に地震が起きた。大きな揺れがくる前に地鳴りがした。宮城県沖地震だと思った。事務所は古い土蔵にある。机の上に積み重ねていた書類がなだれ落ちた。社員2人を駐車場に避難させた。仕事のデータが入っているハードディスクがクラッシュしたら大変だと思って、私はサーバーの電源を落とした。後になって、クラウドにバックアップのデータを保存していたことに気付いた。揺れがいったん収まりかけて、再び大きく揺れ出したタイミングで外に出た。その時点で屋根から瓦がバタバタ落ちていた。外にいた妻からは、よく瓦に当たらなかったと言われた。道路は車で渋滞していた。信号は点いていたが、皆さん揺れに驚いて止まったのだと思う。落ちてくる瓦に当たらないように、会社の前に止まっていた車を駐車場に誘導した。揺れが収まって、社員たちと店舗で倒れていた商品をなおした。社員1人には車のワンセグで情報収集を頼んだ。間もなく津波警報が発表され、次に大津波警報になったことを知った。当初、外回りをしている社員2人の安否が確認できなかった。亶理町の沿岸部に行っていた社員は間もなく帰ってきた。地震発生時は海の近くに居たという。結果的に会社までは津波は来なかったが、町内の半分近くが浸水するとは思わなかった。仙台市方面に出掛けていた社員は名取市内陸部で地震に遭っていた。地割れで車が出せなくなり、夜遅くに帰ってきた。携帯が通じなかったので、本人に会ってほっとした。

翌日は土曜日で会社は休みだったが、社員に出勤してもらい事務所や工場の片付けをした。その後、役場に向かい手伝うことがないか尋ねた。当時の副町長から、沿岸部から避難してきた人たちの中には濡れた人もいて、温かいものを飲ませたいと言われ、味噌を提供した。消防署、警察署も、寒い中で救助や捜索をしている応援部隊に温かいものがほしいということで味噌を提供した。その後も町内の避難所や山元町の病院に味噌を届けた。

震災でだいぶ会社の瓦が落ちた。建設会社の人に見てもらったら、瓦の下に土が20センチ近く入っていて、屋根周辺が重いため、建物が大きく揺すられたのではないかという話だった。当時、瓦が手に入らなかったこともあり、軽い素材の鉄板葺きにした。震災でライフラインが止まった教訓を受けて、自宅では震災後、2リットルのペットボトル6本が入った箱を2つ用意し、毎年夏に飲んで新しいものに補充している。停電した際の緊急電源として、灯りはもちろん、携帯電話の充電を想定して蓄電池を準備している。連絡を取るだけでなく、災害情報を入手する通信手段として携帯電話やスマートフォンの重要性は震災の時よりもいっそう増している。

## ●地域の弱点を把握し、最悪の事態を想定した対応を

2月13日の地震の対応で、最も記憶に残っているのは、津波の心配がないと聞いてすごく安堵したこと。災害リスクは大幅に減少するとともに、津波の警報はもちろん、注意報が発表された場合でも難しい対応に迫られるからだ。避難所を開設した場合、新型コロナウイルスの対応が必要になる。一年で最も寒い時期でもあり、低体温症の心配もある。津波が無いと知るまでは、避難所で間隔を空けることや、暖を取る手段などの算段をしていた。

地震については基本的に起きたことに対して対応することになる。しかし津波はこれから起きることに対応しないといけない。亙理町の場合は海沿いに7メートルの防潮堤があって、その西側に5メートルのかさ上げ道路、さらに西に常磐自動車道があるといった多重防御の態勢をとっている。一部の住民を除きかさ上げ道路のその西側から住民が暮らしている。夜中の時間帯でも、警報が発表されたら、かさ上げ道路と常磐自動車道の間が避難対象地域になり、7,000人近くの住民を避難させないといけない。

津波が無いという情報を聞いて「注意報が発表されなくて良かった」と職員と互いに言葉を交わしたと思う。それぐらい職員も緊張感を持って対応していた。

東日本大震災で津波被害を受けた地域では、地震が発生すると常に津波の不安が頭をよぎる。震災前に比べて防潮堤は高くなった。ただし、亙理町の場合、荒浜地区の漁港周辺では防潮堤のコンクリート部分の工事は終わっていたが、まだ開閉扉が完成していなかった。そのような状況で津波が漁港に入ってくれば、住宅地が浸水被害を受けかねない。2月13日はそのことを最も恐れていた。地域の弱点を把握し、最悪の事態を想定した対応が必要だと考えている。

## ●地域、交通事情に応じて平野部では車避難も選択肢に

東日本大震災で亙理町は、300人を超す人命を失った。住民の津波への防災意識は高い。この意識を避難行動に結びつけようと、東北大学災害科学国際研究所と連携してさまざまな訓練に取り組んでいる。津波避難は徒歩が原則だが、地域によって事情が異なる。亙理町では沿岸部の住民にとって、車避難は有力な選択肢と考え、準備に取り組んでいる。津波警報が発表された時は、津波浸水想定区域の外に出ることが安全確保につながる。ただし、町の地形は沿岸部から5.6キロメートルにわたって内陸部に平野が続く。東日本大震災では町の全面積の48パーセントが津波浸水した。水平移動で海から距離を稼がないと、津波からは逃れられない。車避難を有効に使うため、渋滞の抑制の一環として一時的な避難場所となる防災広場を町内に整備し、非常時には多目的運動場を駐車場として開放する。避難訓練などを通して、沿岸部の住民には選択した道が渋滞していたり通れなかったりした場合に迂回できるように、普段から複数の避難ルートを考えておいてほしいと呼び掛けている。

職員対象の抜き打ち防災訓練も2020年以降、2回行った。日時や想定を知っているのは町長、副町長、教育長、総務課安全推進班の職員のみ。安否情報の収集や避難所開設など、災害が発生した時の初動対応を重点的に検証し、課題を全職員で共有している。

## ●町民の生命を守るためには、プラス1のリスク対応を判断する必要がある

トンガ沖の海底火山噴火で日本に津波が到達した令和4年1月16日。前日の午後6時半に総務課長から海面変動は多少有るが、注意報は発表されないようだと言われた。その日は安心して寝た。枕元に置いていた携帯電話の通知音で、津波注意報の発表を知り、テレビを付けて着替えながら、避難所の開設について思いを巡らせた。役場に向かう車の中でラジオ聞きながら、奄美大島で1.2メートルの海面変動があって警報、注意報が発表されたと思った。と同時に疑問に思った。トンガはオーストラリアの東にある。津波が日本に到達するまでの間に、グアム、サイパンで観測されなかったのだろうか。何が起きているのだろうか。不安を覚えた。一方で注意報が

発表された以上、対応を即座に決めなくてははいけない。宮城県は注意報だが、警報級の対応を取ろうと決断した。何が起きているのか得体の知れないものに対し、気象庁の想定にプラス1のリスク対応を選んだ。令和3年3月20日に震度5弱を記録した地震が発生し、津波注意報が発表された際も、津波防災の懸念材料だった沿岸部の防潮堤の開閉扉がまだ完成していないことも考慮し、同様の対応を選択していた。

1,948世帯に避難指示を出し、避難所を5カ所開設した。避難所に避難した方は最大21人、車避難の車両が約50台あったが、町内に整備した防災広場やスーパーの駐車場などにはかなりの数の避難者が車で避難していたと聞いている。町長として町民の生命を守るためには、プラス1のリスク対応を判断する必要があると考えている。町職員は規定に沿って仕事をする。その規定を越えた対応を、職員に指示できるのは首長だけだ。トンガ沖の場合は、大きな浸水被害がなかったため、空振りという人がいるかもしれないが、私は気にしない。東日本大震災を経験したものとして、大きな被害が起きた時の苦しさや悲しみ、大変さを知っているから。

## 2 被害の状況

【人的被害】軽傷 1人

【住家被害】全壊 1棟、半壊 2棟、一部損壊 362棟

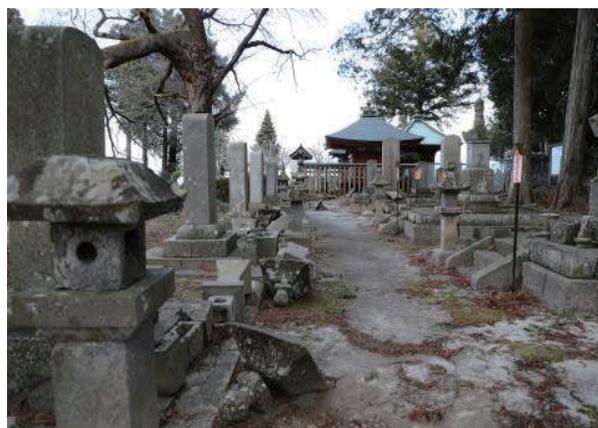
※物的被害は、令和3年2月13日福島県沖を震源とする地震と令和3年3月20日宮城県沖を震源とする地震による被害を合計したもの

【最大停電戸数】95万戸（経済産業省令和3年2月22日現在）

【停電】約2,000戸



地震で崩れた石塀  
(亶理町提供)



墓石が倒れるなどの被害を受けた亶理伊達家歴代墓所  
(亶理町提供)

## 3 災害の時系列

2月13日(土)

(山田町長)

午前中はスポーツや芸術・文化活動などで活躍した者及び団体を顕彰する亶理町スポーツ賞・文化賞の顕彰式が亶理町中央公民館であり、式典に参加した。午後は公務が無かった。

23:07 地震発生

23:08 災害対策本部設置

(山田町長)

家業である味噌醤油醸造の会社兼自宅にいて、午後10時前には就寝していた。いつも枕元に携帯電話を置いている。緊急地震速報が鳴ると同時に小さい揺れが始まり、目が覚めた。町は震度5強以上で災害対策本部を設置する。大きな揺れだったので、すぐに役場庁舎に向かお

うと思った。一番に頭をよぎったのは津波の発生の有無だった。テレビを付け、災害情報を入力できるようにしながら、着替えた。着替えている途中で震度が出た。亶理町のある宮城県南部は震度6弱だった。町長に就任して以来、就寝時間の災害対策本部設置は初めてだった。東日本大震災の揺れは3分近く続いて恐怖を覚えた。2月13日の地震は揺れている時間は短かったが、東日本大震災よりも揺れ自体は大きかったように感じた。

#### 23:15 自宅を出発

(山田町長)

同居している母の無事を確認して、自家用車で役場庁舎に向かった。会社兼自宅前の道を挟んで向かいに本宅があり、妻と息子が暮らしている。その時点で2人の安否確認はしなかった。いずれの家屋も津波浸水域の外にあり、万が一、津波が発生したとしても大丈夫だと考えたからだ。自宅から役場までは車で5分もかからない。運転していて路面状況には注意した。夜で暗かったので、よく見えない部分もあったが、倒れたブロック塀や家がないか気を付けながら移動した。役場到着までの間に目立った建物被害は確認できなかった。また沿道の家に灯りがついていたので、停電は起きていないと思った。普段、町内では23時を過ぎると車はあまり走っていない。当日は夜の時間帯にしては、海方向の道路も内陸方向の道路も、全体的に車が多いという印象を受けた。この地域では親と同居していない世帯が多い。実家や親の様子を確認するため、車を走らせている人が多いのではないかと思った。

庁舎に到着した時点で、既に総務課安全推進班の職員をはじめ10人足らずの職員が登庁していた。開口一番、被害状況を尋ねた。ライフラインの確認などが始まっていて、町営住宅のガスが止まったり、断水したりといった断片的な情報が届いていた。

#### 23:29 防災行政無線で津波がないことと一部停電の情報を発信

(山田町長)

役場から発信した最初の防災行政無線だった。津波の心配がないし、電気、水道も概ね大丈夫そうだったので、避難所を開設する必要は無いと判断した。その一方で、車が多かったので、避難所が開設されると考え、移動を始めている住民がいるのではないかと考え、職員を各避難所に向かわせた。少しでも早く対応できるように、担当者が揃うのを待たず、到着した順番に避難所に出発させた。自主避難者が訪れた場合、車両の誘導や情報の提供ができるように、しばらく職員の配置を続けた。実際に自主避難してきた住民がいた。車で待機してもらい、1時間ぐらいたったころ帰ったという。揺れが大きかったほか、沿岸部に近い一部地域で停電が起きたので避難したとみられる。

2月14日(日)

#### 0:10 第1回災害対策本部会議

(山田町長)

災害対策本部会議には各課の課長クラスが9割方集まっていた。まだ到着していない課は班長が代理で出席し、全ての課がそろっていた。私からは大きな地震があったが、住民が不安にならない、困らないような対応をしていこうと呼び掛けた。第1回の時点では職員全員の安否確認はできていなかった。把握している範囲で被害情報などを報告し合った。自主避難者の対応、町営住宅の断水に対するポンプでの応急措置、庁舎3階の破損、逢隈保育園、亶理保育所の天井の崩落、町保健福祉センターの一部天井の剥離、「わたり温泉」のエレベーターの停止と玄関の柱の亀裂、図書館ペDESTリアンデッキの剥離などの報告があった。水道は配水管か

ら個人宅に引いている給水管で被害がでた。給水管は震災後、耐震管に切り替え、骨材のつなぎ目が揺れに強いものに交換していた。

第1回の災害対策本部の後、本宅に電話して妻と息子の無事を確認した。

0:15 東北電力より町内2,000戸停電中と連絡あり

0:25 消防団がパトロール開始。歩ける範囲で住んでいる地域の被害を確認

0:58 東北電力より停電完全復旧の連絡あり

防災行政無線で停電完全復旧と通電火災注意喚起の情報を発信

1:06 避難所への職員配置を解除

1:10 全職員の安否確認（290人中257人参集。33人参集不可）

（山田町長）

災害発生時は総務課前のホワイトボードに被災情報を書き込むことになっている。第1回から第2回の災害対策本部の間はホワイトボードの記された情報を収集して頭の中で、その後の対応を整理していた。1時過ぎに山元町の全町断水がホワイトボードに記された。情報の出所は山元町在住の亘理町職員とみられる。

1:40 **第2回災害対策本部会議**

（山田町長）

亘理警察署、亘理消防署、消防団、陸上自衛隊船岡駐屯地も会議に加わった。被害の情報共有と今後の活動の方針を決めた。亘理中学校、吉田小学校に自主避難していた車が帰宅したことの報告があった。上下水道は異常なし、亘理中学校で一部コンクリートの落下、中央児童センターでの壁の崩落などの報告があった。この時点では町の施設を職員が確認した情報が中心だった。警察からは町内で目立った異常はないことが報告された。消防からは火災、救急の要請はない一方、町内で200リットルの灯油タンクが転倒したとの情報があり、吸着マットで対応しているとの発言があった。消防団からは団員124人が町交流センターに参集し、パトロールで壁の倒壊が3箇所あったことが報告された。

本格的な被害状況の調査は午前7時から始めることを確認した。町長として明るくなって、周囲の状況を十分確認できるようになってから調査を行ってほしいと指示した。道路、排水路などは暗い中で被害状況確認は難しいし、何より職員が二次被害にあってはいけないという点は、震災後、庁内で徹底されている。

第2回の報告を受けて、町内は大きな被害はなく、だいぶ落ち着いている印象を受けた。会議後、総務課長と総務課安全推進班を残していったん帰宅させた。私はその後も町長室にいて町外も含めた地震被害の全体像をテレビニュースやネットで調べていた。

3:39 山元町より給水支援要請

（山田町長）

亘理町の貯水場が水漏れしているという情報はあったが、水道には影響が無かったので応援することを決め、上下水道課が町所有の給水車1台に給水を始めた。その日は山元町役場から直接、亘理町役場に給水支援の要請が来たが、通常は日本水道協会宮城県支部で要請をまとめて、そこから連絡が来る流れになっている。隣の自治体ということもあり、手続きを省略して現場判断で水を届けることにした。

5:00 上下水道課が給水車で山元町への給水支援に出発

7:00 被害状況の調査を開始

(山田町長)

町長室で朝を迎えた。近くのコンビニエンスストアが通常営業していたので、朝食を職員に買ってきてもらったと思う。現地調査に合わせて職員が登庁した。都市建設課は町道、農林水産課は田んぼの液状化、排水路の損傷など、各課が担当する施設、設備などを調べた。この中で、瓦の被害を受けている家が目立つとの情報が入ってきた。ここで、第2回災害対策本部の時点は搬送の報告はなかったが、けが人がいなかったのか気になった。

私自身、午前中に2時間ほどかけて町内の沿岸部から内陸部まで巡回した。大森山の貯水槽に水を上げる送水管が被害を受けたというので、そこの確認もした。道路の被害状況や、住宅の屋根瓦の被害、決壊が心配だったため池の安全確認もした。気になっていた山元町の給水支援の様子も見に行っただ。住民がたくさん並び、取材のカメラも来ていたので、見つからないようにその場を後にした。午後は帰宅した。会社兼自宅は机が曲がったり、書類が落ちたりしていた。本宅は食器棚から食器が飛び出し、すさまじい状況だったと知った。その後、仮眠をとった。その日は緊急の対応が必要な連絡は無かった。

**2月15日(月)**

**8:45 第3回災害対策本部会議**

(山田町長)

水路、農業施設の被害、貯水池の送水管の破損のほか、教育委員会からは伊達家の歴代御所の石灯籠など28基が倒れているとの報告があった。財政課は復旧復興関係の事業について、専決処分、新年度補正予算などで対応するといった説明があった。消防からけが人の報告があった。隣の岩沼市の病院に搬送したため、把握に時間が掛かり、第2回災害対策本部に報告が間に合わなかったようだ。私からは村井嘉浩知事から必要な支援について県に連絡してほしい旨、連絡があったことを報告した。西村明宏衆院議員、和田政宗参院議員から見舞いの電話があり、その際に交付税措置や補助金などの対応を取りたいと伝えたことを話した。深刻な被害の報告は無かったが、2月16日にかけて雨、暴風の恐れがあるため対策本部を継続することにした。

**2月16日(火)**

罹災証明書、被災証明書の発行開始

**2月18日(木)**

**災害対策本部廃止**

山元町への給水支援を終了

**2月27日(土)**

瓦、内外壁、ブロックなどの搬入開始

**4月30日(金)**

瓦、内外壁、ブロックなどの搬入終了



役場庁舎近くの町有地に運び込まれたコンクリートや瓦  
(亶理町提供)

## 1 齋藤町長からのメッセージ

山元町長 齋藤 俊夫

## ●脆弱だった大震災前、津波対策進めたが悩ましい現地再建、津波なしで安堵

宮城県初代危機管理監として取り組んでいた宮城沖地震をターゲットにした備えを、山元町長になってもやってきた。ただ、宮城沖地震の被害想定は津波高はせいぜい3メートルで、東日本大震災と比べてちっぽけな想定だ。大震災前に、町としての危機感をどこまで持ってできていたかという、ちょっと脆弱な備えだった。

大震災を踏まえ、消防団員や町の職員の殉職者も出したので、津波到達時刻の30分前には活動を切り上げるという制限をいち早く設け、二次災害的犠牲者を出さないようにしていた。また、津波浸水区域の土地利用制限のために、災害危険区域（※2016年4月1日から名称を「災害危険区域」から「津波防災区域」に変更）をいち早く設定し、高台移転に象徴される安全安心まちづくりに取り組んできた。車避難を前提にした避難態勢も確立してきた。JR常磐線の内陸移設で高架にし、20箇所あった踏み切りを5箇所に留めることができたので、避難に時間を取られることが解消されてきた。

後世に誇れる新生山元の安全安心なまちづくりに向けて、一定の備えを進めることができた。ただ、現地再建の方もいるので、大きな津波があったら一定の被害は目に見えている。悩ましい思いで過ごしてきた。最も怖いのは津波なので、津波警報が出たときの避難広報体制を一番気にかけてきた。

地震が起きて、揺れの強さにはビックリしたが、震源地と津波の有無を確認しなければとテレビを付け、まもなく津波の恐れがないということで安堵した。大震災で、苦い、辛い思いをしたので、それだけは繰り返したくない。絶えずそういう思いを持っている。全国の津波経験をしていない首長に比べたら、危機意識はぜんぜん違う。

## ●救助法の適用なく、隣接の新地町と同等の国県の支援なし

雨漏りのためのブルーシートの需要は多かった。町としても一定の確保をして支給した。県は要件に合致しなかったということで、災害救助法の適用をしなかった。県全体では山元町の被害がいちばん大きく、仙台の方にいくと少ない。救助法が適用された隣の福島県新地町は、国や県からの一定の財政支援が受けられる。適用してもらいたかった。

救助法の適用については、問題提起をして見直しを求めている、地元紙でも取り上げられた。町としては、町民に実質的な格差がないような支援をした。その後、町の持ち出し分は特別交付税を約束してはもらい助かった。

## ●震災で使えなかった反省で庁舎を耐震化＝通信施設の保守点検も

東日本大震災で、災害対応の拠点になる行政庁舎が使えなくなったので、脚元は大事だと耐震化してよくなった。通信施設も大きな揺れで不具合を起こしたので、お金がかかっても機材の保守点検は大事だ。防災行政無線（同報系）の保守点検による品質保持の他、防災行政無線（移動系）の無線機を約100台確保した。

防災備蓄は当たり前。その次は、図上訓練に代表される訓練を導入して、いざというときのトレーニングを積み重ねることが大切。最後の頼みの綱の自衛隊との顔の見える関係も大事。町の災対本部に電力などのライフラインの人が入ってもらうと、全然違う。営業所があるのだから、普段の訓練にも一緒に入ってもらう。最低限の行動マニュアルの策定を含め、関係機関との協同訓練を進めてきた。



新庁舎オープンの2019年5月7日（山元町提供）

## 2 被害の状況

【人的被害】 軽傷 2人

【住家被害】 半壊 55棟、一部損壊 1,315棟

（福島県第55報から）

## 3 災害の時系列

### 2月13日（土）

23:07 福島県沖地震発生 山元町震度6弱、津波の心配なし。

#### 災害対策本部設置（震度で自動設置）

（齋藤町長）

この日は土曜日だったが、町長としての公務ではなく、社長をしている農水産物直売所「夢いちごの郷」の2周年の感謝祭があった。会社の一員として店に出て、イチゴの出し入れで忙しくしたので、疲れて早めに床に就いていた。

緊急地震速報で目が覚めた。地震の強さにはビックリしたが、最初に津波が気になった。テレビを付けて、震度6弱だから災対本部が自動設置なので、役場へ出る着替えをしながら、テレビやスマホで情報を集めていた。

役場には車で来た。15分か20分には到着していた。途中のまちでは、人の動きもなく、何件か明かりがついていたぐらいだった。危機管理班を中心にしたスタッフは既に来ていて、私が到着するのを待っていたので、「津波なくて良かったな」という話をした。

地震の被害は多少あっても、津波の大変さのようなことはない。地震で怖いのは火を使っている時間帯の火災だ。東日本大震災だけでなく、県の職員時代に阪神大震災の勉強もしていたし、宮城沖の備えも人一倍携わっていた。そういう経験がなければ、いざというときにオタオタする、判断に迷うことは否めないと思う。大きい場面になればなるほど、何をどこから対処していいのか、トップを含めて職員も浮き足立ってしまうから。

23:30 第1回災害対策本部会議

（齋藤町長）

夜中なので、外に出て日中のような被害状況の把握ができない。明け方を待って被災状況を把握しようということを基本にした。消防は、岩沼市、亘理町との広域消防だが、この段階では特にけが人の連絡もなかったと思う。

そのなかで、水道の断水の情報がいち早く入ってきた。大きな揺れだったので、そうなのかなど。生活用水の本格的な利用は明け方からなので、漏水が続くのを避けるため、町内の水道を停止することにした。

2月14日(日)

0:03 町内水道停止

0:12 避難所開設(4箇所)

0:18 全避難所開設(町内10箇所)

(齋藤町長)

全避難所を開設したが、その時点では避難者がいなかったという報告だった。

0:33 「町内断水のお知らせ」防災無線、メール配信

0:55 職員安否確認(227名中141名確認)

1:00 避難者数3箇所で29名

1:15 宮城病院から給水車の要請

1:26 中央公民館、防災拠点・山下地域交流センター、山下小学校を除き避難所閉鎖

1:35 自衛隊LO(連絡幹部)到着(災害派遣の要請は、まだ行っていない状況)

1:40 第2回災害対策本部会議、職員体制規模を縮小し7時の災対会議で集合を確認

(齋藤町長)

給水車両が必要になると考え、日本水道協会に派遣要請を指示していた。水を確保すれば、電気もあるし、家庭での生活は可能だと判断した。いろんなことを経験して思うが、いちばん機能するのは日水協を中心とした水の応援派遣体制だ。

3:45 負傷者2名を確認、町内の7割、約2,900世帯が断水状態

7:00 第3回災害対策本部会議 消防団町内巡回開始、各区長へ給水情報等の連絡、3班体制で建物被害調査を実施など

(齋藤町長)

最初は、給水作業が円滑に進むように進めていた。被災した町民も私も、朝になって明るくなってから、家の屋根瓦などの被害に気づいた。



災害対策本部会議(山元町提供)

8:30 給水所給水開始(町内8箇所)

10:35 第4回災害対策本部会議

14:45 第5回災害対策本部会議

17:00 避難所閉鎖

(齋藤町長)

避難所は午前9時には、利用者ゼロになっていたため、17時に完全撤収した。

2月15日(月)

---

9:00 罹災証明受付開始

(齋藤町長)

家屋被害が日増しに多くなってきたのは、16日あたりから。50件、100件と罹災証明の申請が増えてきた。改めて揺れの加速度を確認したところ、東日本大震災の地震よりも大きかったと分かった。最終的には1,600件の罹災証明の申請があった。

## 1 立谷市長からのメッセージ

相馬市長 立谷 秀清

## ●対策本部では首長がリーダーシップ＝東日本で人生観変わった

災害対応に方程式があるわけではなく、そのときどきの選択肢を考えることになる。その場になってみないと分からない。想定通りにはならない。

全国市長会と国交省の協定があるので、被災市長が整備局長に報告して、支援を要請するのが一番早い。当該県の市長会会長が、他の市からの支援の受付をするが、県の対口支援もある。

支援を受けても、市町村の対策本部では首長がリーダーシップを取るべき。災害経験のある自治体からの支援チームであっても、地元市長の前に出るなど言っている。あくまで、アドバイスで、本部長である市長の命令の形になる。災害の専門家ではないが、この地域のことを一番知っているのは市長。被災者のことをいちばん知っているのは市長だから。脳みそに汗をかいて、一生懸命考える。東日本大震災の時は、数日間寝なかった。

相馬市は、東日本大震災だけでなく、洪水も経験して、これだけ鍛えられていても大変だった。でも、この地震で“傷は浅いぞ、しっかりしろ”と、落ち着いていられたのは、経験が大きい。あれだけ犠牲を出し、何千人も家が流され、俺の育った家も流された。一面がれきの目の前の光景に、俺の人生でこんなことがあるんだと、人生観が変わる。ああなったら、気の強さでやるしかない。

今回、課題になったコロナ対策は、以前からシミュレーションしていて、私が指示をしなくても、考えたとおり動いていた。なので、テレビカメラの前でも、「職員がちゃんとやっている」と言った。コロナ対策は、私が医師だからと言うより、首長としての経験が大きい。

## ●危険地域の高台移転で津波が来ても「大丈夫」

11年前の一番の被害は津波だった。地震があっても、今は安心なのは、もし津波が来ても大丈夫だと思っているから。危険地域は高台移転しているので、津波で人が亡くなる心配をしなくていい。低いところには誰も住んでいない。

仕事で海の近くにいる人もいるが、今回の地震は夜中なのであまり心配していなかった。昼間は働かないといけない漁協の人たちには、夜入るなど言っていたし。

東日本大震災の後は、被災者が住宅や職、生活の場を得て、子どもたちが健やかに育っていくためには、次に備えながらも、その人たちが大震災を引きずらないようにすることが大事だった。

## ●市役所を親せきの母屋のような場所に

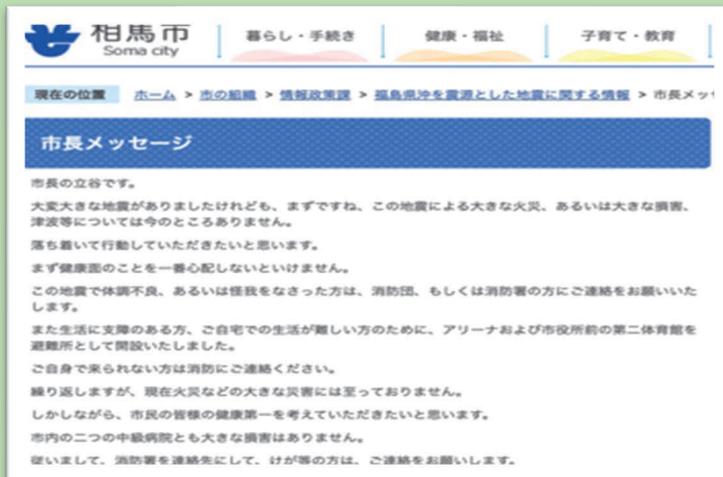
東日本大震災の前から、市役所の建物は古いし空調もダメだし、いずれ建て替えなければならないと考えて、俺の代ではとても造る体力はないが、将来のためにと大震災の2年前から年一億貯金してはいた。

東日本大震災の後、公共事業では十分な災害対策をこころがけ、市役所も免震構造で、廊下も6メートルとし、災害時の拠点になるつもりで作った。大震災では、いざという時に市民がいっぱい集まってくるのを目の当たりにしていたので、市民が市役所に収容出来る仕掛けになっている。4階の屋根裏には、備蓄品がストックしてある。市役所は、災害の時の親せきの母屋みたいなものだからと。

## ●原稿なしの防災行政無線の呼びかけ、そのまま残る＝ISOの導入で記録の重要性浸透

市のホームページには、地震から43分後、防災行政無線でその時の語った言葉がそのまま残っている。対策本部会議が終わってすぐ、原稿を書かないまま、思いつきで話した内容だ。

相馬市は、東日本大震災の前から、ISO9001に基づく「行政経営システム」を導入しており、後世のために記録を残しておくと常々言っているから、担当者がそのまま残したんだろう。



(相馬市ホームページから、2021年2月22日付け)

## 2 災害の概要

発生：令和3年2月13日 23時7分

マグニチュード：7.3

震度：6強 相馬市

(最大震度6強 宮城県蔵王町、福島県相馬市、国見町、新地町)

場所及び深さ：福島県沖 深さ55km

津波：若干の海面変動はあったものの実被害は無し

## 3 被害の状況

【人的被害】軽傷 5人

【住家被害】全壊 6棟、半壊 114棟、一部損壊 2,719棟

(福島県第55報から)

## 4 災害の時系列

### 2月13日(土)

#### 23:07 地震発生 相馬市震度6強

(立谷市長)

ソファに女房と座ってテレビを見ながら、お茶を飲んでいたら地震があって、台所と居間の間にあるガラス戸が倒れた。その辺の物もバタバタ倒れてきて、家中がガラスの破片だらけになった。停電でテレビは消えていた。便所から水が噴き出したので、家内が元栓で止めた。

私は、「家のことはお前に任せる、頼むよ。」と言って、パジャマで行くわけには行かない

ので、自分の部屋で着替え、車で市役所へ行こうと思った。家中が真っ暗で分からないので、自分の部屋まで行くのに時間がかかり、真っ暗な中で服を着た。スリッパを履いていたから何とかだった。

自宅から市役所はすぐそこで、歩いて5分ぐらい。車で最短コースで向かったら、ブロック塀が倒れていて行けない。バックで戻って、ぐるっと回って、市役所についた。停電で真っ暗で、着くのに15分ぐらいかかった。歩いた方が早かった。

でも、10年前に比べたら、最初からたいしたことはないと思った。10年前は長く続いた地震の揺れが止まっていたし、そんなにビックリするほどではない。家もへしゃげてはいない。火災の心配はしたが、煮炊きの時間は過ぎているし、常日頃からガス元栓とかの話はしているので、市民を信じるしかなかった。

### 23:30 第1回災害対策本部会議

(立谷市長)

市役所に出てきて、津波がないと分かった。到着した時に「病院」と言ったと思う。病院が機能しないと、建物や家具転倒とかでケガした人がいても、救急車の行き先がないから。

市長が来たら、その瞬間に災対本部が始まることになっている。本部会議で、病院の機能が保たれることを確認した。



(第1回災対会議の様子、相馬市提供)

### 23:51 防災無線で市民へ呼びかけ

(立谷市長)

相馬市民の日頃のみんなの危機意識は高い。震災を経験している分だけ腹が据わっている。あの時みたいな、大規模なことが起きるのではと言う不安があるはずで、大規模災害ではないから落ち着けということを行わなければと、防災無線で直接、市民に呼びかけた。

とにかく、市民に安心しろと言いたかった。津波でもっていかれる心配はない。どこかの集落が壊滅的に家が壊れているような大規模災害ではないと判断したから。

いざとなったら市長の声が大事だ。市民からは、ダミ声で何を言っているか分からなかったとも言われたが、市長の声を聞いて落ち着いたという人もいたので、それなりの効果があっただろう。

市民は普段、さんざん市長の悪口を言っているが、イザという時は市長の顔を見る。東日本大震災で強烈に感じた。職員だけでなく、市民もリーダーを見る。震災のあと、いろんな災害に遭った市長には、最初に「弱音を吐くな。大丈夫だと言うこと、あんたの顔で市民に示せ。

不安にさせることは一番良くない。」と言いつけている。

#### **市長メッセージ**（防災無線により住民に呼びかけ）

市長の立谷です。

大変大きな地震がありましたけれども、まずですね、この地震による大きな火災、あるいは大きな損害、津波等については今のところありません。

落ち着いて行動していただきたいと思います。

まず健康面のことを一番心配しないといけません。

この地震で体調不良、あるいは怪我をなされた方は、消防団、もしくは消防署の方にご連絡をお願いいたします。

また生活に支障のある方、ご自宅での生活が難しい方のために、アリーナおよび市役所前の第二体育館を避難所として開設いたしました。

ご自身で来られない方は消防にご連絡ください。

繰り返しますが、現在火災などの大きな災害には至っておりません。

しかしながら、市民の皆様の健康第一を考えていただきたいと思います。

市内の二つの中級病院とも大きな損害はありません。

従いまして、消防署を連絡先にして、けが等の方は、ご連絡をお願いします。

### **2月14日（日）**

**0:00** スポーツアリーナそうまの柔道場と第2体育館に、テントを使った避難所を設置。発熱者は別建物に誘導。1:10には、医師と病院救急車で発熱者の抗原検査の体制を構築。

（立谷市長）

市役所到着の前に、車に乗ってぐるっと回ったので、既に避難所の用意を市職員が始めているのは見ていた。コロナ禍での避難所のあり方の訓練をしてきたが、それが活かされたと思っている。

避難所となるアリーナのホール天井が落下し、ホールを使わないで第2体育館で開設ということが、第1回災対本部の記録に残されているが、判断した記憶がない。俺にあげなくても現場で判断していたのだと思う。

**2:00 第2回災害対策本部会議**

人的被害や避難所の状況、停電や断水、道路通行止め状況を確認。小中学校は休校せず、児童生徒の安否確認を指示。

**6:00 第3回災害対策本部会議**

避難者は最大92人、有熱者はなく、6時現在50人で朝食のパンを7時に提供。停電は復旧。自衛隊、国交省地方整備局、福島県からのリエゾン到着。次回から報告書様式での報告を確認。

**9:00 第4回災害対策本部会議**

死亡事例なく、けが人5人を確認。災害廃棄物を分別した集積場を設置。

**15:00 第5回災害対策本部会議**

翌日からの雨対策を確認。ペットボトルの水の配給。ブルーシートを1世帯2枚配布。地整

や県にブルーシートを要望。

**19:00 第6回災害対策本部会議**

ブルーシート 1,100 枚配布。避難所は 19 時時点で 9 人。簡易水道の瓦の破損と修理を県の瓦組合と調整。

**2月15日(月)**

---

**9:00 第7回災害対策本部会議**

避難所避難者 3 人。9 時から災害廃棄物の受け入れ開始。

**16:00 第8回災害対策本部会議**

豪雨に備え、小中学校で 14 : 15 に一斉下校。誘致企業 34 社のうち 14 社に被害を確認。

**2月16日(火)**

---

**10:00 第9回災害対策本部会議**

避難所避難者 4 人、ブルーシート配布継続。浜の駅松川浦営業再開。

**2月17日(水)**

---

**16:00 第10回災害対策本部会議**

避難所避難者 4 人、近日中に退所予定を確認。避難者の自宅を警察パトロール実施。常磐道が夜に開通。

**2月18日(木)**

---

**16:00 第11回災害対策本部会議**

避難所避難者 3 人、17 日夕方から保健師の健康相談を実施。ブルーシートは量販店で購入可能になり、翌日で配布終了。

**2月19日(金)**

---

**16:45 第12回災害対策本部会議**

避難所避難者 2 人、20 日で避難所閉鎖、本部会議の次回終了を確認。罹災証明の受付を 24 日から開始。

**2月20日(土)**

---

**16:00 第13回災害対策本部会議**

11 時に避難所を閉鎖。初動対応終了でいったん本部会議終了。19 日までにブルーシート 6,554 枚配布、ペットボトル水 33,104 本配布。20 日 15 : 30 現在、災害廃棄物 557 トン受け入れ。

## 1 大堀町長からのメッセージ

新地町長 大堀 武

## ●助けを求めよ、プライドは関係ない

災害が大きくなったら、ブルーシートや土のうなどは必ず必要になってくる。足りなくて困ったら、素直に頼んだ方がいい。助けてくれと発信した方がいい。町民のことを考えたら、私のプライドは関係ない。

水害で給水管が損傷した際も、ホームページで助けを求めることにした。職員からはやめてほしいという声もあったが、実施したらかなり水をいただいて配れた。町民が助かるなら、それでいい。発信すれば、ありがたいことに応援が来る。支援して下さる方は、私を助けようなんて思っていない。町民のために送ってくださる。声を上げないと、応援は来ない。お世話になったところにお返しをする基金をつくりたいくらいだ。

## ●協定先は遠い自治体とも

災害協定は、離れた自治体とも結んでおくべきだ。近い自治体だと、同時に被災してしまう恐れがある。ブルーシートがなくて困り、協定を結んでいた三重県四日市市に支援をお願いした。し尿処理場が損傷し、技術系職員がいないので四日市市をお願いした。滋賀県竜王町、和歌山県みなべ町などとも結んでいる。「あちらで何かあったら応援に行くんだぞ」と、日頃から職員には言っている。

## ●若手職員に経験を

総務課長だった当時「5年後に職員の4分の1が入れ替わる」と言っていたが、10年たって半分が入れ替わった。いまは管理職が若い。我々の時代は定年前にしか入れ替わらなかったが、40代もいる。中間管理職を長く務めていないので、上と下をつなぐことがなかなか難しい。東日本大震災は、いまの課長職が係長として経験したぐらいではないか。

東日本大震災の経験がない職員が多いにしては、2021年の地震対応は頑張ったと思う。2分の1強の世帯が何らかの家屋被害に遭った。家屋やインフラが大丈夫か調べようにも経験ある職員が少ない。調査班を出そうにも、職員は80人ぐらいしかおらず、人数が少ない。日常業務をこなしながら割くのは難しい。苦肉の策として東日本大震災を経験したOB職員を活用、5～6人でローテを組んだ。若い職員も力をつけたのではないか。

若い職員には、プロとしての資質を上げるよう言っている。パソコンを開けば勉強した気になるが、本を読むなどきちんと学んでほしい。決められたことをやるだけでなく、仕事に関係する法律は勉強してほしい。

## ●災害は休んでいるときに

災害はわれわれ町職員が休んでいるときや、いないときによく起きる。地震や水害、深夜か土日ばかりだ。日中なら対応も早いですが、現実はそのようではない。「平日の昼間に起きた東日本大震災はままだ、いつ起こるか分からないから、常に心してくれ」と職員には言ってきた。総務課長時代から町民には「役場職員がいるときに災害が起きるとは限らない。役場をあてにするな、役に立たないと思ってくれ。自分で考えて」と言ってきた。

令和3年2月の地震は、保育所などを除いて全職員参集だった。まずは職員の安否確認をした。深夜にもかかわらず、思ったより集まり状況はよかった。

首長は、できるだけ地元にいるのが鉄則だ。出張などを除いては、災害のことも考えて、できるだけ町外へ出

ないようにしている。管理職にも、町から1時間を超えて外出する場合は次の指揮権がある者に「頼むよ」と伝えておけ、と言っている。

災害は、種類や時間帯で対応が違う。地震と津波はいつ起こるか分からない。時間帯によっては特に火災に警戒が必要になる場合もある。職員不在、最悪の場合を想定しないとイケない。風水害は備える時間がある場合が多いが、避難指示は暗くなってからは出さないようにしている。首長は、どこが雨だと危ないかというように、災害ごとに危険な地域を頭に入れておくべきだ。避難指示のエリアも必要以上に出さない。

### ●首長の顔や声という安心感

深夜の地震から一夜明けて被害が分かってきた。全壊の家もあるし、崖に建っている家の被害もひどかった。不安になって私に連絡をしてくる人もいた。小さい町なので、私のところに直接来る人もいる。

防災無線で朝、町民に呼び掛けの放送をした。自分なりの言葉で、原稿を書いた。お見舞いを含めて、注意しながら頑張ろうという気持ちを込めた。私はしゃべることは得意ではないが、自分の気持ちを伝えられるのは私しかない。

発生から1週間ぐらいしてから町内を回った。町民の声を聞いて励ました。顔を見ながら「ガラスに気をつけて」とか「注意して作業してくれ」とか「怪我しないようにな」とか、そんなことだが、それで町民は安心する。職員にも現場には行けと言っている。

### ●災害救助法は自動適用を

災害救助法が適用されれば、支援策のレベルが違う。避難所開設の支援も違って来るし、ぜひ適用してほしいが決定が遅い。県や国会議員にはお世話になったが、震度6強なら自動適用してほしい。命と生きるための水や食料、寝床を確保するのに頭いっぱいの中で、こちらから「頼みます」「お願いします」なんて言わないといけないのはおかしい。

東日本大震災の時は救助法のことをよく知らなかった。避難所運営にもお金がつくとも知らなかった。町民には「自分のことは自分でやってくれ」と言ったが、救助法を知っていれば言い方も変わったかもしれない。自治体の首長の中で、県庁出身や国からの人は別だが、地元上がりの首長は救助法のことを知らないのではないか。

## 2 災害の概要

令和3年2月13日23時7分

福島県沖（北緯37.7度、東経141.8度）

マグニチュード7.3、震源の深さ55km

震度6強 宮城県蔵王町、福島県相馬市、国見町、新地町

震度6弱 宮城県石巻市、岩沼市、登米市、川崎町、亶理町、山元町、福島県福島市、郡山市、須賀川市、南相馬市、伊達市、本宮市、桑折町、川俣町、天栄村、広野町、楢葉町、大熊町、双葉町、浪江町、川内村

津波：石巻市鮎川0.1m（14日2時10分）、石巻港0.2m（14日1時44分）、仙台港0.1m（14日1時21分）、相馬0.1m（14日2時48分）

震度1以上を観測する地震85回（2月22日現在）

最大震度4：1回、震度3：5回、震度2：22回、震度1：56回



新地町内の崖崩れ（新地町提供）

### 3 被害の状況

【人的被害】 軽傷 3人

【住家被害】 全壊 22棟、大規模半壊 12棟、中規模半壊 30棟、半壊 114棟、準半壊 980棟、  
一部破損 340棟  
(福島県第55報から)

【避難所開設】 2箇所（防災センター、総合体育館）2世帯4人

【上水道】 2月14日0:45断水確認、2月15日16:00断水復旧

### 4 災害の時系列

#### 2月13日（土）

##### 23:07 地震発生

（大堀町長）

寝て、すぐのことだった。揺れで飛び起きた。寝るところに倒れる物はなるべく置かないようにしているし、タンスは大丈夫だった。津波が来ると思った。東日本大震災では到達するまで約40分だった。私の自宅は津波が来るかもしれない地域だ。津波の心配はないという情報をテレビで確認してから、役場に向かった。あまりに親分の登庁が早いのも、職員が大変だからということも考えた。



新地町役場庁舎議場（新地町提供）

### 23:39 災害地策本部会議

（大堀町長）

災害発生後、すぐにマスコミが被害を尋ねてくる。気持ちは分かるが、これから調査するのだから答えられない。2～3時間たたないと情報提供できない。東日本大震災ではマスコミ対応を企画担当と決め、総務課長の私は防災対応に専念した。今回のマスコミ対応は総務課長にした。



災害対策本部会議（新地町提供）

### 23:50 避難所開設（防災センター、総合体育館）

（大堀町長）

暗い時間帯は、職員を調査に出したくないが、そうも言っていないので、2～3人のチーム編成で指示をした。30分～1時間の短時間で引き上げるようにして何度も繰り返した。職員の安否確認にもなる。私は少年自衛官上がりなので、そういう訓練を受けてきた。日中ならもっと長い時間行かせるが夜なので、詳細は明るくなってからでいい。大きな道路に陥没がないかなどを見てもらった。海側には家がなくて人がいないので、少しは安心感があった。津波

は来ないとの情報だったが、職員には海側には行くなと指示した。行政区長にも連絡をして、情報収集をした。

## 2月14日(日)

### 0:45 第2回災害対策本部

各課職員の安否確認、各課より被害報告

### 2:00 第3回災害対策本部

各課より被害報告

### 4:10 第4回災害対策本部

各課より被害報告、災害ごみの受入れ場所を協議

### 5:05 町長がリエゾンを通じて自衛隊に給水車を要請

(大堀町長)

毎年のように災害が起きて、水のことは気にしている。水の備えは必要だ。小さくてもいいのでタンク車の購入を考えている。

### 5:30 国土交通省職員2人来庁

### 7:00 第5回災害対策本部

各課より被害報告

### 7:25 福島県へ災害派遣要請の電話

### 7:55 防災行政無線で町長メッセージ

### 8:50 県リエゾン2人到着

### 10:25 第6回災害対策本部

各課より被害報告、給水について、15日より災害廃棄物処理

### 13:00 自衛隊による給水活動開始

### 15:00 第7回災害対策本部

## 2月15日(月)

### 8:30 第8回災害対策本部

各課より被害報告、大雨警報時の対応について

### 9:00 震災ごみの受入れ開始(新地駅東側)

(大堀町長)

災害ごみの処理は東日本大震災の教訓を生かして速かったと思う。町民課長時代に災害ごみの計画を策定したが、東日本大震災では予定地が全部駄目だった。どこに捨てるか場所の選定も大変だった。思った以上に面積は必要だし、ごみはすぐに出る。広いスペースを仮置き場として、車の出入りは一方通行にした。

### 9:30 ブルーシート、土のう袋配布開始

### 15:30 自衛隊給水活動終了、撤収

## 2月16日(火)

### 8:35 第9回災害対策本部

### 16:20 県知事来町

### 17:00 第10回災害対策本部

避難所閉鎖、通学路の危険工作物、補正予算、議会について

## 2月24日(水)

罹災証明・被災証明受付け開始

**2月25日(木)**

---

町ボランティアセンター（登録12人、活動7人）

**3月1日(月)**

---

住宅被害認定調査開始

（大堀町長）

屋根瓦の被害について、早くやらねばと焦って、悪い業者に引っかかった人もいたようだ。何度か、注意を防災無線で呼びかけた。新地町に入った団体に、ブルーシートかけをやってもらった。

**5月31日(月)**

---

**災害対策本部解散**

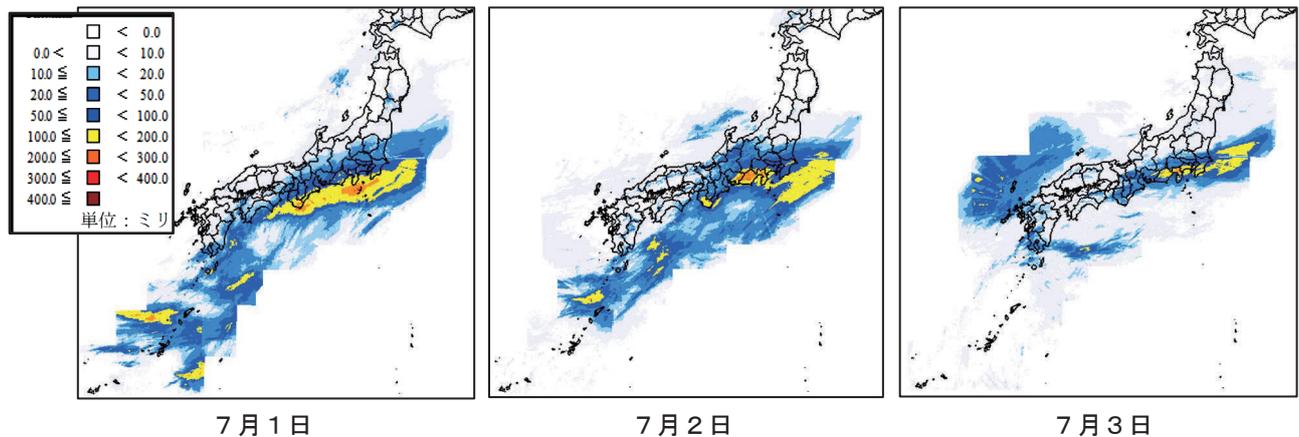
# 令和3年7月1日からの大雨

## 1 気象の概要

6月末から梅雨前線が北上し、7月1日から3日にかけて西日本から東日本に停滞した。前線に向かって暖かく湿った空気が次々と流れ込み、大気の状態が非常に不安定となったため、東海地方から関東地方南部を中心に記録的な大雨となった。

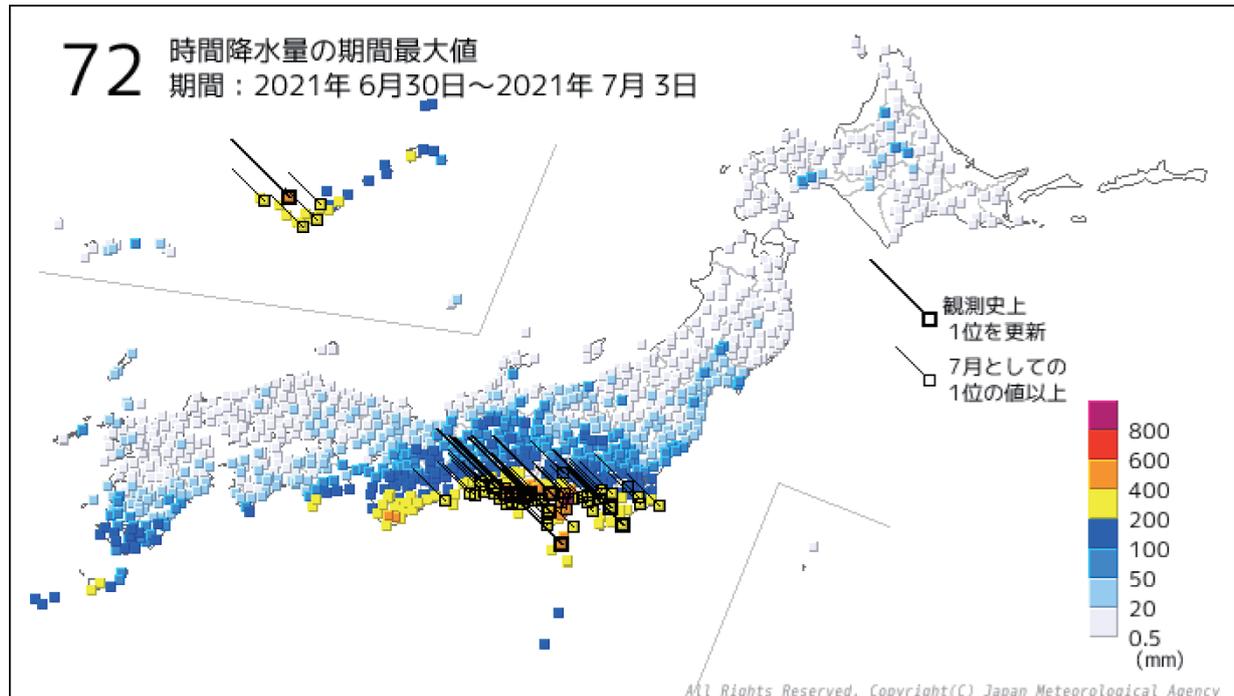
数日間にわたって断続的に雨が降り続き、静岡県の複数の地点で72時間降水量の観測史上1位の値を更新するなど、記録的な大雨となった。

注) 気象庁ホームページ：「災害をもたらした気象事例」（7月1日から3日の東海地方・関東地方南部を中心とした大雨）から



7月1日～7月3日の日降水量（解析雨量（※））（気象庁ホームページから）

（※解析雨量とは、気象レーダーと、アメダス等の雨量計と組み合わせて、雨量分布を1km四方の細かさで解析したもの。）



72時間降水量の期間最大値の分布図（6月30日0時～7月3日24時）（気象庁ホームページから）

東海地方から関東地方南部を中心に過去の期間最大値の1位を更新（観測史上1位又は7月としての1位）していることがわかる。

## 2 被害の概要

この大雨により、西日本から東北地方の各地で河川氾濫、浸水、土砂崩れ等が発生するなどし、死者・行方不明者 28 人、負傷者 11 人の人的被害が発生し、住宅被害は 3,632 棟に及んだ。このうち、特に被害の大きかった静岡県熱海市では、住宅地で大規模な土砂崩れが発生したことにより、死者・行方不明者 27 人、負傷者 3 人、住宅被害 98 棟の甚大な被害が発生した。

【人的被害】死者 26 人、行方不明者 2 人、重傷 2 人、軽傷 9 人

【住家被害】全壊 59 棟、半壊 115 棟、一部破損 342 棟、床上浸水 472 棟、床下浸水 2,638 棟

注) 消防庁ホームページ：「令和 3 年 7 月 1 日からの大雨による被害及び消防機関等の対応状況（第 35 報）」から



静岡県熱海市  
(消防庁ホームページから)



神奈川県逗子市  
(逗子市ホームページから)

1 落合市長からのメッセージ

平塚市長 落合 克宏

●市職員を信頼し、タクシーの中から「いち早く発令を」

平成12年から14年まで、市職員として防災課に在籍し、7都県市の総合防災訓練で約7,000人を集める自主防災訓練の担当をした。こうした経験に基づき、市長になったときから、危機対応の専門家として自衛隊の人に来てもらいたいとお願いしていた。採用した元・陸上自衛官の職員はここで3年目となり、コロナ対策も含めて危機管理上のアドバイスをしてもらっている。

現在の庁舎は、災害対応などができる設備を設け、平成26年に完成した。旧庁舎では防災課は別棟にあったため、新庁舎では市長の近くで災害対応が出来るような部屋や機材を設置し、何かあったら自衛隊や県の土木事務所、気象庁などが各組織で対応する会議室などが必要と考えていた。

当日の朝、災害対策本部会議を開くために、タクシーで市役所に向かう途中で、防災・危機管理監から「様々なデータから、氾らんはもう起きていると思われ、大変な状況になっています。」と報告があり、緊急安全確保（警戒レベル5）を出さなければならないとの進言があった。

消防や土木など、関連部署の職員は既に出動している。職員がこうだろうと思ったら、いち早く判断しなければならない。本来なら、災害対策本部会議の場で、目の前のモニターの数字を見ながら判断する。しかし今回は、警戒本部のメンバーが早急に「緊急安全確保まで出さないといけない」と考えたのだから、最終的に私が移動中のタクシーから「いち早く発令を」と判断した。

法改正によって「緊急安全確保」ができた経緯も興味を持っていた。6月の広報紙では、「緊急安全確保」等の各種避難情報について紹介していた。

「緊急安全確保」の発令を、非難されても仕方ない。空振りはいい。出さないで、何かがあったときの責任が重い。できるだけ、いろいろなデータをもとに、連絡や連携を取り、「緊急安全確保」を出すときには、覚悟を決めて出すしかない。

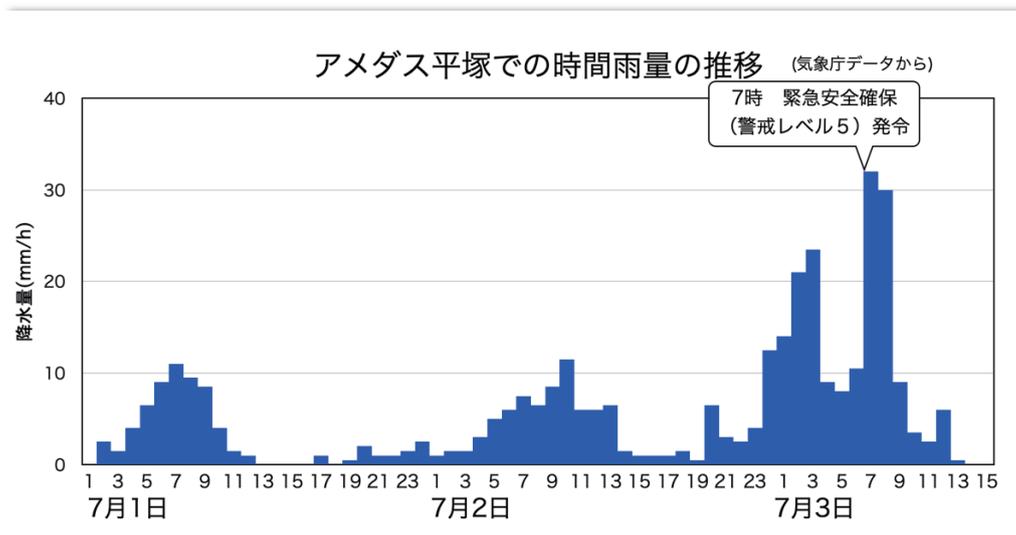
市民から「訳の分からないものを出された」と言われても仕方がないと考えたが、結果的に、非難はされなかった。同時期に熱海の被害があったからだろうが、平塚市はそれなりに災害に対して意識を持っているというお褒めの言葉をもらった。人的被害がなかったのが何よりだ。

県内の首長からは「大変だったね」と連絡があり、友好都市からも「大丈夫か」という連絡をもらった。平塚市が（「緊急安全確保」を）出したことで、他の自治体も躊躇なく発令できるようになったと言われるが、私たちは（法改正後、国内初を）狙って出したわけではなく、その時の状況では出さざるを得なかったというのが実情だ。

ただ、洪水浸水区域全体に発令したので、危険が及ぶ可能性が低い地域も含まれていた。今後は、絞り込んで、よりきめ細かい注意喚起をする必要がある。

## 2 災害の概要

平塚市では、7月1日未明から3日昼頃にかけて断続的な雨となり、この期間は1箇所（土屋）を除いた市内全ての雨量観測所で、連続雨量が300ミリを超えた。特に3日午前零時ごろから雨脚が強まり、同日は市内の雨量観測所の多くの地点で時間30ミリを超える雨量を観測した。また、緊急安全確保（警戒レベル5）の対象となった各河川の上流に位置する秦野市においても、同期間の連続雨量が300ミリを超えている雨量観測所があった。



## 3 被害の状況

住家の浸水被害 399 棟 (床上 14 棟 床下 385 棟)

河川被害 (3 件)、河川溢水 (1 件)、土砂崩れ等 (37 件)、道路の通行止め (13 箇所)

避難状況 (小中学校等 16 避難施設を開設) 最大避難者数 67 世帯 143 人 (7月3日 9時00分時点)

## 4 災害の時系列

### 7月1日 (木)

#### 4:10 大雨注意報

(落合市長)

7月1日午前から昼過ぎにかけて、相当雨が降っていたため、災害対策課にはデータを集めてもらった。

### 7月2日 (金)

#### 5:34 大雨警報 (土砂災害)

(落合市長)

2日も午前中はすごい雨だったので、このままだと土砂災害も起きるかもしれないと心配だった。民間気象会社の情報によれば、明るくなってから本降りとなる予報だったので、午後6時に、防災・危機管理監に「しっかり対応してほしい」と声をかけて帰った。

夜中にあそこまで降るとは予測できなかった。台風であれば多量の雨が降るのは分かるが、つかみどころがなかった。

1:15 土砂災害警戒情報

1:40 大雨警報(土砂災害、浸水害) 避難指示(金目川、鈴川沿いで浸水被害の恐れ)

対象 21,705世帯、51,803人

1:45 風水害警戒本部設置

2:00 避難指示(土砂災害警戒区域)

避難指示地域を対象 88,979世帯、198,690人に拡大

2:25 洪水警報

(落合市長)

避難指示を出し、2時25分に洪水警報、4時15分に避難所の開設など、公用携帯には災害関連の動きが全部入ってきて、状況を把握していた。

6:30 災害対策本部が立ち上がるため、6時半頃、自宅を出発する準備をしていたとき、秘書課長から公用車を回せないの、タクシーを呼んだという連絡があった。6時45分にタクシーに乗ったら、防災・危機管理監から連絡があった。

「様々なデータから、氾らんはもう起きていると思われ、大変な状況になっています。市民の皆さんの命を守らなければならない状況になったので、いち早く緊急安全確保を出してください」と。担当が分析し、早急に出さなければならないと進言してきたので、タクシーの中で判断して、いち早く「緊急安全確保」を出すよう指示した。

平成25年4月ごろにも、金目川に雨が降って堤防が侵食され、もう少しで堤防決壊のようなことがあったが、それも夜中だった。危機管理監から連絡があったときに、「氾らんが起きている可能性があります」と言われ、その光景を思い出した。いまから避難所に向かえば危険が高まる。自分の身を守ってもらうために、現状を市民に正確に知らせなければいけないと思った。

6:55 第1回災害対策本部会議

7:00 緊急安全確保(警戒レベル5)発令

対象 金目川流域

対象 88,979世帯、198,690人

7:04 防災行政無線放送

「警戒レベル5 緊急安全確保 金目川で洪水による浸水被害が発生している可能性があります。沿川に居る方で、安全な場所への避難が完了していない場合は、建物内のより高い所など、今いる場所より少しでも安全な場所へ直ちに移動してください。」

(落合市長)

10分ほどたって、7時過ぎに市役所に到着したら、「(緊急安全確保を)発令しました」と報告を受けた。

災害対策本部会議で、今の状況の確認や、降雨量の確認をし、次の対応をどうしたらいいか

を考えた。

本部会議の後、元・陸上自衛官の職員と話したら、「常総水害で川が氾らんして、屋根に人が登っていた光景が頭に浮かんだので、緊急安全確保の進言をしました」と言っていた。

あとから、「緊急安全確保」を発令したのは、平塚市が全国で最初と言われたが、「市民の安全が第一である」と確信している。

**7:54 緊急安全確保（警戒レベル5）発令**

対象追加 鈴川、河内川、大根川、座禅川、板戸川

**10:00 第2回災害対策本部会議**

金目川東雲橋上流で左岸の崩落など、被害情報が集約される。

**11:09 大雨警報浸水害解除、洪水警報解除**

**14:45 緊急安全確保（警戒レベル5）解除**

雨が降り止むまで、災害対策本部会議を4回開催した。雨も止み、雨量も減ってきたので、17時に警戒本部に切り替えた。



県道62号平塚秦野線、神奈川中央交通長瀬バス停（下り車線）付近（7月4日早朝撮影）

金目川左岸の堤防上の歩道が、7月3日朝に河岸浸食により崩落し、この影響で県道は一時通行止め、神奈川中央交通は路線バスを迂回運行した。土嚢により応急処置をした状況を平塚市職員が撮影。（平塚市提供）

## 1 齊藤市長からのメッセージ

熱海市長 齊藤 栄

## ● “熱海の地盤は大丈夫” という思い

熱海はこれまで大きな土砂災害がなかった。台風が来ても大きく土砂が崩れることもなかった。国交省の地盤についての発表でも固い安定した地盤であると聞いていた。今回の災害がどれだけ自然的・人為的な要因かは、まさに今検証していて軽々には言えないが、熱海は地盤が大丈夫だと思っていた。

## ● “座学”は無駄ではなかった

消防庁の『事例集』には以前から目を通すようにしていた。いま振り返ると、座学として勉強したことも決して無駄でなかった。良かったと思う。

土石流発生後、熊本市長からすぐに「事例集を見たことがあると思うが、もう一度読んで下さい」と言われた。実際に読んだ。首長としての立ち位置、あとはメディアの対応ですね。逃げない、隠さない、必ず定時に記者会見するとか、非常に有益だったと思う。

## ●避難指示は「非常に重い」

避難情報の分類が変わって、勧告がなくなって、避難指示に一本化。その状況での初めての大雨だった。就任して、避難指示は1度しか出していない。2019年10月に台風19号があつて「狩野川台風並み」という情報もあり、2006年の市長就任以来、初めて避難指示を出した。避難指示は非常に重い。出すのであれば市内全域という認識があつた。今後、雨量が弱まっていき小康状態になる見込みなどの予測を鑑み、総合的に判断した中で高齢者等避難を継続した。

<2019年の避難指示>

2019年10月12日、台風19号の接近するなか静岡地方気象台が土砂災害警戒情報を発表。

さらに「天候は悪化の一途」との連絡もあり、14時30分に避難指示（緊急）を发出。

熱海市は急傾斜地が多く、住宅等の建物が建ち並ぶ大半の地域が土砂災害警戒区域に指定されているため、

地区ごとに分けての避難情報は出していないという。

## ●土石流発生 最初にやったのは「自衛隊の要請」

市長として最初に行ったのは自衛隊の要請。直接、私から知事をお願いした。「熱海市で土石流が発生して大災害、自衛隊の災害派遣を」と依頼した。知事からは「すぐに県として要請をする、県もしっかり応援するから、がんばってくれ」というようなことも言われた。

## ●災害の全体像をいち早く把握するのに“動画”は有用

自衛隊要請のあとSNSで動画をみた。赤い建物が映っているもの。それまで、地図での土石流の説明は受けていたが、どうして流されたのか？よくわからなかった。あの赤い建物の映像を見て、こういう状況になっているのかと、合点がいった。最初に映像を見た時は目を疑った。これが熱海の伊豆山なのか、伊豆山でこんなことが起こるのかというのが率直な印象だった。映像を見て背筋が凍る思いがした。家がそこにあつて、あれだけの

土砂が流れれば、大きな被害はまぬがれないと思った。全体像を把握するには動画の力はすごい。少しでも早く意思決定をする者に届ける必要があると思う。

### ● “ホテル避難所” は職員の提案を即決

梅雨でじめじめしたところに、暑くなってきた時期だった。伊豆山地区は高齢者率が 50 パーセントを超えるところ。冷房のない体育館への長期避難は厳しいと思った。数か月にわたる。そのなか職員から「すぐ近くのホテルを避難所に使ったらどうか」と提案を受け、即決で「その方針を進めてほしい。予算のことは後で考えよう」とすぐ意思決定をした。ホテル側もコロナの影響で予約が少なかった。

ただ、国の費用負担は避難者 1 人あたりで金額が決まっているが、今回のホテル避難は避難者単位ではなく、1 棟貸し。差額を市が負担となると厳しい。

被災した方々がホテルに移動したと同時に福祉の問題が重要になった。一人一人の体調管理と心身の健康に直面した問題。ホテル避難所の福祉の分野は、県のエキスパートやボランティアに助けられた。

### ● 安否不明者名簿の公開「人命救助優先 あとから批判はあってもいい」

災害発生直後「行方不明者は 20 人」と発表していた。その経緯を担当に確認したら「災害対策本部などに行方がわからないと問い合わせがあった人の数」であった。実際を早急に把握する必要があった。「その考え方 1 回捨てよう。きちんとした、この人が見つかっていないというリストを作らないといけない。住民基本台帳をベースに、ホテルに避難している人などを確認し、行き先がわからないという人を安否不明者とする」と自分が提案した。

発災から 72 時間より前でないと意味がないと意識していた。そもそも公開していいのかという議論もあるだろうが人命救助優先でやった。「あとから批判があってもいいから公開してくれ」と。その後の搜索活動にはプラスになったと思う。

### ● 職員のメンタルケアも不可欠

災害対策本部には市民からの電話で様々な意見が寄せられる。率直に言って、職員は大混乱だったと思う。メンタルがやられてしまうような内容もある。職員から電話の内容を聞くと、厳しい声も多いし、理不尽なものもある。対応する職員にマニュアル等あれば良いが、それが無い。本当に現場の職員は大変だった。

### ● マスコミへの要望

義援金、支援金と合わせて 19 億円を超えるなど、全国からの支援は、今回の災害を報道して頂いたから。ありがたいこと。

発災当初、毎日 3 回、朝・昼・夜に記者会見をやった。自分は『事例集』を読んでいたもので、とにかくメディア対応は定時に、丁寧に、逃げない、隠さない、で対応してきたが、支える職員は大変だったと思う。記者会見の回数は徐々に減らしていったが、初動はその負担が大きかった。大手メディアだと複数の人が来て短い期間で交代する。結果、同じ質問を毎日のように何度も受けることになる。「これは人災なのか」「盛土の責任は誰にある」など、今でも検証が終わらないと答えられないような質問を何度も聞かれる。その記者に事情を説明しても、次の人がまた同じ質問をする。どうにかならないか。質問のルールを作るとか、基礎資料を用意して読んできてもらうとか、労力や負担を減らすことが必要だが、市の広報担当もこういう対応が初めてだった。

< 熱海市の記者会見 > 基本、災害対策本部会議の 1 時間後に実施 日別の回数は以下の通り

7 月 3 日

2 回

4日～ 6日 3回（朝・昼・夜）  
 7日～ 9日 2回（朝・夜）  
 10日～ 31日 1回（夜）

8月以降は週2回（火・金）、定例記者会見は9月3日の第49回で終了

### ●まだ災害の経験がない市町村長へのメッセージ

一言で言えば「明日は我が身」。『事例集』を事前に読んでいて本当に良かった。災害が起きてから読んでも間に合わない。ホテル避難所や安否不明者名簿など、その場で市長は判断しなければいけないが、事前の準備と  
 いか心構えというか、基礎がなければ出来ない。自分事として準備しておくことが大切。

## 2 災害の概要

熱海市は静岡県最東部、伊豆半島の東側付け根に位置し、人口は約3万5,000人、温泉を活かした観光都市である。海沿いの平地は少ないため、住宅の多くは傾斜地に建てられている。

気象庁によると、2021年6月30日から7月4日にかけては、本州付近に停滞した梅雨前線に向かって暖かく湿った空気が流れ込んだため大気が不安定となり、静岡県では断続的な雨となった。特に2日夜から3日朝にかけては、非常に激しい雨となった。熱海市網代では、6月30日～7月3日の4日間で、432.5ミリの雨となった。

（図④）

このなか、7月3日10時30分頃、熱海市伊豆山地区で土石流が発生した。熱海市によると、土石流は逢初川の源頭部、海岸から約2キロ上流で標高約390メートルの地点から逢初川を流下し、被災範囲は延長約1キロ、最大幅120メートルにわたった。人的被害は死者27人・行方不明1人、建物被害（一部損壊以上の被害）は98棟に及んでいる。

この土石流について静岡県は「違法かつ不適切な工法により形成された盛土の崩落が被害の甚大化につながったと推測される」として、専門家を委員とする発生原因調査検証委員会を設置、検証を進めている。

図①



土石流の源頭部（国土交通省資料より）

図②



被災地の様子（熱海市提供 7月30日撮影）

土石流は写真右上から流下（矢印）

丸で囲んだ建物はSNS等で拡散した画像の「赤い建物」

### 3 被害の状況

#### 【人的被害】

死者 27人（うち1人は関連死） 行方不明者 1人 重傷 1人 軽傷 3人

#### 【住家被害】

全壊 53棟 大規模半壊 6棟 中規模半壊 1棟 半壊 4棟 準半壊 8棟  
一部損壊 26棟

#### 【避難所開設】

指定避難所（学校・公民館など） 11箇所 7月3日～7日  
それ以外（ホテルなど） 11箇所 7月3日～10月21日

ピーク時の避難者数 582人（7月11日）

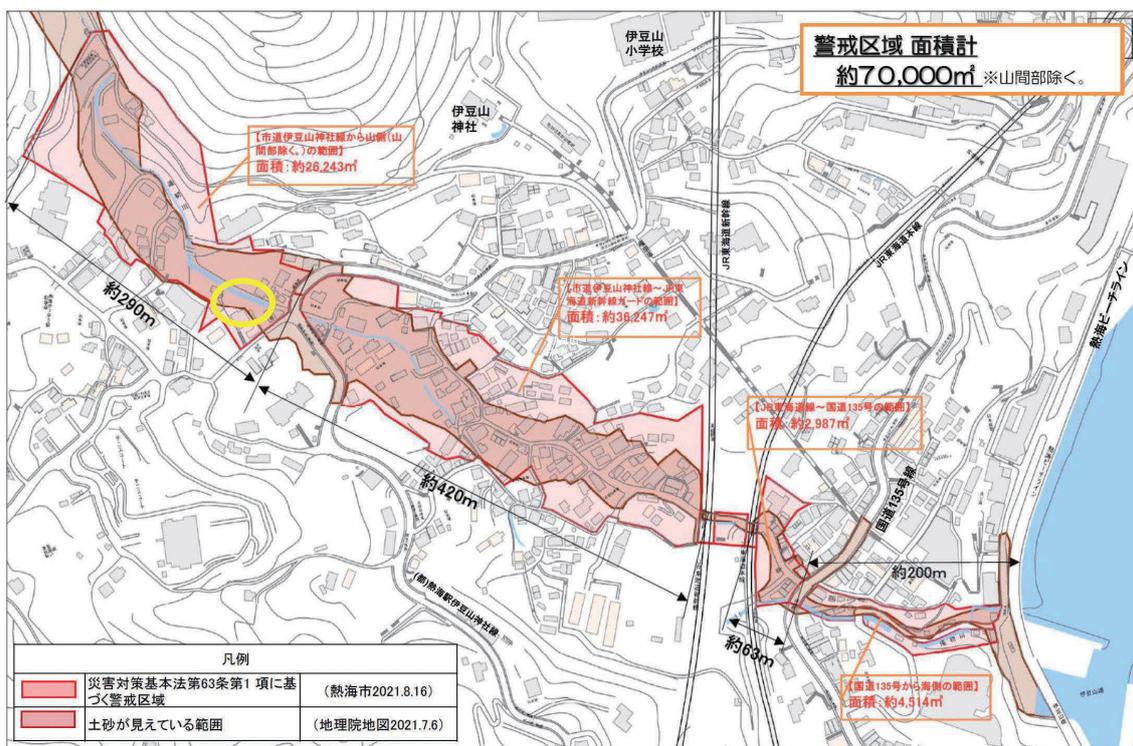
捜索活動 7月3日～8月3日 32日間

自衛隊 延べ 約9,300人  
消防 延べ 約20,900人  
海上保安庁 延べ 約80人  
警察 延べ 約31,400人

#### 【熱海市災害対策本部会議】

7月3日～9月3日 計48回開催

図③



土石流被災地・全体図

丸で囲んだところが「赤い建物」（熱海市提供）

## 4 災害の時系列

### 7月1日(木)

3:55 **大雨注意報(静岡地方気象台)**

11:00 **第1回気象状況** 今後の方針を協議

15:00 **第2回気象状況** 今後の方針を協議

15:30 **臨時部長会議** 情報共有、今後の方針を協議

前日の天気予報から、このあと雨が長く降ることが予想されたので情報共有を図るための会議(齊藤市長)

1日の時点では今回の雨がいつもと違うという印象はなかった。

### 7月2日(金)

6:29 **大雨警報(静岡地方気象台)**

6:47 **大雨警報メールマガジン配信**

7:40 **静岡地方気象台からのホットライン 1回目**

「今後、土砂災害警戒情報を発表する可能性があるので、キキクルも確認しながら、避難情報などの検討を。」と危機管理監が受けて、市長等に報告。

9:00 **第3回気象状況** 今後の方針を協議

10:00 **高齢者等避難(警戒レベル3)発出** 3箇所の避難所を開設(齊藤市長)

大雨警報が出て、高齢者等避難を出した。

土石流の前日・前々日に土砂災害があった。網代と下多賀、あと大黒崎もあった。大黒崎は伊豆山よりも東側。網代と下多賀は南側。危険なのは南だという認識だった。今振り返れば予兆だったのかもしれないが、この時点で、雨量には台風時のような異常は感じなかった。

#### <土石流発生前の土砂災害>

1日 20:00 覚知 網代 建物裏の法面一部崩壊 人的・物的被害なし

2日 11時過ぎ覚知 大黒崎 国道135号線の海側法面で土砂流出 人的被害なし

11:53 覚知 下多賀 JR伊東線線路法面崩壊 一時運転見合わせ 人的被害なし

#### 同報無線及びメールマガジン配信

(齊藤市長)

防災無線だけでは、地形上の理由などで聞こえにくい場所がある。

そのため、力を入れてきたのは、防災無線も聞ける防災ラジオ。東日本大震災の後、高齢者には無償で配った。防災ラジオの電波もうまく届かない場所もあるので、メールマガジンの登録を色々な機会を使って呼びかけていた。広報紙に案内を掲載し、防災訓練の際にチラシを配ったり、職員が登録支援を行ってきた。地道にこれまでやってきた。警報が出れば、必ず「防災無線」「防災ラジオ」「メールマガジン」の3つに同じ情報が流れるようになっている。聞き逃した時に電話でもう一度聞けるシステムも2020年から始めていた。

10:30 **臨時部長会議** 3避難所の開設報告、今後の方針を協議

12:29 **静岡地方気象台からホットライン 2回目**

「土砂災害警戒情報を発表する。キキクルも確認して厳重な警戒をお願いする。自治体からの避難情報など検討を」 危機管理監が受けて、市長等へ報告した。

12:30 土砂災害警戒情報（静岡県・静岡地方气象台）

13:00 第4回気象状況 今後の方針を協議

14:11 土砂災害警戒情報メールマガジン配信

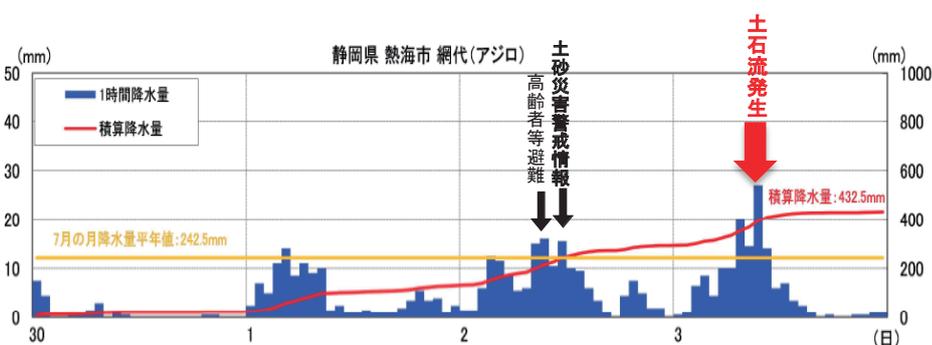
ただいま、熱海市に「大雨警報」、「土砂災害警戒情報」が発表されています。引き続き土砂災害に十分注意してください。

16:00 第5回気象状況 今後の方針を協議 ※夜から翌日にかけて降雨量が下がる予報

（齊藤市長）

庁内において雨の降り方については細心の注意を払っていた。16時に危機管理部局と今後の方針を協議した。今後の雨量がどうなるのか？を非常に気にしていた。

図④



熱海市網代 6月30日～7月3日の降雨量変化グラフ（気象庁資料）

7月3日（土）

3:00 静岡地方气象台 大雨と雷及び突風に関する静岡県気象情報 第12号 ※臨時発表

静岡県では、大雨になっています。3日朝にかけて雷を伴い非常に激しい雨が降るため、土砂災害や浸水の危険度が高まる見込みです。土砂災害、低い土地の浸水に厳重に警戒し、河川の増水や氾濫に警戒してください。

（静岡地方气象台からホットライン連絡 この時点ではナシ）

6:30 危機管理課より電話にて状況を受け協議 レベル3 据置きを判断

9:04 静岡地方气象台からのホットライン3回目

「現在かかっている雨雲が東に抜ければ、いったんは小康状態になる見込み。今後再び雨が降る予想であることから、引き続き厳重な警戒をしてください。」と危機管理監が受け、協議の際に市長等へ報告

9:15 今後の方針を協議 レベル3 据置きを判断

（齊藤市長）

気象庁からのホットラインでは「雨が弱まる」という話もあった。気象庁の情報では「一時弱まる見込みだが、引き続き警戒」としていたが、このまま快方に向かってほしいと思った。民間の気象情報なども参照したところ、同様の情報があった。このように状況が快方に向かう中で、朝の段階で避難指示を出すには至らないと総合的に判断した。当時の議論の中では、午前中に予報どおりの改善がなければ、午後に避難指示を出すことも視野に入っていた。

10:28 土石流発生覚知

住民から消防通信室「付近の家屋が流された」と通報

(齊藤市長)

土石流発生を知ったのは、消防長からの連絡だった。「伊豆山で家が流された、土石流が発生した」という連絡が最初。携帯に電話があった。

**10:35 熱海市災害対策本部 設置**

**11:05 緊急安全確保（警戒レベル5）発出**

**10:52 土石流発生同報無線（伊豆山地区）**

【サイレン2回】消防署からお知らせします。ただ今のサイレンは、伊豆山小杉造園付近で土石流が発生しました。付近の危険な場所にいる方は 避難してください。【2回繰り返す】 こちらは広報あたりです。

**11:09 土石流発生同報無線（市内全域）**

消防署からお知らせします。伊豆山小杉造園付近で土石流が発生しました。付近の危険な場所にいる方は 避難してください。【2回繰り返す】 こちらは広報あたりです。

**11:21 土石流発生同報無線（市内全域）**

【サイレン2回】消防署からお知らせします。ただ今のサイレンは 伊豆山小杉造園付近で土石流が発生しました。付近の危険な場所にいる方は 避難してください。【2回繰り返す】 こちらは広報あたりです。

**11:25 土石流発生同報無線（市内全域）**

市役所からお知らせします。現在、熱海市内で土石流が発生しています。安全な場所へ避難してください。【2回繰り返す】 こちらは広報あたりです

**11:30 土石流発生同報無線（市内全域）**

【サイレン2回】消防署からお知らせします。小杉造園付近で土石流が発生しました。このサイレンは消防団招集サイレンです。【2回繰り返す】 こちらは広報あたりです。

**11:05 土石流発生避難メールマガジン発信**

熱海市伊豆山小杉造園付近で土石流が発生しました。付近の危険な場所にいる方は避難してください。

**11:23 土石流発生避難メールマガジン発信**

熱海市伊豆山小杉造園付近で土石流が発生しました。付近の危険な場所にいる方は避難してください。

**11:29 緊急安全確保（警戒レベル5）メールマガジン発信**

役所からお知らせします。現在、熱海市内で土石流が発生しています。安全な場所へ避難してください。

**12:30 自衛隊派遣要請**

(齊藤市長)

土石流発生の報告を受けて、大変な状況だと認識した。市長として最初に行ったのは自衛隊の災害派遣要請。直接、私から知事をお願いした。「熱海市で土石流が発生して大災害、自衛隊の災害派遣を」と。知事からは「すぐに県として要請をする、県もしっかり応援するから、がんばってくれ」というようなことも言われた。

**12:35 第1回 熱海市災害対策本部会議**

**13:00 避難所10箇所を追加開設**

13:30 総務省消防庁に緊急消防援助隊を出動要請

15:30 災害救助法の適応を公示

16:20 第2回災害対策本部会議

7月4日(日)

6:00 消防、自衛隊、警察による救助活動開始

(齊藤市長)

今回、自衛隊、消防、警察が2,000人規模で入っていただいた。人命救助・捜索活動や応援部隊の統制、現場の仕切りは消防長に任せ、随時、報告を受けていた。消防長は自衛官のOBで、3年間危機管理監をつとめ、令和3年4月から消防長となった。3つの命令系統を束ねたのは消防長であり、私は全幅の信頼を寄せていた。私がやったのは捜索現場に行って皆さんをねぎらうこと。応援部隊の皆さんからは被災地の住民の方々が積極的に支援してくれたと言われた。捜索の際に、駐車場や水道施設の利用をさせてもらったことが、そういう声につながったのだろう。

各避難先からホテル避難所へ 貸切バスで移送開始

図⑤



熱海市が開設したホテル避難所（熱海市提供）

7月5日(月)

6:30 (発災から約44時間後) 静岡県と協議し安否不明者の公表を決定

熱海市及び警察署が名簿作成に着手した。住民基本台帳、地元自治会長からの聞き取りを行い、DVなどの個人情報に配慮した。被災者の早期特定、救助・捜索活動の効率化を図るため。家族の同意をとることはなかった。

20:30 (発災から約58時間後) 静岡県、熱海市が把握する64名分の氏名等を公表

(齊藤市長)

災害発生から72時間より前でないという意味がないと意識していた。その前にやらないといけないう。そもそも公開していいのかという議論もあるだろうが、人命救助優先でやった。「あとから批判があってもいいから公開してくれ」と。

7月6日(火)

13:15 静岡県と静岡県警が共同で警察の把握する5名分の氏名等を公表

公表後、熱海市の災対本部に続々と安否情報が入り、7月6日までに41名の安否が判明した。

7月7日(水)

- 14:30 土砂災害警戒情報解除（静岡県・静岡地方気象台）  
14:35 大雨警報解除、大雨注意報に変更（静岡地方気象台）  
14:50 伊豆山被災地区 捜索活動及び安全確保のため緊急安全確保（警戒レベル5）継続  
その他地域 緊急安全確保（警戒レベル5）解除 高齢者等避難（警戒レベル3）へ

**7月9日（金）**

---

- 5:14 大雨注意報解除（静岡地方気象台）

**7月12日（月）**

---

- 12:00 その他地域 高齢者等避難（警戒レベル3）解除

**7月18日（日）**

---

- 14:00 緊急安全確保区域を一部解除 市独自の警戒区域を指定

**7月29日（木）**

---

- 15:00 国道135号 通行止め解除

**7月31日（土）**

---

- 12:00 市独自の警戒区域を見直し

**8月16日（月）**

---

- 9:00 災害対策基本法第63条に基づく警戒区域の設定

# 令和3年8月11日からの大雨

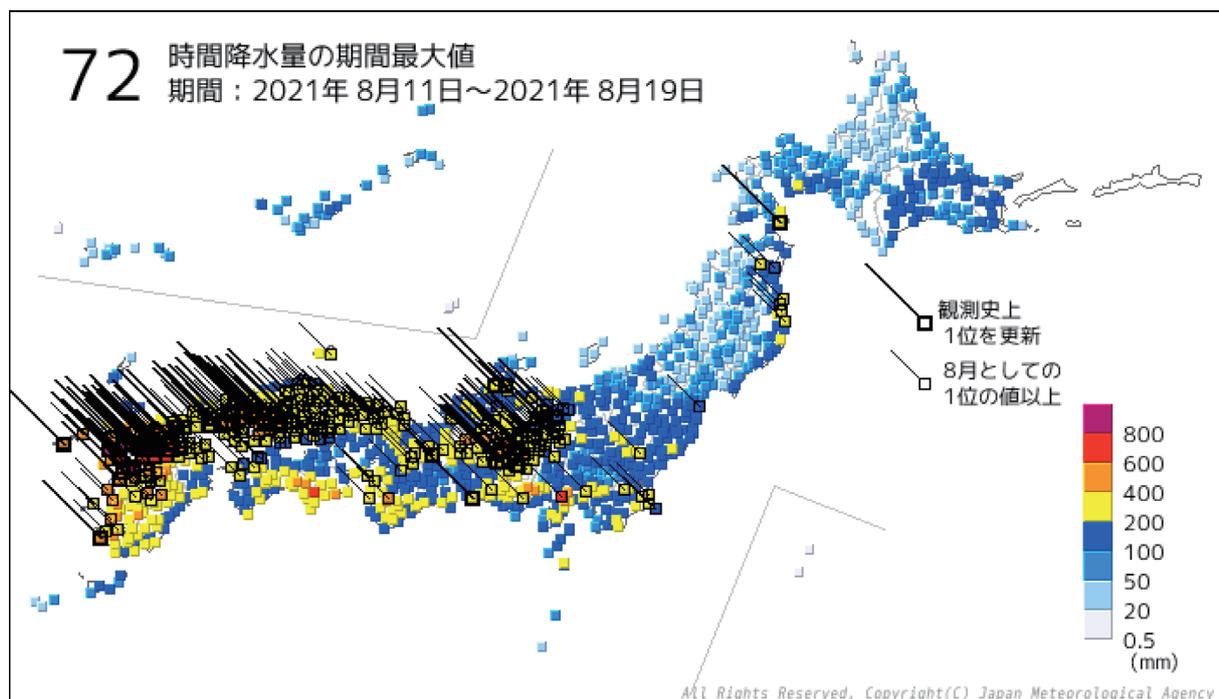
## 1 気象の概要

8月11日から19日にかけて、日本付近に停滞している前線に向かって暖かく湿った空気が流れ込み、前線の活動が活発となった影響で、西日本から東日本の広い範囲で大雨となり、総降水量が多いところで1,200ミリを超える記録的な大雨となった。

8月12日は、九州北部地方で線状降水帯が発生し、24時間降水量が多いところで400ミリを超える大雨となった。また、8月13日は、中国地方で線状降水帯が発生し、複数の地点で24時間降水量が8月の値の1位を更新するなど、記録的な大雨となった。この大雨に対して、気象庁は広島県広島市を対象とした大雨特別警報を発表した。8月14日は、西日本から東日本の広い範囲で大雨となった。特に九州北部地方で線状降水帯による猛烈な雨や非常に激しい雨が降り続き、佐賀県嬉野市で24時間降水量555.5ミリを観測し、観測史上1位の値を更新するなど記録的な大雨となった。この大雨に対して、気象庁は佐賀県、長崎県、福岡県、広島県を対象とした大雨特別警報を発表した。その後、西日本から東日本の太平洋側を中心に広い範囲で雨となり、日降水量が多いところで200ミリを超える大雨となった。

また、大気の状態が非常に不安定となり、岐阜県加茂郡八百津町では竜巻による被害も発生した。

注) 気象庁ホームページ：「災害をもたらした気象事例」（前線による大雨 令和3年（2021年）8月11日～8月19日）から



72時間降水量の期間最大値の分布図（8月11日0時～19日24時）（気象庁ホームページから）

西日本から東日本にかけて過去の期間最大値の1位を更新（観測史上1位又は8月としての1位）していることがわかる。

## 2 被害の概要

この記録的な大雨により、各地で河川の増水、低地の浸水が見られるなど、西日本から東日本の広い範囲で被害が発生した。特に佐賀県では、六角川の氾濫により武雄市から大町町にかけて広範囲にわたり住家の浸水被害が発生したほか、長野県岡谷市や長崎県雲仙市では土砂崩れ等に住家が巻き込まれる被害が発生した。

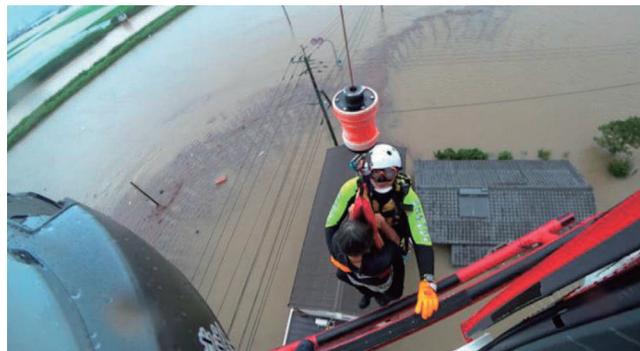
これにより、長野県で3人、広島県で3人、長崎県で5人の方が亡くなるなど死者13人、負傷者17人の人的被害が発生した。また、住家被害については、福岡県で3,288棟、佐賀県で3,275棟の住家が浸水するなど、計8,209棟の被害が生じた。

【人的被害】死者 13人、重傷 3人、軽傷 14人

【住家被害】全壊 43棟、半壊 1,315棟、一部破損 296棟、床上浸水 1,024棟、床下浸水 5,531棟  
注) 消防庁ホームページ：「令和3年8月11日からの大雨による被害及び消防機関の対応状況（第24報）」から



土砂の中の捜索・救助活動（雲仙市）  
（長崎県県央地域広域市町村圏組合消防本部提供）



ヘリコプターによる孤立住民の救助活動（武雄市橘町）  
（佐賀県防災航空隊提供）

## 1 今井市長からのメッセージ

岡谷市長 今井 竜五

## ●県や气象台との連携が必要 自ら気象情報を読み取るスキルも深めて

県や气象台としっかり連携して情報を集め、適切なタイミングで避難情報の発信を判断して、住民にしっかり伝えていくことが大事。伝え方は、緊急速報メールや、これから出てくる新しいツールを積極的に取り入れる努力をしていかなければならない。

土石流が発生する前日、14日の17時50分に、気象庁の「土砂キキクル（土砂災害危険度分布）」で岡谷市内に「極めて危険」を意味する「濃紫」が出現した。「キキクル（危険度分布）」の重要性と活用のしかたについて、私自身、一定の理解をしているつもりであったが、まだ十分ではないと思う。気象情報の読み取りや緊急速報メールの発信など、災害時に対応できる職員のスキルを上げていくことが大事だ。「プロを雇えば」という考え方もあるが、やはり職員が最終的には一番の力になる。

## ●避難指示を発令するか否か 「総合的判断」の意味を問い直す

今回の災害を受けて、避難情報の発令判断基準を見直した。見直し前の避難情報の発令判断基準には「総合的に判断」という言葉があった。今回は、急峻な地形に囲まれている当市において、夜間で暗く、雨が断続的に強弱を繰り返すなかを、避難所まで行くことが二次災害につながるのではないかと懸念もあり、避難指示を出すとしても明るくなってからだという「総合的な判断」をしたが、結果的に人的被害が出てしまった。今後は、防災気象情報を確認しながら、県や气象台と連携し、以前とは異なる意味での「総合的な判断」をしていかなければならない。

## ●住宅の2階に土砂が流入し人的被害 自宅の「構造」も踏まえた避難が必要

今回は、住宅の2階に土石流が流れ込むという事態が起きてしまった。家の建っている「場所」だけでなく、家の「構造」をよく認識して避難行動を決めてもらう必要がある。

発災後に、なぜ警戒レベル5の「緊急安全確保」を出さなかったかと問われたが、「垂直避難」が必ずしも正しいとは限らない。明るくなってきているし、避難指示を出して安全な場所に（水平）避難してもらった方がいいと判断した。岡谷市は山あいのギリギリのところまで家がある。そのような地域で、「緊急安全確保」を発令し、その場で身を守ってもらった方がいいのかどうか。これは今でも迷うところだ。

## ●「緊急速報メール」の発信を確認 情報が届かない人には互助で支援

今回の災害の後に「高齢者等避難」「避難指示」の対象となった地域の住民を対象にアンケート調査を行った。その結果、約4割が「高齢者等避難」「避難指示」を発令したことを知らなかった。

災害時の避難情報の発信ツールは複数整備しているつもりだった。今回も防災行政無線や防災ラジオ、ケーブルテレビの行政チャンネル「シルキーチャンネル」、ホームページ、登録制のメール配信サービス「メール配信@おかや」、広報車などで周知した。ただ、「緊急速報メール」については、発信できる体制はできており、過去に何回か訓練でも実施したことがあったが、岡谷市以外の地域に配信されてしまうことから発信をしなかった。今回の災害以降は、避難情報を発令するときには、必ず発信することを確認した。

一方で、どんなにツールを使っても届かない方、受け取れない方がいる。岡谷市の防災・減災基本条例では「自助」「互助」「共助」「公助」を掲げている。「互助」とは、「隣近所」の声のかけあい・助け合いの意味。この「互助」の意識を高めていくことが必要だ。いざというとき、「隣のおばちゃん、一人暮らしで情報を聞いていないかもしれない」と思ったら、「おばちゃん、避難指示が出たよ！一緒に逃げようよ！」と声をかけていただけるようにしたい。

### ●平成 18 年 7 月豪雨の経験 積み重ねてきた防災・減災対策の効果も

岡谷市は、平成 18 年 7 月豪雨により市内各地で土石流が発生、甚大な被害となった（死者 8 人、住宅全壊 10 棟、半壊 17 棟、床上浸水 68 棟、床下浸水 203 棟）。豪雨災害から 5 年目にあたる平成 23 年に災害が起きた 7 月 19 日を「岡谷市防災の日」とし、さまざまな形で啓発をしてきた。10 年目にあたる平成 28 年には「岡谷市防災・減災基本条例」を制定し、「自助」、向こう三軒が助け合う「互助」、地域で支え合う「共助」、「公助」の重要性を強調してきた。

平成 19 年から、各区に 2 名ずつ市の職員を派遣する「地域連絡員」という制度も設けた。「地域連絡員」は、区と行政を結ぶ役割を果たす。平常時から区のみなさんとも顔見知りになり、人間関係を構築している。今回の大雨でも、自主的に避難所を開設し、「避難したい人はいつでも避難してくれ」と声かけをした区もあったので、これまでの取り組みが浸透してきてはいると思う。土石流危険渓流の砂防堰堤は、豪雨災害の前は 4 基だったが、災害後に築造を進め、現在は 10 倍の 41 基になっており、今回の大雨災害でも土石流を食い止めてくれた箇所がいくつもあった。

## 2 災害の概要

2021 年 8 月 11 日に中国大陸から九州付近にのびていた前線は、12 日にかけて次第に日本の東にのび、15 日にかけて本州付近に停滞した。この前線に向かって南から暖かく湿った空気が流れ込んで大気の状態が不安定となり、西日本から東日本の広い範囲で記録的な大雨となった（図 1）。長野県では、南部・中部を中心に記録的な大雨となり、アメダス 10 地点で 72 時間降水量が観測史上 1 位を更新した。

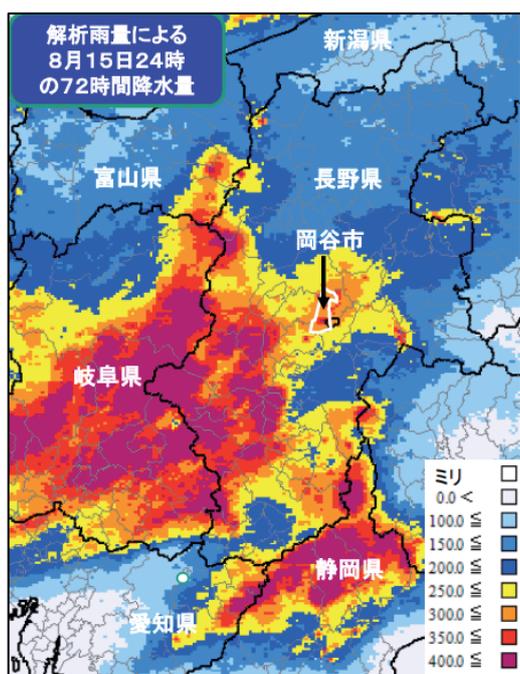


図 1 8 月 15 日 24 時までの 72 時間降水量

（長野地方気象台「令和 3 年 8 月 12 日から 19 日にかけての大雨に関する長野県気象速報」より）

岡谷市では13日の未明から雨が降り始め、14日昼ごろから雨が強まった。15日午前1時過ぎには、土石流発生地点に近い岡谷市川岸支所雨量観測所では降り始めからの累積雨量が300ミリに達していた（図2）。

長野地方気象台「令和3年8月12日から19日にかけての大雨に関する長野県気象速報」によると、岡谷市の土石流発生地点から南南西約6.5キロにあるアメダス辰野の72時間降水量は389ミリで観測史上第2位であった（第1位は平成18年7月豪雨時の403ミリ）。「土砂キキクル（土砂災害危険度分布）」では、岡谷市で土石流が発生した地点を含む1キロメートル格子で、8月15日午前3時50分に「極めて危険（実況で土砂災害警戒情報基準を超過）」を意味する「濃紫」が出現していた。

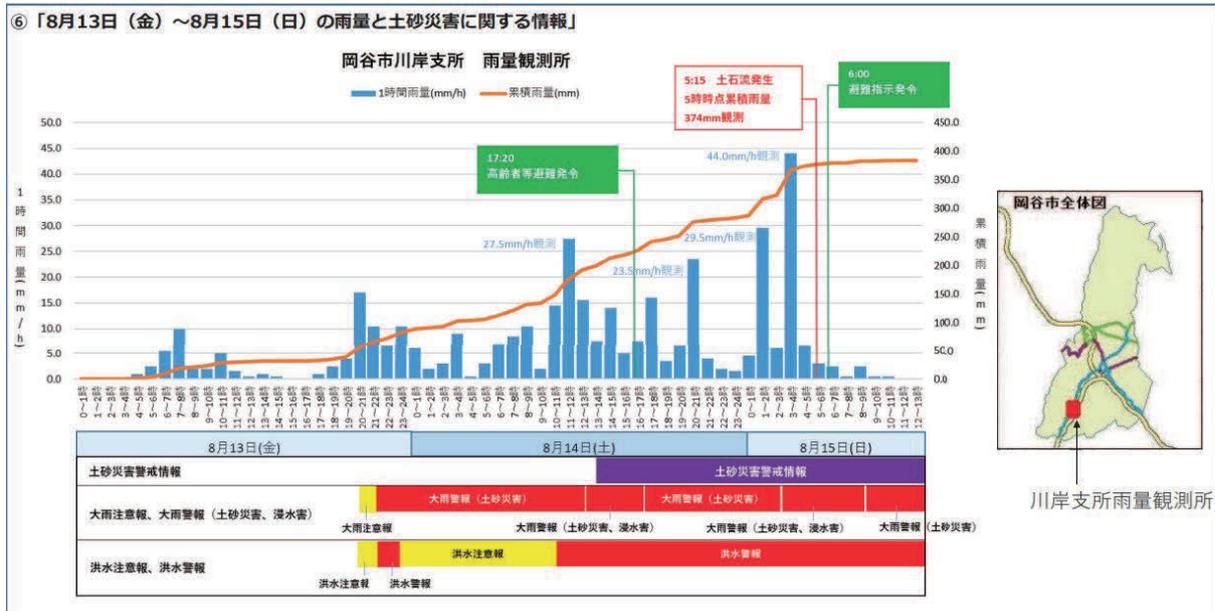


図2 8月13日から15日にかけての雨量と防災気象情報  
 (岡谷市『「令和3年8月大雨災害」避難情報の発令等に係る検証報告書』より)

### 3 被害の状況

岡谷市では、8月15日午前5時15分ごろに、川岸地区の中大久保、大久保で土石流が発生。住宅の2階部分に土砂が流入し、3人が死亡した。また、市内各所で河川の溢水などにより、住宅、道路、河川、農道、農地などの施設に大きな被害が出た。

【人的被害】 死者 3人、重傷 1人、軽傷 2人

【住家被害】 全壊 1棟、半壊 2棟、準半壊 1棟、準半壊未満 2棟  
 床上浸水 8棟、床下浸水 192棟

【道路被害】 110箇所（法面崩壊、路盤等洗堀、土砂堆積、側溝閉塞など）

【水路・河川被害】 56箇所（河床洗堀、護岸浸食、土砂堆積など）

【農地被害】 131箇所（法面崩落、土砂流入など）

【農業用施設被害】 農道等（道路法面洗堀など）7件 水路等（取水口破損、土砂堆積など）58箇所

【林道・作業道等被害】 147箇所（法面・路肩崩落、路面洗堀など）

その他、公園、文教施設など4箇所に被害

(2022年2月28日現在)



写真 1 川岸地区の土石流発生現場（岡谷市提供）



図 3 土石流の発生地点（岡谷市提供）

## 4 災害の時系列

8月13日（金）

### 17:00 岡谷市新型コロナウイルス感染症対策本部会議を開催

（今井市長）

8月13日は年に一度の大きなイベント「岡谷太鼓まつり」が予定されていたが、新型コロナの影響により中止になったため、自宅にいた。ところがこの日、長野県独自の「新型コロナウイルス感染症警戒レベル」が、岡谷市を含む諏訪圏域で「特別警報Ⅱ（レベル5）」に引き上げられた。「感染が顕著に拡大している」状況なので、17時から岡谷市新型コロナウイルス感染症対策本部会議を開催した。県の方針で飲食店の営業時間短縮を行わなければならないため、18時半ごろから私も関係者と共に市内の飲食店にお願いに回った。その後、19時40分ごろ、いったん自宅に戻った。雨に関しては総務部長を通じてスマホなどで連絡が入るので、自宅で待機をしていた。（岡谷市はコンパクトな街なので、いざとなれば10分もかからず登庁できる）

一方で、週末でかつお盆休みでもあるので、各区の区長や役員のみなさんには、早めに避難所開設の協力を依頼した。また、地域連絡員や避難所開設担当の職員にも待機を指示した。お盆休みで帰省されている人も多いので、避難所での新型コロナ感染対策も念頭において指示した。

### 20:37 大雨・洪水注意報発表

（今井市長）

この岡谷市、諏訪地域、長野県は、毎年のように自然災害が発生するので、災害リスクは認識して対策を進めてきた。岡谷市は、平成18年7月豪雨災害を経験しており、私も職員も、災害に対する備えは十分にしていかなければならないと心がけていた。そうした中で様々な活動や対策を積み重ねてきていた。災害のリスクに対する意識は、絶えず私たちは持っていたと認識している。

### 21:20 危機管理室が24時間体制をとる（市内の雨量計が20ミリ/時を観測したため）

（今井市長）

今回も、九州方面などで大雨警報や大雨特別警報が出ていたので、「この雨が東日本に来る」

と警戒し、気象情報などを正確に把握しなければならないと考えていた。市役所庁内の「情報連絡会」という活動体制をとり、関係機関からの情報収集に着手した。

## 21:54 大雨警報（土砂災害）・洪水警報発表

8月14日（土）

### 9:32 気象台へ電話で問い合わせ 土砂災害警戒情報と今後の雨の見通しを確認

（今井市長）

午前中は自宅で待機していたが、やはり周りの状況が気になるので、自分自身で見て回った。一級河川の横河川や林道の状況などを遠目で観察していた。「情報連絡会」の体制になると、必ず、危機管理室から気象台に問い合わせをしている。市内11箇所に独自に設置している雨量計の数値、気象台の情報、県の「河川砂防情報ステーション」、国土交通省の「川の防災情報」のデータに注目していた。岡谷市の災害は大きく分けて二つだと思っている。一つは「水」そのもの、河川の溢水や諏訪湖の氾濫など。もう一つが土石流や地すべりなどの「土砂災害」。下に人家が密集している地域で、法面が崩落することも懸念していた。

### 12:01 大雨警報（土砂災害・浸水害）、洪水警報

### 12:50 岡谷市内に「土砂キキクル（土砂災害危険度分布）」で「薄紫」が出現

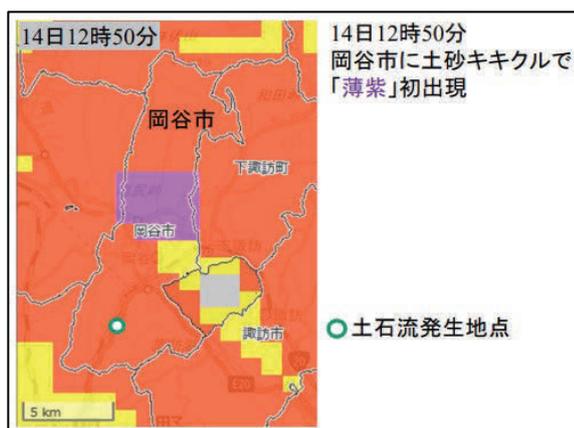


図4 14日12時50分の土砂キキクル（土砂災害危険度分布）の状況

（長野地方気象台「令和3年8月12日から19日にかけての大雨に関する長野県気象速報」より）

### 13:18 気象台から岡谷市に土砂災害警戒情報発表の電話連絡

### 13:25 土砂災害警戒情報発表

Jアラート自動起動により、防災行政無線、防災ラジオ、メールで住民に周知

13時から14時にかけて、市民や自治会、消防団などから、河川の溢水や土手崩落などの通報が10件

### 15:00 災害対策本部を開設 第1回会議を開催

市内14区（※）、11,596世帯、26,967人（※土石流災害の発生した地域も含む）に

「警戒レベル3 高齢者等避難」発令を決定

### 16:45 大雨警報（土砂災害のみ、浸水害は外れる）、洪水警報

（今井市長）

災害対策本部会議終了後、副市長と消防課長などと共に、18時30分ごろまで、調節池の状況や河川の溢水情報のあった場所や林道、一級河川の横河川の護岸が崩落している地点などを巡

視した。避難所の開設状況などの確認後、自宅に戻って待機した。

#### 17:00 災害対策本部（市役所庁内、現地対応、避難所対応）を105人体制に

（今井市長）

危機管理室のメンバーは5名体制。今回、いろいろな通報に対し危機管理室の職員が対応していた。アドバイザーからは、危機管理室の職員は、体制の構築に専念できるような組織体制にしなければならないという指摘を受けた。一番防災を知っている危機管理室の職員は、本来はもっと避難情報の判断や避難所開設の指示など危機管理体制の構築に従事しなければならないが、外部への対応に時間を取られてしまった。また、この間、新型コロナウイルスワクチン接種にも職員が動員されていたうえ、お盆休みも重なって調整が難しかったという面もあった。

#### 17:20 「警戒レベル3 高齢者等避難」を発令

市内14区（※）、11,596世帯、26,967人（※土石流災害の発生した地域も含む）

避難所は中学校3箇所・公民館3箇所

防災行政無線と防災ラジオ、防災メール等で住民に周知 消防団7分団が管轄する区域を消防車両で2時間かけて住民に広報「高齢者はもとより危険を感じる人は避難してください。」

（今井市長）

避難所での新型コロナウイルス感染防止対策については、2020年秋にコロナ対策を念頭においた避難所の開設訓練を行った。検温やトリアージのほか、避難所用の簡易テントを設営して、各家族で独立したスペースを確保できるようにした。この訓練から得た知識を活かし、さらに翌2021年に各区の自主防災組織を対象にテント設営の訓練も実施していた。評判がよかったのが「簡易テント」だった。「密」にならないということもあるが、プライバシーが守られるので、避難していても非常に気持ち良かったということで評価が高かった。そこで、簡易テントを指定避難所である各区の公会所に配備した。また、密集を避けるため、新たな指定避難場所（避難所）を5箇所増やしていた。今回は実際に運用しなかったが、感染した方だけの避難所を設ける準備もしていた。ただし、コロナの感染防止は重要だが、災害のおそれがあるときには、まずは避難してもらわないといけない。



写真2 岡谷西部中学校の避難所に設営された簡易テント（岡谷市提供）

#### 17:50 気象庁の「土砂キキクル」で「濃紫」が出現

（今井市長）

この時点では「土砂キキクル」に濃い紫の地点が出ていたが、「キキクル」の重要性と活用のしかたについて、私自身、一定の理解をしているつもりであったが、まだまだ十分ではないと思う。職員の中でも理解できているのは、危機管理室の職員たちだけかもしれない。今回の

災害後に設置した「避難情報の発令等に係る検証アドバイザー会議（以下、「アドバイザー」という）」でも、「知識を深めるように」との指摘があったので、研修などしっかりやっていたかなければならないと思っている。

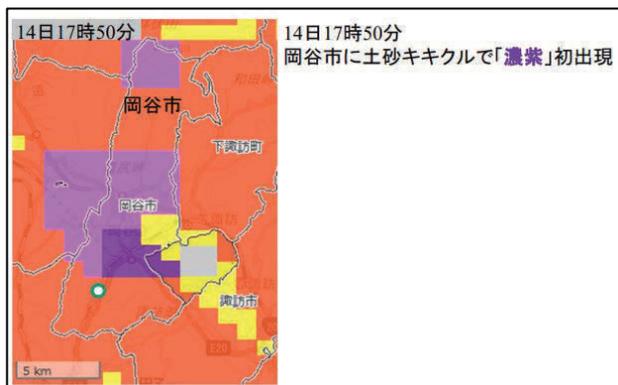


図5 14日17時50分の土砂キキクル（土砂災害危険度分布）の状況  
※左下の緑の○が土石流発生地点

（長野地方気象台「令和3年8月12日から19日にかけての大雨に関する長野県気象速報」より）

#### 21:21 気象台から岡谷市に電話解説

（今井市長）

土砂キキクル「濃紫」についての警戒を喚起

14日の夜にいったん雨が落ち着いたが、濃い紫が市街地であったことから、ここが災害対策本部として今後の対応に一番悩んだところであった。

### 8月15日（日）

- 2:39 大雨警報（土砂災害・浸水害）、洪水警報
- 3:20 のちに土石流が発生した地点に土砂キキクルで「薄紫」が出現  
3時半ごろから、浸水・冠水・土砂災害などの通報が急激に増加
- 3:50 のちに土石流が発生した地点に土砂キキクルで「濃紫」が出現  
3時から4時にかけて、川岸支所で1時間に44ミリの雨を観測

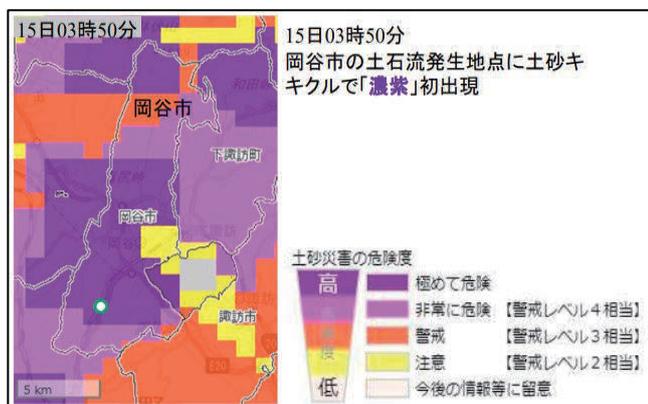


図6 15日3時50分の土砂キキクル（土砂災害危険度分布）の状況  
※左下の緑の○が土石流発生地点

（長野地方気象台「令和3年8月12日から19日にかけての大雨に関する長野県気象速報」より）

## 5:15 川岸地区中大久保で土砂災害が発生し家屋に土砂が流入（17日に発生時刻の確定）

（今井市長）

その後、総務部長から「川岸地区でかなり被害が出ている」という一報を受け、避難指示の発令をすることを検討した。「どうも土石流のようだ」という情報を受け、外が明るくなっていることもあり、即座に避難指示を発令する判断をした。

土石流の発生の情報を受け、この時点ではまだ雨が降り続く可能性が十分あり、他の地域でも土石流が発生するおそれがあるので、避難指示を発令する判断を決定した。

土石流が人家に流れ込んだという情報があり、なんとか人的被害がないようにと祈っていたが、なかなか状況がつかめなかった。

その後の確認において、川岸地区の中大久保で土石流による人的被害が出ていた。

未明の3時から4時にかけて1時間に44ミリの激しい雨が降ったが、その前後は1時間に44.5ミリとか6ミリ程度の雨であった。气象台にも予報を確認したが、避難指示を出すかどうかの判断が非常に難しかった。今回の見直しをする前の避難情報の発令判断基準には、「総合的に判断」とあったが、この時点での「総合的な判断」とは、急峻な地形に囲まれている当市において、夜間で暗く、雨が断続的に強弱を繰り返すなかを、避難所まで行くことが二次災害を引き起こしかねないというものであった。そのため、「避難指示」を出すタイミングは、明るくなってからだと考えていた。今後は、県や气象台と連携し、防災気象情報を確認しながら、以前とは異なる意味での「総合的な判断」をしていかなければならないと考えている。

## 6:00 「警戒レベル4 避難指示」を発令

対象は市内14区、11,596世帯、26,967人

避難所を拡大（中学校3箇所・公民館3箇所に、全14区の公会所などを追加）

（今井市長）

事後では、気象庁の示す「警戒レベル5 緊急安全確保」の発令を検討すべきだったという指摘もあったが、その時点ではそこまで考えなかった。また、岡谷市の今回の土石流では、人家の2階に土石流が流れ込むという事態が起きたが、よく言われている「垂直避難」が必ずしも正しい判断とは限らないと考えている。安全な場所に（水平）避難してもらった方がいい場合もある。岡谷市は山あいのギリギリまで家が建っている。自分たちの家の建っている「場所」、自分たちの家の「構造」をよく認識してもらい、自分たちの避難行動（避難所、家の近くの安全な場所、家の中の安全な場所など）を考えてもらう必要があると考えている。

また、「警戒レベル5」の緊急安全確保にあたる状況は、広い範囲に安全な場所がない甚大な災害のイメージがあった。岡谷市では、平成18年7月豪雨災害で被災した湊地区は、昨年（令和3年5月）に見直された基準のレベル5の状況だったかもしれない。通常の避難では間に合わないような状況であれば、レベル5の緊急安全確保を発令すると思います。

## 6:50 避難指示を防災行政無線と防災ラジオ、防災メール等で周知

### 7:00 第2回災害対策本部会議を開催

### 8:02 大雨警報（土砂災害のみ、浸水害は外れる）、洪水警報

### 9:00 再度、避難情報を防災行政無線、防災ラジオ、防災メール等で周知

### 9:45 第3回災害対策本部会議を開催

**9:50 市長メッセージを発信（防災行政無線、防災ラジオ、防災メール等）**

「市長の今井竜五です。

昨日からの大雨により岡谷市各地で溢水、法面の崩落などが起きています。

本日6時に川岸、湊地区を中心に警戒レベル4の避難指示を発令しています。

市民の皆様には、情報の収集に努め、早めの避難と、今後の気象状況に注意し、  
落ち着いて行動するようお願いいたします。」

**10:25 土石流災害の現場付近（川岸支所）に現地災害対策本部を設置**

**11:40 天竜川が氾濫危険水位に達したことを受けて「警戒レベル4 避難指示」を追加発令**

（下浜区の884世帯、2,056人）

防災行政無線と防災ラジオ、防災メール等で住民に周知

**14:00 第4回災害対策本部会議を開催**

**15:00 再度、避難情報を防災行政無線、防災ラジオ、防災メール等で周知**

**17:00 第5回災害対策本部会議を開催**

（今井市長）

平成18年7月豪雨災害や平成27年3月の山林火災の経験から、メディアの取材には、「次の報道対応は何時何分に行います」とアナウンスして調整した。発災当日の15日は1時間か2時間おきに実施をした。私と、総務部長や危機管理室長等に対応した。

**8月16日（月）**

**4:40 土砂災害警戒情報解除**

**8:00 第6回災害対策本部会議を開催**

**16:00 第7回災害対策本部会議を開催**

**8月17日（火）**

国土交通省の土砂災害専門家（※）が土石流発生場所を現地調査

岡谷市含む長野県内6市町村に災害救助法適用

（※国土交通省国土技術政策総合研究所砂防研究室、国立研究法人土木研究所土砂管理研究グループ）

**16:00 第8回災害対策本部会議を開催**

土石流の発生時刻を確定（15日午前5時15分）

発生箇所は、中大久保・大久保の2箇所

**8月18日（水）**

**16:26 大雨警報（土砂災害）解除**

**17:00 第9回災害対策本部会議を開催**

**8月19日（木）**

**15:30 第10回災害対策本部会議を開催**

避難指示の一部解除について決定

**8月20日（金）**

**12:00 「警戒レベル4 避難指示」を一部解除（駒沢区・鮎沢区の各一部は継続）**

**9月29日（水）**

**17:30 第18回災害対策本部会議を開催**

**9月30日（木）正午に避難指示解除、災害対策本部及び現地災害対策本部の解散について決定**

12:00 「警戒レベル4 避難指示」をすべて解除

(今井市長)

今回の大雨災害を受けて、避難情報の発令判断基準を見直した。従来は、県が設置している諏訪湖から天竜川が流れ出る「釜口水門」の雨量計をはじめ、市が設置している11箇所の雨量計の連続雨量などを基準にしていた。アドバイザーの先生からは、気象情報を基に、気象台との連絡を密にし、タイムリーな避難情報の発信をしていくべきであるという指摘があった。新しい基準では、土砂災害警戒情報や土砂キキクル(土砂災害危険度分布)など、気象庁が発表する情報を基準とすることに変えた。今後は積極的に、このような情報を活用していきたいと考えている。気象庁の警戒レベルについても、チラシを作成して各戸配布し、各区にポスターも掲示をした。また、区長会や自主防災組織連絡協議会、保育園長会などのさまざまな会合の機会をとらえて、危機管理室から説明を行っている。

平成18年7月に豪雨災害を経験したが、15年経ってまた土石流災害により尊い3名の命が失われた。アドバイザーの先生からは、豪雨が降ったのが未明であったとか、雨の強弱だとか、二次災害をおそれたとか、そういうことで避難指示の発令が遅れたという指摘があり、「空振りでもいい、未明であっても避難情報を出せ」と強く言われた。空振りをおそれず、最終的に「何もなくてよかったね」と言えるようになればいいと思う。

私たち行政は、そのことを強く自覚しなければならない。

■ 岡谷市 「令和3年8月大雨災害」避難情報の発令等に係る検証報告書  
<https://www.city.okaya.lg.jp/material/files/group/10/report.pdf>

■ 岡谷市 避難情報と避難行動に係る市民アンケート調査結果  
<https://www.city.okaya.lg.jp/material/files/group/10/enquete.pdf>

## 1 小松市長からのメッセージ

武雄市長 小松 政

## ●近年で2度の大雨、進む冠水

当市は2年のうちに2度の豪雨被害を受けた。令和元年8月28日の豪雨は一気に雨が来て（1時間雨量10ミリ）止んだ。今回は令和3年8月11日から8月19日までの9日間、雨が降り続いた（総雨量1,256ミリ）。11日に大雨洪水警報、12日午前3時55分に土砂災害警戒情報が発表され、同日8時10分に市内の冠水が始まった。13日午後2時26分に私の所に武雄河川事務所から「六角川排水ポンプの運転調整の可能性」の連絡が入った。これは、外水はん濫を防ぐためのポンプを止めるというもので、我々にとっては事実上の「死刑宣告」ともいえる。結果的にはその夜7時16分の段階で回避の連絡が入り、その日はギリギリのところ踏ん張ったが、最初にポンプ停止可能性の連絡が入った時に、一番危機感を抱いた。

## ●教訓を生かし、市民を守る

令和元年の豪雨では、残念ながら3人の市民が亡くなられたので、一番大事なことは「命を守る」ということ。人命を最優先にし、前回同様の対応ではダメだと言いつけていた。排水ポンプが止まると、被害が確実に広がることを住民の皆さんは気にしておられ、「止まる可能性があるなら早めに知らせてほしい」と言われていたので、ポンプが停止する可能性について、早め早めに防災行政無線や戸別受信機などで呼びかけた。8月13日午後5時30分に橘町、朝日町、北方町に最初のポンプ運転停止の可能性の呼びかけをし、8月14日午前2時22分には運転停止の事前予告放送を実施し、3時15分、実際に停止した。

## ●必要な情報を確実に届ける

令和元年の豪雨被害で「必要な時に必要な人に必要な情報が確実に届く」ことが何より大事だと痛感したので、令和元年の被災以降、戸別受信機を市内の設置を希望される御家庭や要配慮者施設約9,800世帯に無償で設置、外国語にも対応した防災アプリを令和3年6月にリリースし、令和4年2月末現在で8,000以上ダウンロードされた。令和4年度には、同様な災害が発生した場合は、すぐに臨時災害放送局（FM局）が開設できるよう機器を準備する。ボランティアやNPO等の災害時支援団体とのネットワークは重要で、令和元年の豪雨では全国から1万人以上のボランティアの方々が支援して下さったが、令和3年の大雨では、コロナ禍によりボランティアの募集範囲を県内に限定したので、半分以下に減った。これまでの経験で災害時の受援力を高めることも大切だと分かっていたので、企業や他の自治体と応援協定を結んできた。そして、いざという時のために、車で避難できる場所を（市内の商業施設等に最大1,600台分）確保した。また、排水ポンプ停止時の住民への周知訓練や、備蓄品の配備の充実など安心して避難できる避難所の確保にも努めた。さらに安心して避難してもらうために令和4年度からは、地区の公民館などに飲料水や食料を出水期までに配備し、従来の避難所に加え開設する。

## ●早期復旧へ向けて

被災後、市民の中から「心が折れた」「天災じゃなく人災だ」「3度目はないぞ」などと厳しいご意見をいただいた。よって復旧のスピードを更に上げなければならないと痛感した。復旧復興にかかる手続きや各種の相談の窓口を一本化した。被災現場を毎日見て回る中で、課題を見越して事前に想定し、災害対策本部会議で指示

をおこなった。ボランティアがほとんど来られないなか、特に一人暮らしのお年寄りらの間に復旧のスピードの格差が生まれることを心配し、フォローした。また、2度の被災でやる気を失って閉じこもりがちの方の心身両面の支援に、市保健師やボランティアの看護師らと一緒にチームを作ってサポートした。住まいと暮らしを守ることを第一に災害対策本部会議を地元のケーブルテレビやYouTubeで生中継し、希望のメッセージを出した。2年で2度の大水害で、多くの人の心が折れかかっており、今回は、様々な支援の中でも特に「住まいとなりわいを守る」ことに注力すべきだと感じた。そこで、9月1日には市として被災家屋に支援をすると発表し、住宅の浸水対策に対して最大100万円、事業者に対して最大1,000万円の補助金を出した。また、10月12日には住宅の移転に対し、最大250万円の補助を出したほか、高台への宅地造成をスピーディーに進めていく必要があるため、官民連携での高台宅地造成を強力に推進していくという方針を打ち出した。

### ●水との共生へ

市民の希望や今後の治水の方向性を早く出すために、3か後の11月16日に「武雄市 新・創造的復興プラン」を発表した。気候変動への対応を前提として「床上浸水ゼロ」を目指すを打ち出した。意外に市民から大きな批判は出ていない。六角川の水の流れを速くすることは、国や県にお願いしながら、六角川の上流部にあたる武雄市では内水氾濫を起こさないよう、既存のため池を利用、田んぼを「田んぼダム」に整備するなど、多くの水がめを作って治水に活かしていく。大事なことは抜本的な流域治水対策を進めていくこと。開発もしくは治水一辺倒ではなく、両者のバランスをとった「水との共生」が大切だ。

### ●災害は単発とは限らない、次に備えよ

災害は1度だけではなく、2度3度起こるということを前提とした防災対策が必要だ。命を守ることはもちろんだが、これからは住まいや暮らしを守る視点での防災が必要。災害が続くと、人口流失や廃業が相次いで町の危機につながる。仮に連続して被災した時には、これからもこの町に住み続けよう、商売を続けよう、と市民が思えるような「希望となるメッセージ」を出すことが必要だ。

### ●受援力の向上

災害対応・復旧・復興も長期間になれば、支援内容や課題が多様化する。これに対応するためには、職員だけのマンパワーでは不足する。受援力をさらに高めるために、今まで以上に応援協定を結んでいく。そして、平時から地域と支援者の顔の見える関係を作り、災害時には電話1本で協力していただく「備えない防災」を進めていく。

## 2 災害の概要

令和3年8月11日から前線の活発な活動により、九州の広範囲で強い雨域がかかり、大雨となった。佐賀県六角川流域では、岸川雨量観測所等の主要観測所において、近年の主な洪水を上回る雨量を計測し、六角川では9箇所河川からの越水が発生した。浸水面積約6,900ヘクタール、浸水家屋2,936戸となる大規模な浸水被害をもたらした。（令和3年9月30日時点 佐賀県調べ）

武雄市においても、記録的大雨により崖崩れや浸水被害が発生した。令和元年8月に武雄市を襲った大雨と比較し、降雨期間が9日間と長く、六角川ポンプの停止回数は3回（約9時間）となったことにより、内水氾濫につながり被害が拡大した。また降り続いた雨により、地盤が緩み多くの地点で地すべり兆候が確認された。幸いにも人的被害は無かったものの、住民の生活に甚大な影響を与えた。



## 令和3年豪雨の概要

	令和3年	令和元年		令和3年	令和元年
降雨期間	9日間	3日間	最大避難者数 (指定避難所)	670人 (17カ所)	624人 (20カ所)
総降雨量	1256mm	482mm	浸水家屋 (区分間きとり)	1762棟 床上1183棟 床下579棟	1536棟 床上1025棟 床下511棟
1時間最大雨量	78mm	101mm	浸水車両	約500台	約1200台
ポンプ停止	3回 8時間30分	1回 3時間10分	通行止め	110箇所	63箇所
道路・河川等被害	129箇所	117箇所	公共交通機関への影響	JR運休10日 バス運休4日	JR運休3日 バス運休2日

### 3 被害の状況

【人的被害】 なし

【家屋（住家）被害】 床上浸水 1,183 棟 床下浸水 579 棟

崖崩れによる家屋被害 7 棟 崖崩れによる敷地内への土砂流入 15 棟

【施設（非住家）被害】 41 施設

【避難状況】 指定避難所（17 箇所開設）670 名 その他避難所（29 箇所開設）231 名

【道路被害】 公共土木災害（道路）35 件 小災害（道路）33 件

公共土木災害（河川）23 件 小災害（河川）16 件

### 4 災害の時系列

**8月11日（水）**

11:33 大雨洪水警報発表・災害情報連絡室を設置

(気象庁から首長へ「今回の雨は長丁場になる見込み」)

16:00 **高齢者等避難発令** (市内全域) **指定避難所開設** (各町1箇所 全9箇所)

### 8月12日(木)

- 3:55 土砂災害警戒情報発表  
災害警戒本部へ体制変更。避難指示発令(若木町)
- 5:45 **避難指示発令**(武内町、山内町)
- 8:10 武雄市内冠水が始まる。
- 11:30 **避難指示発令**(東川登町、西川登町)
- 20:15 **避難指示発令**(武雄町、橘町、朝日町、北方町) ※武雄市全域に避難指示発令となる。
- 23:48 潮見橋水位観測所の水位が避難判断水位に到達(2.8メートル)

### 8月13日(金)

- 12:00 全部長を招集。市長から災害対応指示がなされる。
- 13:30 車両避難場所開設(ゆめタウン武雄 ~19日14:24) ※武雄市災害時応援協定
- 14:26 武雄河川事務所から市長へ「ポンプ運転調整の可能生。新橋の予測は計画高水位を超える可能性」
- 15:00 松浦川(武内観測所) 氾濫危険水位到達①
- 16:00 六角川(潮見橋観測所) 氾濫危険情報発表①
- 16:30 高橋川(高橋観測所) 氾濫危険水位到達①
- 18:50 車両避難場所開設(佐賀県遊技業協同組合) ※佐賀県災害時応援協定

### 8月14日(土)

- 1:40 高橋川(高橋観測所) 氾濫危険水位到達②
- 1:50 六角川(潮見橋観測所) 氾濫危険情報発表②
- 2:00 職員全員招集
- 2:15 **大雨特別警報(土砂災害)発表**  
**災害対策本部へ体制変更 市内全域に緊急安全確保発令**
- 2:21 顕著な大雨に関する情報①発表
- 3:10 六角川排水ポンプ運転停止①
- 3:15 ポンプ運転停止 放送
- 3:20 **第1回武雄市災害対策本部会議開催、ケーブルワンで生中継開始**  
矢筈ダム緊急放流 事前通知(非常用洪水吐超流可能性あり)
- 3:30 大雨特別警報(浸水害)発表
- 3:45 矢筈ダムから危機管理監へホットライン「住民への情報提供・避難指示」
- 4:40 松浦川(武内観測所) 氾濫危険水位到達②
- 4:59 武内町鳥越地区に地すべり兆候。以降17:20まで8回の兆候あり。
- 5:20 武雄川(杉橋観測所) 氾濫危険水位到達①  
矢筈ダム 緊急放流事前通知(非常用洪水吐超流可能性)  
本部ダムから危機管理監へのホットライン 「緊急放流予告通知3時間前」
- 6:00 T E C - F O R C E 到着(~18日)  
狩立・日ノ峯ダムから危機管理監へのホットライン 「緊急放流予告通知3時間前」  
武雄川(杉橋観測所) 最高水位(4.9メートル)
- 7:00 氾濫発生情報発表(橘町大日)

六角川（新橋水位観測所） 最高水位（7.34メートル）

六角川（潮見橋観測所） 最高水位（4.85メートル）

高橋川（高橋観測所） 最高水位（3.46メートル）

松浦川（武内観測所） 最高水位（4.77メートル）



浸水の様子（武雄市提供）

- 8:15 佐賀県リエゾン到着（～31日）
- 8:32 陸上自衛隊連絡員到着
- 9:52 武雄市から佐賀県へ自衛隊災害派遣要請依頼
- 10:00 六角川排水ポンプ運転再開① 氾濫発生情報発表（橋町潮見橋付近）
- 10:20 松浦川（武内観測所） 氾濫危険水位到達③
- 12:10 六角川排水ポンプ運転停止②
- 12:30 陸上自衛隊到着
- 13:00 六角川排水ポンプ運転再開②

### 第3回武雄市災害対策本部会議より YouTube でも生中継開始

志久排水機場 浸水により停止（9月6日復旧）

- 17:00 松浦川（武内観測所）氾濫危険水位到達④
- 17:40 六角川（潮見橋観測所）氾濫危険情報発表③
- 18:00 武内町鯉淵地区に地すべり兆候確認



武雄市上空から（武雄市提供）

#### 8月15日（日）

- 6:08 気象台から防災・減災課へホットライン 「特別警報解除」
- 6:10 **大雨特別警報解除、大雨洪水警報発表**  
**緊急安全確保を避難指示へ変更**
- 16:10 JETT 到着（～20日）

#### 8月16日（月）

- 災害ごみの受付開始（～9月12日まで。以降、環境課による個別対応）
- 10:45 武雄河川事務所から市長へホットライン  
「浸水解消の報告。越水等箇所対応の報告。東川ポンプ車2台再配備完了報告」
- 14:22 西川登町矢筈地区に地すべり兆候確認

#### 8月17日（火）

- 武雄温泉（株）からの温泉無料入浴券配布開始（～20日）
- 17:00 第12回武雄市災害対策本部会議にて水道料、下水道料、汲取り料免除表明  
武雄市災害ボランティアセンター開設

#### 8月18日（水）

- 武雄市災害ボランティアセンター受付開始
- 消毒液の配布開始（～20日） 募金箱の設置

8:05 土砂災害警戒情報解除

11:00 武雄市から佐賀県へ自衛隊災害派遣撤収要請依頼

#### 8月19日(木)

---

災害支援金、義援金の受付開始

14:24 大雨警報解除 避難指示解除(西川登町矢筈地区は避難指示継続)

#### 8月20日(金)

---

無料入浴支援開始(高齢者、障がい者対象～9月30日)

13:00 復興支援室の設置(ワンストップ総合相談窓口の設置、相談専門ダイヤルの設置)

13:30 市営住宅、県営住宅一時入居相談受付(～17:00)

16:30 武内町鯉淵地区に避難指示発令(地すべり兆候)

#### 8月26日(木)

---

無料タクシーチケット配布開始(～10月11日)

14:30 西川登町矢筈地区の避難指示解除

#### 8月31日(火)

---

10:00 武内町鯉淵地区の避難指示解除

#### 9月24日(金)

---

17:00 全避難所閉鎖(45日間)

#### 10月4日(月)

---

8:59 第37回武雄市災害対策本部会議

9:12 災害対策本部解散

## 1 松本市長からのメッセージ

神崎市長 松本 茂幸

## ●長期戦を想定した職員のローテーション作りが大切

大きな災害が起きた場合はもう全職員で当たらないと、それでも手が足りないんですね、そうすると休めないんですよ。よそでも職員が寝ないで対応してますよね。そこで問題になるのは職員の健康管理です。言うたら責任感の強い人は寝ずして何日も対応するんだよね。そうして倒れたところもあったというのを聞くと、もう強制的にローテーションを組むようなシステムを考えとかないかなと思いました。

よその首長さんあたりを見ても、休んでますかと聞くと、俺は3日寝ていないとか聞くんですよ。それで済めばよいけど、今回の災害がもっと大きくなったら対応の仕方がどんどん増えますから、最大のことを考えておかないといけないというか、そういう備えが必要だと気づかされました。

## ●ボランティアの活用を事前に検討すべき

避難所での対応を考えると、支給品の問題だって住民はいろいろ言うわけじゃないですか。そしたらうちの職員だったら何かその辺をうまくやるためには言葉一つだって大変ですよ。

よその自治体ではボランティアの人たちをお願いしているという話がありますよね。ボランティアの方たちにお任せすると、住民との対応でも「私達は協力隊でここに来てますよ、だからこれを取ってください」とか何か強く言えるようなところがあるという話を聞いて、僕はそういうことも一つ頭に入れて、今後は大きな災害に向かってそういった準備をしとかないといけないなと思っています。

## ●危険を数字で判断できるように準備すべき

自分はいつも言うのは、城原川の上流で雨が何ミリ降ったらここではどれだけの水が流れるか簡単に計算できるじゃないですか。そうすると80ミリ降ったらこのあたりはあふれるようになるんですよ。そして、それが長い時間続けば続くほど水量が多くなりますから浸水が広がることになる。

それぞれの地域でも、自分たちのところで実際にどれだけの雨が降ったなら、何ミリ降ると予想されたら本当にやばいよみたいなことをしっかり想定や想像しておくことが大切。その量を自分で1回想定してみたら一番いいと思う。だけど、今回のような長雨になったときには土砂災害が来るもんだから、その時はしっかり対応していかないとけない。

## ●役所に専門職員はいない。最悪を想定した疑似体験が重要

人事異動があるので役所で防災を継続的にやっている職員はいないのが実状だが、役所のこうした人事の事情を理解してくれる人（住民）は良いが、住民からは役所は時系列でつながっていると思われる。そのとき（災害時）担当する者も市長も、それを承知の上で事態に望まないといけないんです。

うちの市も毎年水害があり、その程度が普通という言葉が悪いが、浸水の被害にはあっても最近各地で起きているような町を挙げて大変になるということまでは起きていません。だからほかのところの災害対応を学ぶなどの疑似体験などで、いかに予備知識を入れているかが勝負だと思います。また、毎年訓練をしていますが、どうしても訓練が可能な範囲の想定でやってしまっているの、それ以上に雨が降った時にどうなるかが心配な

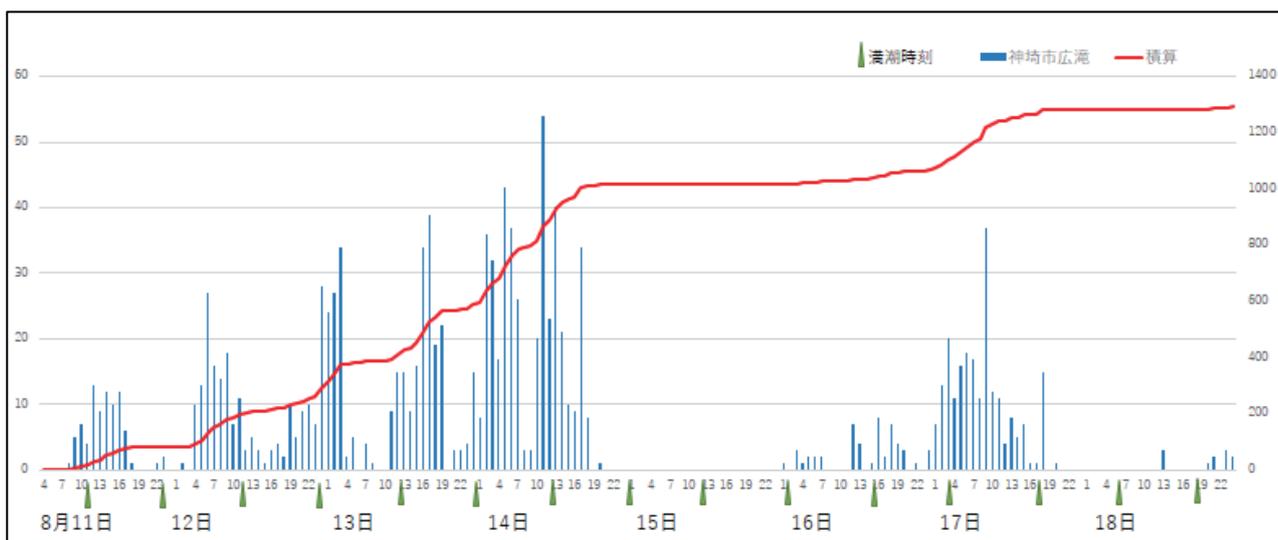
ところで、最悪を想定した訓練も必要だと思います。

## 2 災害の概要

8月11日から19日にかけて、前線が九州付近に停滞し、前線に向かって太平洋高気圧の周辺から暖かく湿った空気が流れ込んだ影響で、九州及び山口県では大気の状態が非常に不安定となり、大雨が継続した。

気象庁の観測では、神崎市に隣接する佐賀県鳥栖市鳥栖では24時間雨量が409.0ミリを、72時間雨量では807.5ミリを記録、いずれも観測史上1位の記録を更新した。

神崎市でも雨が継続して降り続け、14日の11時までの1時間で神崎市広滝では54ミリを観測、11日6時から19日9時までの約8日間の累積雨量は、神崎市伊福で1,313ミリに達した。これは、過去10年間の8月の降水量の3倍ほどとなり、年間平均降水量の46パーセントにも達した。



神崎市広滝の雨量経緯（神崎市提供）

12日と14日には九州北部に線状降水帯が発生し、顕著な大雨に関する気象情報も発表された。

14日夕方には神崎市神埼町内で土砂崩れが発生し、民家3棟と非住家3棟が巻き込まれ、住民1人が軽傷を負った。

また、神崎市の南東部で浸水被害が広い範囲で発生し、約1,000ヘクタールを超える農地が浸水による被害を受けた。避難場所として開設していた神崎小学校では、近くを流れる馬場川からの越水によってグラウンドのおよそ半分の面積で砂の流出が発生した。



神崎市南東部の農業地帯の  
浸水被害の様子  
(神崎市役所提供)

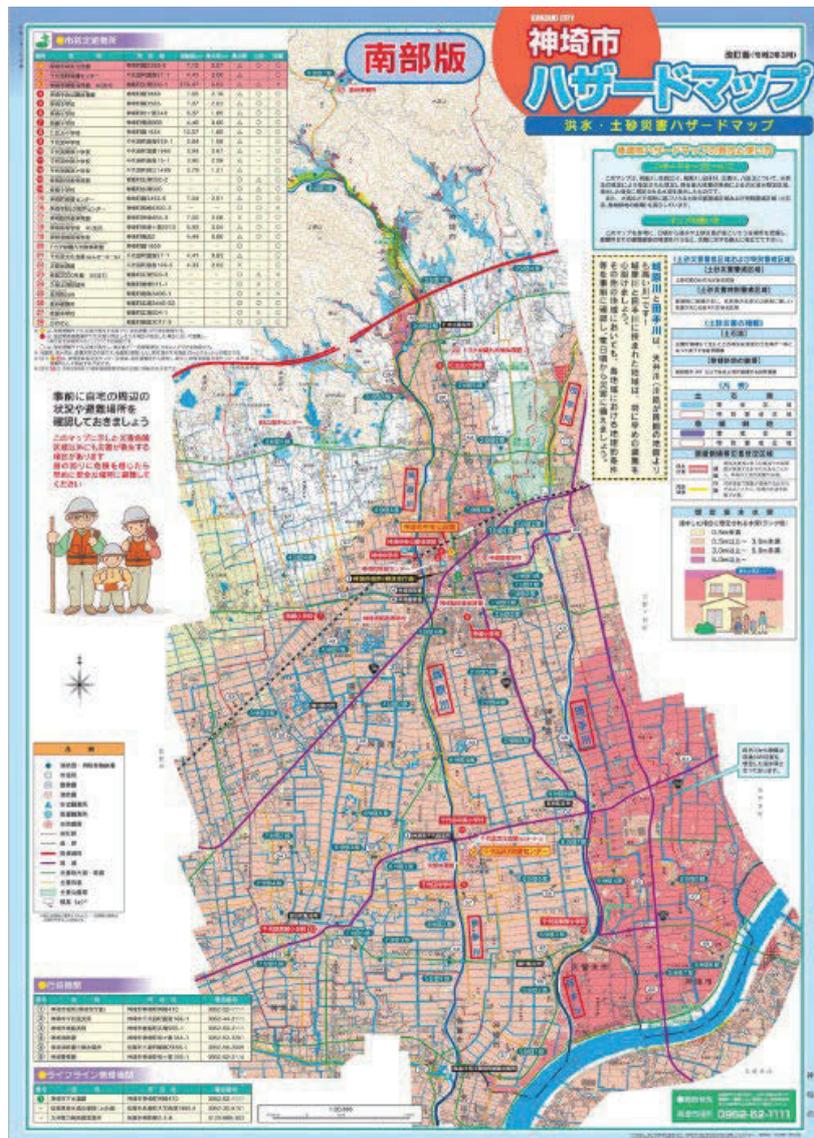
## ●神埼市の地形的環境による洪水被害の特徴

神埼市は、市内を南北に縦断して筑後川に流れ込む城原川と田手川が市街地を囲むように流れているが、いずれも市街地より高い場所を川が流れる天井川で、江戸時代から市街地が高く整備された堤防に囲まれる形になっている。

上流には「野越し」という堤防の高さをあらかじめ下げた場所が9箇所あり、水を越流させて下流域の堤防を守る仕組みになっている。城原川の左岸には7箇所の野越しがあり、水位が上昇すると、ここから市役所のある中心街に水が流れ出すが、その3キロ東には田手川の高い堤防が、南にも筑後川の高い堤防があって、一度流れ込んだ水は市街地から容易に排水できない仕組みになっている。さらに下流には干満の差の激しい有明海があり、満潮だと陸地からの水はけができない状況になってしまう特殊な条件となっている。

このため、神埼市の市街地では条件が悪い場合には4～4.5メートルくらい浸水することになり、甚大な被害が心配される。この囲まれたエリアには約1万台の住民の車があり、佐賀大学によるとエリア外にすべての車（住民）が移動して避難するには17時間もかかるという。野越しを水が越えるような事態になった場合の避難方法は大きな課題で、対策としては、JRの線路などをまたぐ形で道路を整備しておけば避難の時間は3時間ほどに大幅に短縮されるという。この“避難の道”を作るのが「事前減災」となるとして、国などに要望を続けている。

今回の災害でも、こうした野越しでの越水の事態が起きないかが大きな関心事だった。（市長談）



神埼市ハザードマップ（神埼市ホームページから）

### 3 被害の状況

【人的被害】 軽傷 1人

【家屋（住家）被害】 全壊 2棟、半壊 1棟、床上浸水 6棟、床下浸水 45棟

【避難（非住家）被害】 土砂被害 7棟、浸水被害 31棟

【避難状況】 最大避難世帯181世帯：最大避難者344人（14日）

【道路の被害】 土砂災害崩れ路肩崩壊による通行止め 国道：1路線 市道：13路線

冠水による通行止め 国道：6箇所、市道：98箇所

### 4 災害の時系列

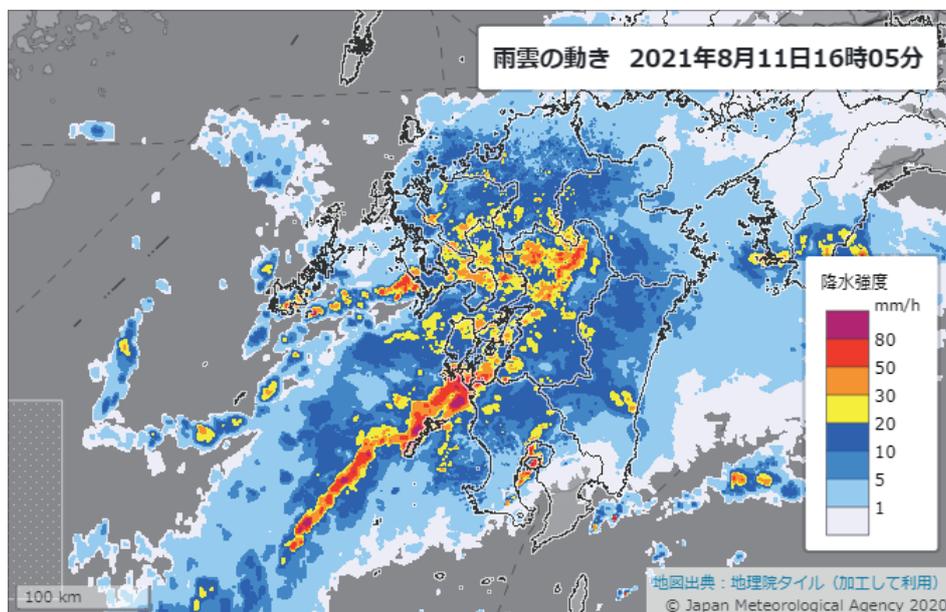
#### 8月11日（水）

13:05 大雨注意報（土砂災害）発表

14:40 大雨警報（土砂災害）発表

災害情報連絡室設置

15:30 災害対策本部設置



雨雲の動き 8月11日16時05分（気象庁ホームページから）

17:15 洪水注意報発表

18:00 自主避難場所2箇所※開設（土砂災害警戒）

※神埼町保健センター、脊振交流センター

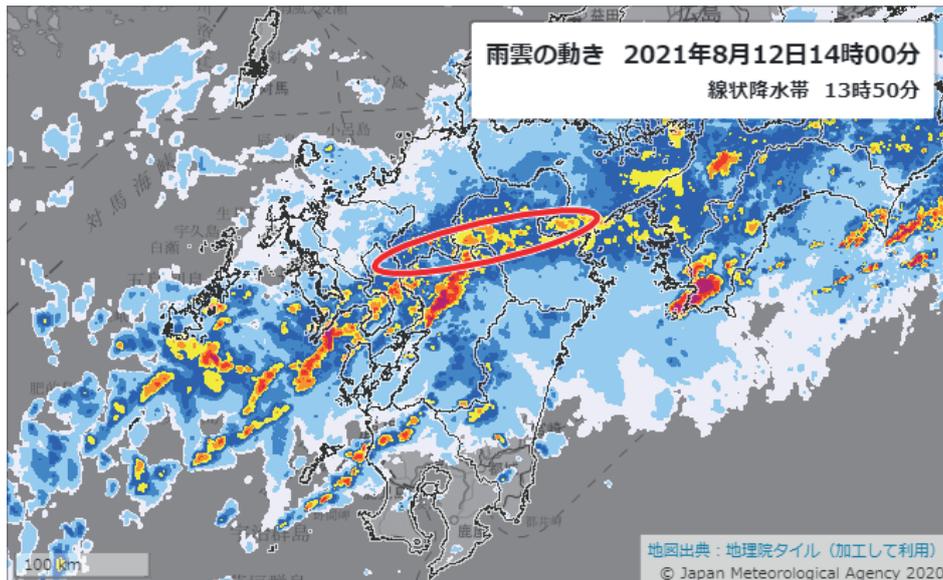
（松本市長）

土砂災害への警戒でしたから、山間部の避難所と市役所そばの2箇所を開設しました。うち一つは中央公民館が本来の避難場所でしたが、今回はコロナのワクチン接種の会場になっていたので隣の保健センターを避難場所とした。市民には事前にお知らせはやっておりました。

#### 8月12日（木）

13:59 顕著な大雨に関する九州北部地方（山口県を含む）気象情報

※線状降水帯が発生



雨雲の動き 8月12日 14時00分 (気象庁ホームページから)

17:30 高齢者等避難発令 (土砂災害警戒のため、対象地域：脊振町全域・神埼町山間部 1,459 世帯 3,464 人)

自主避難場所から早期避難場所に変更 (神埼町保健センター、脊振交流センター)

(松本市長)

原則、土砂災害でも洪水災害でも夜中に避難するため移動するのは大変ですから、そういう恐れがあるということを事前に气象台の方からの情報があれば、前もって避難情報を出すということで決めている。この時も翌13日の午前2時20分に土砂災害警戒情報が出てるんです。この土砂災害警戒情報が予測されたので、前日の夕方に高齢者等避難を出しました。

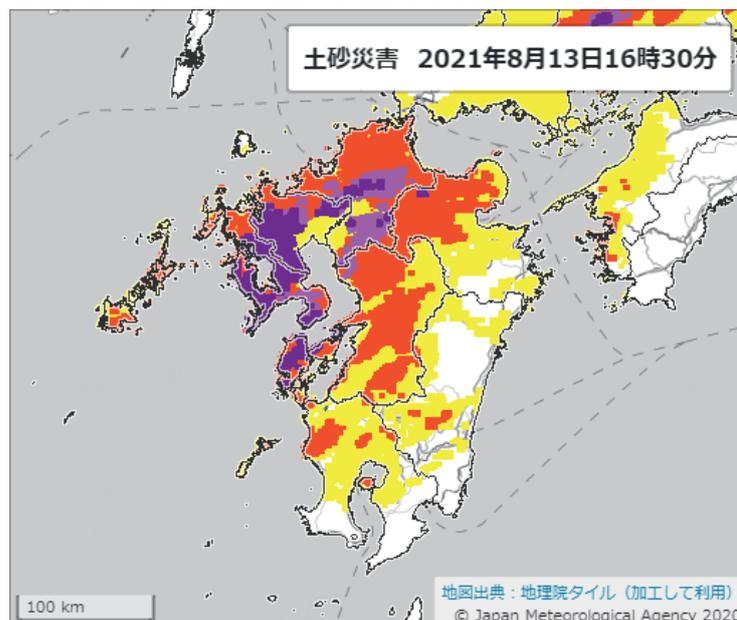
**8月13日 (金)**

0:53 洪水警報発表

2:20 土砂災害警戒情報発表

10:30 避難指示発令 (対象地域：脊振町全域・神埼町山間部 1,459 世帯 3,464 人)

早期避難場所から指定緊急避難場所に変更 (神埼町保健センター、脊振交流センター)

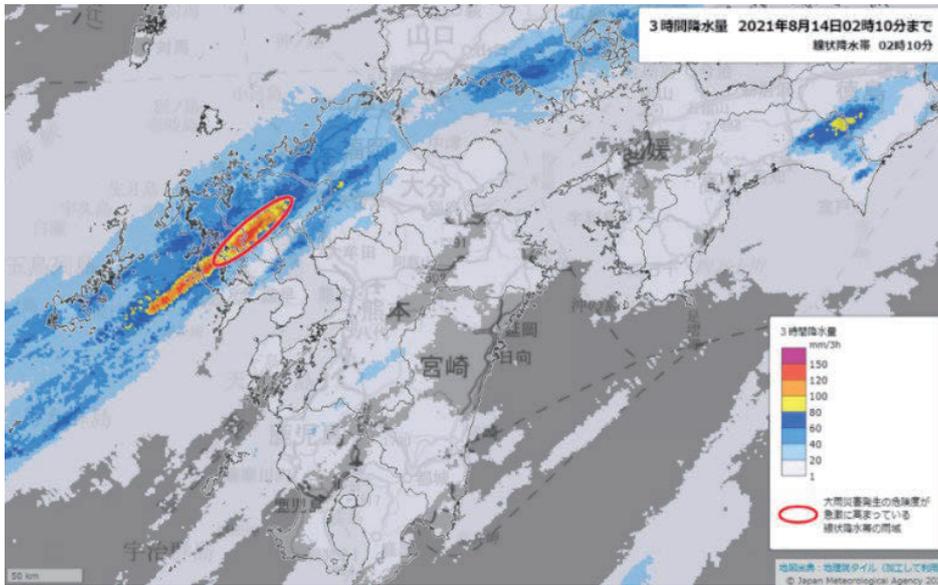


土砂災害危険度分布 8月13日 16時30分 (気象庁ホームページから)

8月14日(土)

1:44 大雨警報(浸水・土砂災害)発表

2:21 顕著な大雨に関する九州北部地方(山口県を含む)気象情報



3時間降水量 8月14日2時10分まで(気象庁ホームページから)

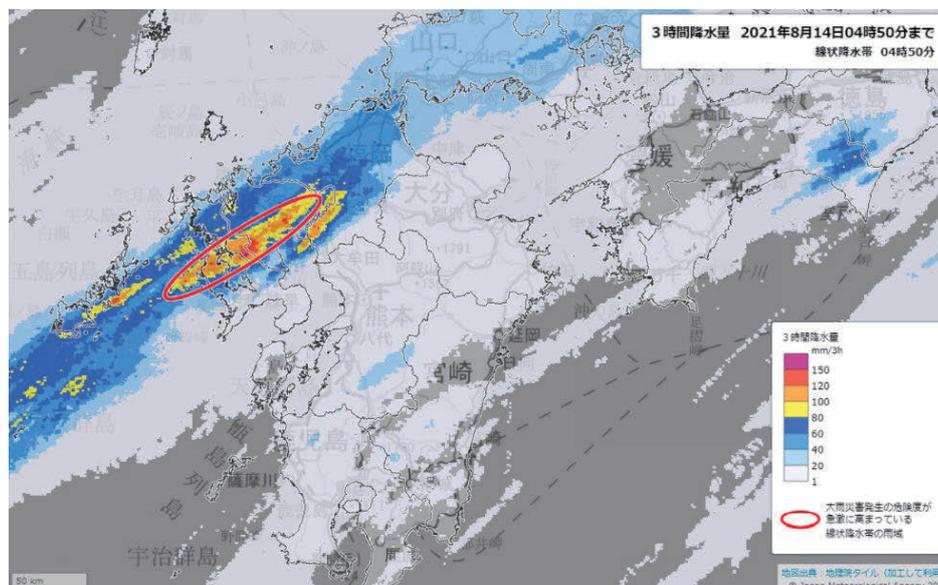
(松本市長)

線状降水帯というのが発生しましたということで、私達の城原川の上流になる脊振の山にかかれば大変ですよ。この赤い囲まれた雲がくると大雨が降るとということで、その部分がどこに来るのか私達も心配で見っていました。

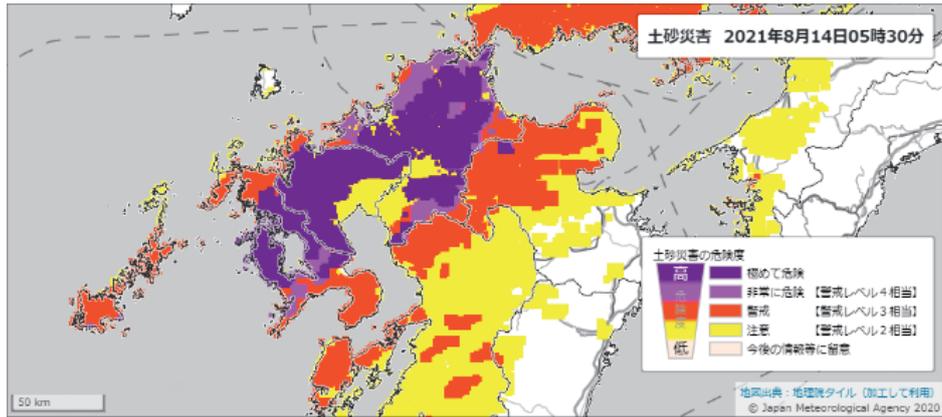
4:30 避難指示発令(対象地域:神埼町全域、千代田町全域 11,516世帯 29,635人)

その後もまだちょっと雨の降り方がひどくなるだろうというふうな情報があったんですね。本当は夜が明けてからがいいのかもわからないんですけど、ここはちょっと早めに出しました。

5:00 顕著な大雨に関する九州北部地方(山口県を含む)気象情報



3時間降水量 8月14日4時50分まで(気象庁ホームページから)

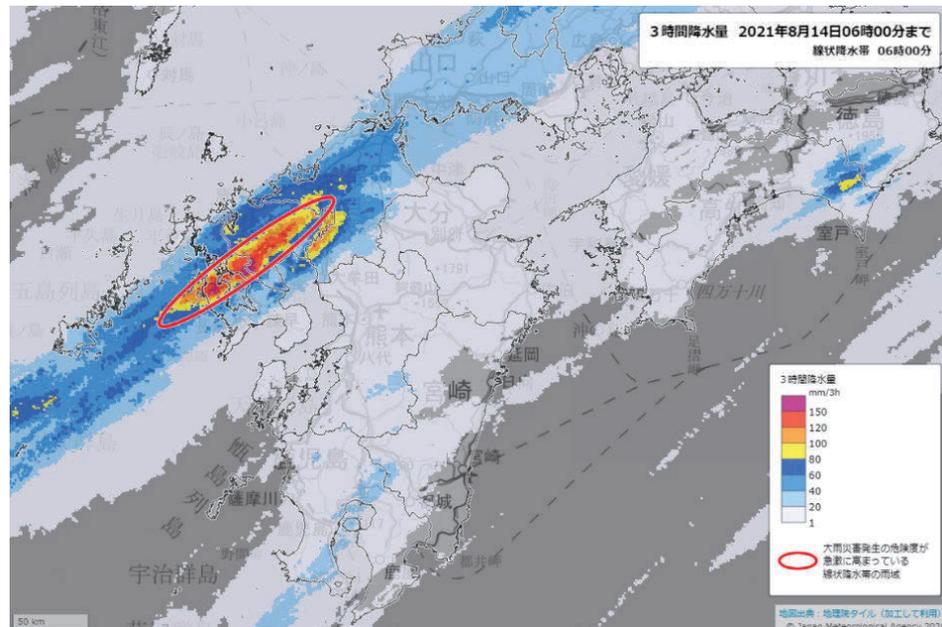


土砂災害危険度分布 8月14日5時30分 (気象庁ホームページから)

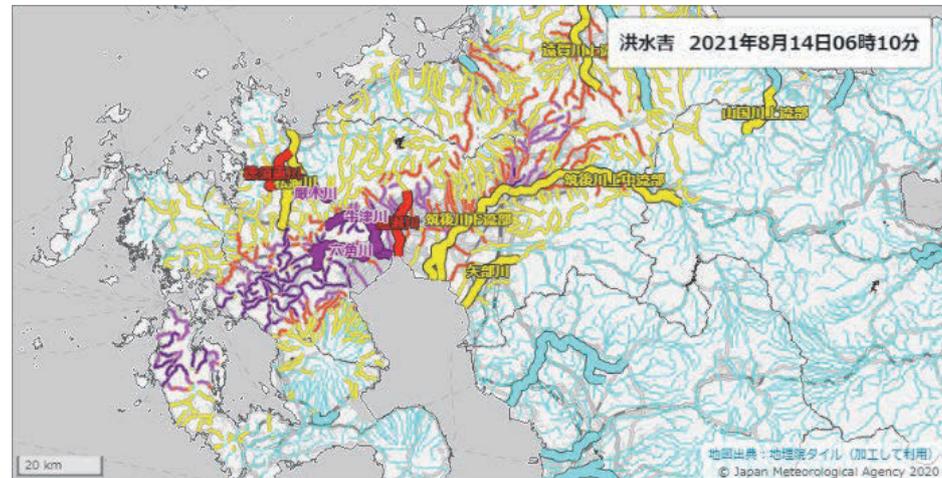
5:50 筑後川下流 氾濫注意情報

5:59 顕著な大雨に関する九州北部地方(山口県を含む) 気象情報

6:09 顕著な大雨に関する九州北部地方(山口県を含む) 気象情報



3時間降水量 8月14日6時00分まで (気象庁ホームページから)



洪水害危険度分布 (気象庁ホームページから)

### 6:30 大雨特別警報（土砂災害）発表

（松本市長）

特別警報が出た時、私は自宅にいました。現場が早めに対応していて、うちはそういう体制にしていますから。まだ災害の大きなことは発生してないんですよね。

僕は今までのとおりで、現場の確認、現状把握、そんなことをちゃんとやってくれと電話で指示していました。

### 7:30 指定緊急避難場所を3箇所から14箇所に増設

### 8:00 緊急安全確保発令（対象地域：脊振町全域・神埼町山間部 1,459世帯 3,464人）

（松本市長）

警報が出たとはいえ、避難所へ避難する人たちはそう多くない。水が増えているし、垂直避難するとかで、さほど動きだした人はいなかったです。ただし、避難所は開けないといかんで14箇所に増やした。増やして人が避難してきたら受けなければいかんということで、そういう体制をこの午前中でとってるわけですよ。

### 17:30頃 土砂災害発生（三谷地区）



三谷地区で発生した土石流の現場（神埼市役所提供）

（松本市長）

夕方5時半ぐらい、土石流が発生しました。大変なことがうちでも起きたなとまずは思いました。それこそ今までこの辺はほとんどなかったですよ。私も役所に勤めてから（市長は元役場職員）1回だけ土砂崩れがあったんですよ。同じ三谷地区というところで、しかしそれよりも今度は大きかったですよね。

ただですぐ調査をしてくれて、こういう状況ですという報告を受けて、ちょっとほっとはしたとこでした。ただでもこれはすぐしっかり処置をせないかんということで、翌15日の朝、私も現場に行きました。

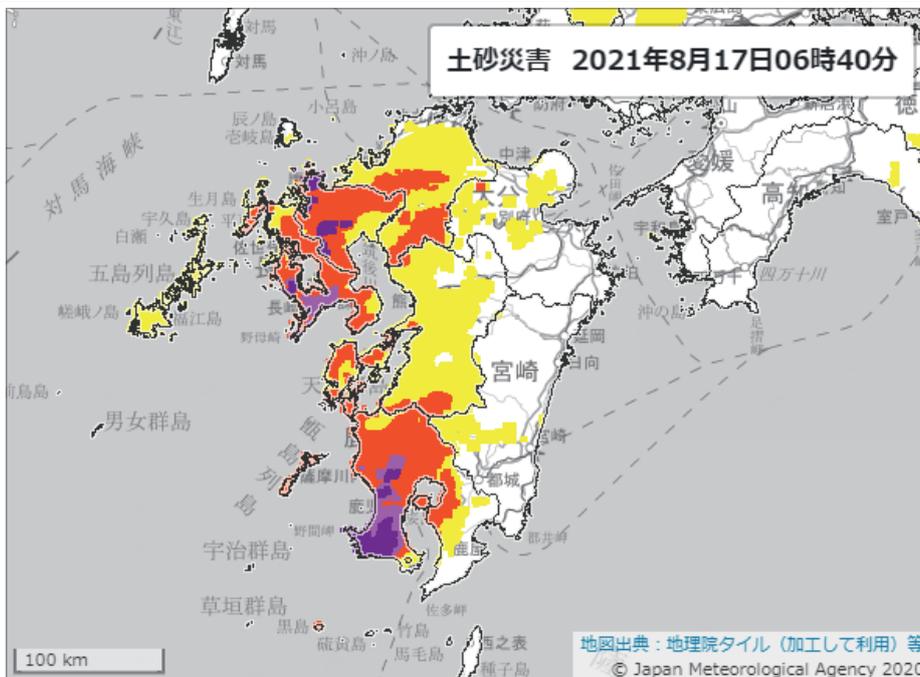


三谷地区で発生した土石流の現場（神崎市役所提供）

**8月15日（日）**

- 3:40 筑後川氾濫注意報解除
- 6:10 大雨特別警報（土砂災害）を大雨警報（土砂災害）に切り替え  
洪水警報を洪水注意報に切り替え
- 8:27 洪水注意報解除
- 12:00 避難指示解除（対象地域：神埼町全域、千代田町全域 11,516世帯 29,635人）
- 16:20 土砂災害警戒情報解除
- 17:00 緊急安全確保を高齢者等避難に切り替え（対象地域：脊振町全域・神埼町山間部 1,459世帯 3,464人）

**8月17日（火）**



土砂災害危険度分布 8月17日6時40分（気象庁ホームページから）

- 8:35 土砂災害警戒情報発表
- 9:00 避難指示発令（対象地域：脊振町全域・神埼町山間部 1,459世帯 3,464人）

(松本市長)

雨が先まで降るか降らないかを私達は予測できませんから、そのときそのときの気象台の発表に基づいてまたレベルをちゃんと上げて対応していくしかない。常に気象台の情報にそって避難の発令も出していくと常にそういう考えです。

10:00 高齢者等避難発令 (対象地域：神埼町全域、千代田町全域 11,516 世帯 29,635 人)

14:00 高齢者等避難解除 (対象地域：神埼町全域、千代田町全域 11,516 世帯 29,635 人)

#### 8月18日(水)

8:15 土砂災害警戒情報解除

8:40 避難指示を高齢者等避難に切り替え (対象地域：脊振町全域・神埼町山間部 1,459 世帯 3,464 人)

#### 8月19日(木)

5:08 大雨警報を大雨注意報に切り替え

9:00 高齢者等避難解除

災害対策本部廃止

(松本市長)

結局、長丁場の災害対応となって職員はこれをやりながらまた平常の仕事もあるんで大変だったと思う。結局は私も現場に毎日行くわけじゃないですから、職員から現場報告をずっと毎日受けるわけですが、土砂災害の現場周辺では住民が「戻っても危ないのではないか」、「怖い」という。こういうような対応策に加え、住民の日常の生活確保もせないかんと、そんなことで職員も全員が大変だった。

雨が終わってから、農業被害の方たちとか、工業など企業の人からですねもういろいろ注文がまいました。雨が終わってからも大変でした。

## 1 杉澤市長からのメッセージ

西海市長 杉澤 泰彦

## ●災害時、市長からの言葉

2020年9月、台風9号と10号が連続して近海を襲来したので、10号に対する十分な対応が出来なかった。長時間にわたって強い風が吹き、とくに3つある離島でマンパワーが全く足りず、被害が広がったので、昨年8月の豪雨では備えた。避難所の備品、簡易ベッドやテントを準備するとともに、停電の影響で上下水道が長期間ストップしたことを教訓に、発電機も整備した。避難情報を市民にしっかりと届けるために、私自身がマイクを持って行政防災無線で呼びかけた。台風10号の時には人口の5パーセントにあたる1,400人が避難した。被災後は片付けのマンパワーが足りないので、離島に市職員を派遣した。

## ●避難指示発令

2021年は、8月11日夕方から断続的に大雨が降って来て、12日に気象庁が「この状況は3、4日続く」と言っていたので、災害が起こることを確信した。同日午後0時6分に大瀬戸地区に避難指示を出し、夜9時30分には本市西部の西彼地区にも避難指示を発令した。当市は面積が240平方キロメートルあり、山間部で一人暮らしをするお年寄りが多く、この方たちに逃げてほしかったので、13日午後4時には、私自身が防災無線で「避難所でなくても、知り合いや親せきの家に逃げてほしい。特に川の近くに住む人は逃げて」と呼びかけた。避難所に来た市民は80数人だったが、多くの人が知り合いの家などに逃げてくれたようだ。

## ●自主防災組織と連携を密に

今回特に力を入れた点は、市内に84ある自主防災組織との連絡を密にしたこと。行政区長が責任者になっているので、要介護の方の名簿を提供したことや、福祉施設と契約を結んで介護施設に迎えに来てもらったりするなどの施策を進めてきたことである。早めに避難所を開設して情報提供をしたことも良かったと思う。市を縦貫する国道202号線は計5箇所道路が寸断されたが、SNSなどでの民間の協力を得た道路情報は非常に有益であったので、そのような情報を収集する道路アプリを作成中だ。その他にも避難所の住環境を改善することや民間のホテルとの提携も進めていきたい。

## ●平時における備え

市民に災害に対する備えと知識をもってもらうため、3年前に自主防災組織用の訓練マニュアルを作り、また、地域防災マネージャーが福祉施設や自治会などで「防災講話」を展開している。「水害は今年もある」を前提に、梅雨に入る前に広報誌や小冊子を作成して情報発信する。防災に強いまちづくりを目指し、平時は給食センターだが、災害時は非常食を提供するセンターとなり、指令塔となる防災拠点を国の補助を受けて高台への建設計画を進めている。

## 2 災害の概要

雨量の状況

	本土（西海観測所）		江島・平島（有川）	
	1日	1時間最大	1日	1時間最大
11日（水）	108.0	27.5	124.0	54.0
12日（木）	176.5	26.5	81.0	13.0
13日（金）	192.0	51.0	148.0	51.5
14日（土）	261.0	53.5	170.5	41.5
15日（日）	0.0	0.0	0.0	0.0
16日（月）	51.5	12.5	98.5	26.0
17日（火）	48.5	14.0	13.5	4.0
18日（水）	0.5	0.5	0.0	0.0
19日（木）	0.0	0.0	0.0	0.0
計	838.0	—	635.5	—

降水量（ミリ）



市道大甫1号線の土砂崩れ現場（西海市提供）



市道出口線の土砂崩れ現場（西海市提供）

## 3 被害の状況

【人的被害】 死者 2人（西彼町上岳郷）

【住家被害】 36棟

- ・ 公共住宅等（雨漏り） 22棟（市営住宅・教職員住宅）
- ・ 個人住宅一部損壊 5棟（西彼4、大島1）
- ・ 床下浸水 9棟（西彼3、崎戸6）

※個人住宅付近のがけ崩れ等の連絡件数 28件

【非住家被害】 19棟

- ・ 公共建物等 19棟（教育施設、観光施設、診療所、消防詰所）
- ・ 公衆道路 1箇所（西彼町）

【農林水産業施設被害】	76 件	
	・ 農道破損（古里日守線 他）	12 件
	・ 林道破損（西彼杵半島線 他）	11 件
	・ 田 損壊	21 件
	・ 畑 損壊	24 件
	・ ハウス破損	1 件
	・ 水路・堤・ため池	7 件
【公共土木施設被害】	56 件	
	・ 国道破損（202 号 雪浦小松、長崎市赤首）	2 件
	・ 県道破損（大瀬戸扇山公園線 他）	6 件
	・ 市道破損（大瀬戸出口線 他）	41 件
	・ 河川水路破損（西彼山内川 他）	7 件
【断水発生最大戸数】	328 戸	
	・ 西彼町鳥加地区	22 戸
	・ 西彼町大串地区	1 戸
	・ 大瀬戸町松島地区	296 戸・・・現在 1 戸断水中
	・ 大瀬戸町下山地区	9 戸

## 4 災害の時系列

### 8 月 11 日（水）

- 13:29 （江島・平島）**大雨警報発表、災害警戒本部設置**  
（本土）**災害警戒本部設置**
- 13:55 （本土）**大雨警報発表**
- 14:00 （江島・平島）高齢者等避難発令
- 14:39 （江島・平島）土砂災害警戒情報発表
- 14:45 （江島・平島）避難指示発令
- 17:00 （本土）高齢者等避難発令
- 18:05 （江島・平島）土砂災害警戒情報解除

### 8 月 12 日（木）

- 3:48 （本土）土砂災害警戒情報発表
- 4:00 （本土）避難指示発令（大瀬戸町）
- 6:40 （本土）土砂災害警戒情報解除 避難指示解除（大瀬戸町）  
（江島・平島）避難指示解除
- 12:06 （本土）土砂災害警戒情報発表 避難指示発令（大瀬戸町）
- 21:30 （本土）避難指示発令（西彼町）

### 8 月 13 日（金）

- 14:23 （本土）避難指示発令（西海市）
- 16:00 （本土）（江島・平島）市長から市民へ呼びかけ
- 23:35 （本土）避難指示発令（大島町・崎戸町）

## 8月14日(土)

2:37 (江島・平島) 土砂災害警戒情報発表 避難指示発令

5:05 (本土) (江島・平島) 大雨特別警報発表

**緊急安全確保発令 災害対策本部設置**

## 8月15日(日)

6:10 (本土) (江島・平島) 大雨特別警報解除→大雨警報

緊急安全確保→避難指示

6:45 (本土) (江島・平島) 土砂災害警戒情報解除

避難指示→高齢者等避難

10:00 (本土) (江島・平島) **災害対策本部→災害警戒本部**

## 8月17日(火)

1:33 (本土) 土砂災害警戒情報発表 避難指示(西彼)

2:20 (本土) 避難指示(大瀬戸町)

13:12 (本土) 土砂災害警戒情報解除 避難指示→高齢者等避難

16:45 (江島・平島) 大雨警報解除 高齢者等避難解除

## 8月19日(木)

3:02 (本土) 大雨警報解除 高齢者等避難解除 **災害警戒本部解散**



市道大甫1号線の道路寸断現場(西海市提供)



民家近くの土砂崩れ現場(西海市提供)

# 【卷末資料】

## 東日本大震災編

宮城県山元町

福島県相馬市

福島県新地町

## 1 齋藤町長からのメッセージ

山元町長 齋藤 俊夫

## ●危機管理部門は行政改革の例外に

行政改革は、危機管理体制の確保を前提とした推進であるべきだと声高に言いたい。地震前にお隣（亶理町）との断念に伴う自立のまちづくりに向けて、大震災時の職員数は210人から40人減らして170人になっていて、マンパワーが足りなくて大変だった。弱小自治体ほど行革のしわ寄せが危機管理に来る。地震1年前に私が就任した時は、総務課の総務班長が安全対策班長を兼務していた。しかも、安全担当2人のうち一人が不祥事で地震1カ月前に懲戒免職。とんでもないときに地震が来た。行政改革は、危機管理部門を例外にしないと大変なことになる。

## ●リエゾンも入る対策本部会議と別に、毎日2回の課長会議

大きな災害になればなるほど、情報の共有が非常に大事だ。自衛隊や消防などと一緒の災対本部会議とは別に、朝と夕に分けて内部の課長会議を全員が1箇所に集まってやっていた。

大きな方針は災対本部で、「自衛隊には、消防には、警察には、〇〇をお願いしたい。」となるが、詳細は課長会議で個別具体的に検討していた。通常ベースの業務はストップなので、非常時対応は取り組むべき分野、内容が決まってくる。

初動段階は人命救助、避難所運営、応急仮設住宅の整備とか、それぞれの段階で的を絞って問題意識を共有しながらやってきたので、そこそこのスピードで対応出来たと思う。非常事態になればなるほど、町の組織が機能しないと迅速な復旧復興がかなわない。

## ●少なかった山元町発の報道、10日後に町内の元アナウンサーが災害FM立ち上げ

マスコミ報道では、気仙沼や南三陸などと比べて、山元町の情報が少なかった。テレビで取り上げてもらえるのは、地域の実態を広く周知出来るありがたさがあり、災害の義援金にも直結する。当時は、仙台空港から南側は、福島県いわき市までの情報が飛んでいた印象がある。原発事故が影響したのではないかと考えている。

うちの町は、庁舎が使えなかったこともあって、3-4日、県庁とも連絡が取れなかったというハンディもあった。知事も山元町長と連絡が取れないと心配してくれていた。反省としては、（外部との連絡が取れていた）警察や消防経由でつなげれば良かったものを、いろんなことが次々にあって、気も回らなくなってしまった。

町内向けには、町内に住む在仙放送局の元アナウンサーが、地震の時に会議で庁舎内に居たこともあって、災害FMを10日後に開設出来たのは助かった。そこで私や副町長が、連日、話すようにしていた。できるだけ、首長自らも発信することが大切だ。



災害 FMの様子（山元町提供）

## 2 被害の状況

死者 637 人（遺体未発見の死亡届 16 人及び震災関連死 20 人を含む、町内での遺体発見数 680 人）

行方不明者 0 人（死亡届提出 16 人を除く）

重傷者 9 人、軽症者 81 人（いずれも救急搬送分）

家屋の被害（平成 25 年 5 月 24 日現在）

全壊 2,217 棟（うち流出 1,013 棟）、大規模半壊 534 棟、半壊 551 棟、一部損壊 1,138 棟

津波浸水範囲面積 24 平方キロメートル（総面積 64.48 平方キロメートルの 37.2 パーセント）

推定浸水域にかかる人口 8,990 人（平成 23 年 2 月末現在人口の 53.8 パーセント）

推定浸水域にかかる世帯数 2,913 世帯（平成 23 年 2 月末現在世帯数の 52.4 パーセント）

## 3 災害の時系列

### 3 月 11 日（金）

14:46 **地震発生 山元町で震度 6 強観測**

14:47 **災害対策本部設置（2号配備）**

（齋藤町長）

午前中は中学の卒業式に出ていて、昼食を取ってから午後の執務を開始していた。

地震の瞬間には、宮城県沖地震が来たかなと。でも、揺れの程度がちょっと違うなと思った。でも、あれほど大きな津波が来るという認識は弱かった。県庁で、2回も被害想定を担当してきた宮城県沖地震の刷り込みもあった。宮城県沖地震では、仙台市を中心にした被害を想定されていたので、山元町は仙台市の応援に行く立場というような認識だった。

町長室で、途中から揺れのすごさを感じ出して、これはただならぬ地震だなと感じたが、津波の大きさ、規模がどこまでかは、分からなかった。

14:49 **大津波警報発令**

14:52 **避難指示確認**

（齋藤町長）

強い揺れで、職員に「早く避難をしよう」と声をかけ、職員が避難をしたあとに最後に避難

をした。船の船長、と言うような心境だった。

壁に亀裂が入るなどの被害が出たので、戻って庁舎内での仕事は難しいと判断し、庁舎前の広場にテントで災対本部を設置した。そこまでの訓練はやっていなかったが、テントの資機材は総務課の職員が把握していたので、外に立てることになった。

まず、沿岸部エリアに消防団と手分けして、犠牲者を出さないように津波から避難する広報をと指示した。津波の映像などが入ってくる前だった。駐在所の署員や消防本部の担当者も駆けつけて、津波の情報の入手に集中していた。

## 15:50 頃 大津波襲来

(齋藤町長)

津波の高さの情報が次から次に入ってきて、上方修正されていくので、初めてこれは大変だという認識になった。それでも、津波イコールリアス式海岸という先入観もあった。リアスで増幅するが、こちらは増幅しないだろうという期待感もあった。

でも、自分の町に、大変な津波が押し寄せて、一瞬のうちに海水が町南部の坂元地区に入ってきて来るのを、役場のある高台で見ていた。ただただ茫然自失だった。

海に近い地区に住んでいる幹部職員と、それぞれの自宅が海に飲み込まれる情景を目の当たりにして、思わず彼に「もう、まちもこれで終わりだな」という言葉を発していたと、あとで幹部職員から言われた。

町民も、職員も、早く逃げていてくれ、と言う期待感は大きかった。避難広報車4両のうち、移動系防災行政無線がついていなかった2両は、職員4人が殉職した。命からがら逃げた職員もいた。どこかに避難していてくれるだろうという期待感もあった。職員の家族には素直に状況説明ができなかった。この話はいまでも語るのには厳しい。

人命救助が最優先で、そのための努力をしようとしたが、いかんせん海水に覆われた中で身動きはできない。一定程度、海水が引いた段階から、旧山下駅を中心としたエリアに消防団や職員が入って行って確認を始めた。手分けして避難者の状況把握や安否確認をしようと、3日間のうちに何とか助かる命を助けなくてはという思いだった。

私は幸い3日後に家族の無事は確認ができたが、一緒に高台から津波を確認した町幹部の奥さんは犠牲になった。職員も総じて被災した立場だが、一人ひとりが気丈に振る舞ってくれたなと思う。普段から、町民のためと言う思いを持って、日常生活を過ごしてきたので、災害になればなるほど、自分たちの出番だという意識はある。苦難に満ちた災害対応だったが、普段の延長戦でしっかり対応してもらえたと思う。



2011年3月12日の山元町災害対策本部（山元町提供）

## 1 立谷市長からのメッセージ

相馬市長 立谷 秀清

## ●効果があったシナリオなしの2度の図上訓練

平成14年に市長になって、夏休みを取って女房と旅行に行こうと思っていた日程で、相馬市総合防災訓練をやるという。渋々訓練に参加したが、なんで、こんなままごとをやっているのかと思った。「ただちに副市長を現地対策本部長として派遣します」と、単にシナリオをマイクに向かって読んでるだけ。副市長や助役が現地にいるところに、本部長（市長）がおでましで、その前で消火訓練や担架の搬送訓練、バケツリレー。もう、バカバカしくてしょうがなかった。

なので、2回目のときに自衛隊の飯炊き訓練を入れさせた。それを2年やったが、こんなことをやっても何もならないと思うと言ったら。「そう、考えるなら、図上訓練をやったらいかが」と言われた。

体育館に消防団員からなにから防災関係者を集めて、シナリオのない訓練をやった。震度6の地震が来て、事象はコンピューターが出してくる。津波はなかったが、火事が起きた。土砂崩れが起きた。

住宅が倒壊していて、現場は消防団員7人で、何ができるか。「市長、重機がないとできません」。建設会社に電話したら、重機はリースなのでない、とか。

分かったことは、一番役に立つのは消防団だということ。常備消防では、地域を見ることはできない。放水はできるが、現場でできるのは消防団員だから。

図上訓練を2時間半やっていると、夢かうつつか分からなくなった。それを2回やった。これの効果があった。

立ち会った自衛隊と消防の両方から来た総評は、市長に全部あげるのは間違いで的を絞ってあげないと、混乱して市長は判断に苦しむことになると言われた。

でも、その後の東日本大震災の経験からいうと、全部上がってこないダメ、市長が全部グリップしていないダメというのが経験から言える。俺の頭の中で整理し、俺の仕事じゃねえと言うことは任せる。警察や自衛隊にも、ご遺体はいくつかとかは、いったんは市の災対本部に上げてくれとお願いしていた。

## ●半日後の災対本部で、A3一枚の行動方針を決定

いろんな情報が入って、やらなければならないことが出てくる。それを、10数項目箇条書きにした。今すぐやること、これからのためにやっておかねばならないこと。将来のためにいまからやっていくことも。

津波で、いまやらなければならないことを考えた。最大の問題は、人の命だ。次の死者を出さないことを考えた。津波で助かっている人は、放っておくと死ぬので、まず孤立者を救助すること。そして、救助した人から次の死者を出さないよう、暖める、水をやる。そういう順番で考えた。

優先順位は、人の命、次に健康。避難所生活が長くなるのは目に見えていた。この避難所で何日耐えられるかも考える。それをどう乗り切るか。健康障害を考えると、仮設住宅をできるだけ早く。仮設の住宅用地とか、土地を探せ、夜中でも企業は起きているだろうから、夜中に洗い出せと指示した。

災害救助法のことなどは知らないが、市長が指示しないと行けない。その立場になったら、考える。みんなの報告を聞きながら、ホワイトボードにはびっちり書いてある。脳みそに汗をかいて考える。

3列目までの、箇条書きは、俺が書いた。Excelにしたのは副市長。担当課を割り振っていくのも副市長がやった。Excelに落としたのはクリーンヒットで、なんぼでも細かくできた。

一枚のシートにしたのは、全員が同じ方向を向くため。全体の中で何をやっているか分からなければ、ちゃんとした行動を取れない。自分が、どの分担をしているか、分からないで仕事をするのは酷だ。ただ、今になって、その段階でこのシートのことを市民に説明をしていなかったのは後悔している。

### ●子どもにしてやれるのは教育 亡くなった親に代わって仕送りや大学奨学金

犠牲になった消防団員は10人。俺の命令で死んだ、とすまない気持ちでいっぱい。さぞ、無念だっただろう。10人の子どもが11人いた。亡くなった親に代わってできることはなにかと考え、仕送りしかない。離婚の養育費の相場も調べて3万円と決めた。

しばらくして、海岸に行き、ここで彼らが亡くなる前に何を考えただろうか、おれだったらどうかと考えた。きっと子どものことだろう。子どもに強く生きてもらいたいと考えるだろうと思った。

強く生きるために、子どもにしてやれるのは教育だ。そのために、大学進学のための奨学金をと考えた。消防団員だけじゃない。震災で親を亡くした子が51人いた。その子たちに18歳まで仕送りし、大学進学には下宿代も必要だと考えた。51人で5億1千万円。財源は寄付で集めてみせると大見得切ったが、2年で集まった。

## 2 災害の時系列

3月11日（金）

### 14:46 相馬市震度6弱の地震

（立谷市長）

この日は、理事長として参加する土地改良区の会議があった。終わって、市役所に戻ってきて、3階まで上がるためにエレベーターのボタンを押した。エレベーターがずっと下がってきたと思ったら、揺れ出した。どんどん揺れた。なんだこれと思った。「落ち着け」と言いながら、柱にしがみついていた。

いつまで揺れが続くんだろうと思った。この市役所も崩れてくるかな。俺の人生も終わりだなと思った。もし、エレベーターに乗っていたら、えらいことになっていた。エレベーターの中で助けてくれというはめになった。

### 14:49 大津波警報

（立谷市長）

揺れ終わって、3階に走って上がって、総務部長に「災害対策本部会議をやるから、みんな集めろ」と指示をした。

### 14:55 第1回災害対策本部会議 市長指示

（立谷市長）

1. 海岸部消防団：津波からの避難誘導を急げ
2. 内陸部消防団：建物倒壊のチェック、生存者救出

テレビは動いていた。津波が来るかもしれないという。最初の指示は、内陸部の消防団員は崩れている人を助け出せ。海岸部は避難誘導。この二つだけ。

情報が飛び込んできても、どうしようもないことばかり。ただ、この段階は、相馬市にとっては極めて重要な時間だった。津波が来るであろう海岸部の住民を、消防団員が逃がしている時間だった。ここで何人逃がしたかで、命が繋がった。住民の9割は逃げた。消防団員が逃がしてくれた。

15:53 海岸部の消防団から、津波の第1報、高さ不明

16:10 「女性が沖の方へ流されているもよう」

16:12 「流された女性1名あり」ヘリコプターの出動を要請

(立谷市長)

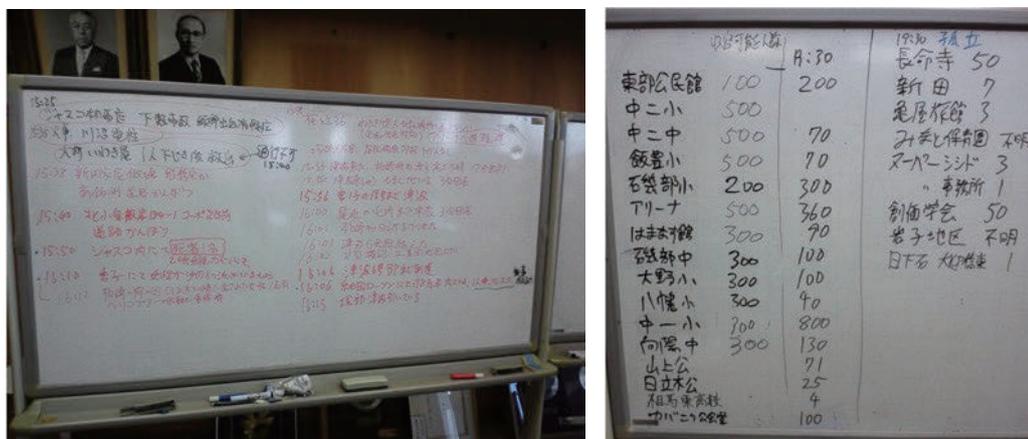
直後は犠牲が出ているとは思わなかった。三陸に津波が到達する映像がテレビで出ているので、万が一、津波が来たらどうしようとは思ったが、明治以降津波の記録はなく、慶長の津波などそれ以前のことは分からなかった。

すごいなと思ったのは、地元の「津（つのみつ）神社」の言い伝え。津波が来てもここまで逃げれば助かると、ひいばあさんに聞いて育った俺の弟夫婦はそれで助かった。その言い伝えで、神社まで逃げて助かった人たちはたくさんいる。残念だったのは、実家の隣の漁師。だんなが船で出ていて、奥さんが残っていて亡くなった。弟と嫁と実家の従業員とで、足が悪いお隣の奥さんを連れていこうとした。「いかない、父ちゃん待っている」と言う。おんぶしてやるから、と説得してもダメ。沖に出ている漁師は、港もないなかで、陸に上がっても、家はどこだか分からない。奥さんはどこに行ったと避難所で探した。あとからご遺体が上がった。そういう話はいっぱいある。

17:00 全域に避難所開設

19:30 第2回災害対策本部会議

生存者救出、避難所確保、支援要請(給水車など)、水・食料確保(市内スーパー)、被害情報の把握、自衛隊に救助要請済み。19:30 現在、避難者 16 箇所 2,460 人(避難所収容可能人数 4,100 人)、孤立者 9 箇所 115 人以上など



左=15:25-16:15 までの間、災対本部に入ってきた情報を書き出したホワイトボード、

右=第2回対策本部時の避難所の状況(相馬市提供)

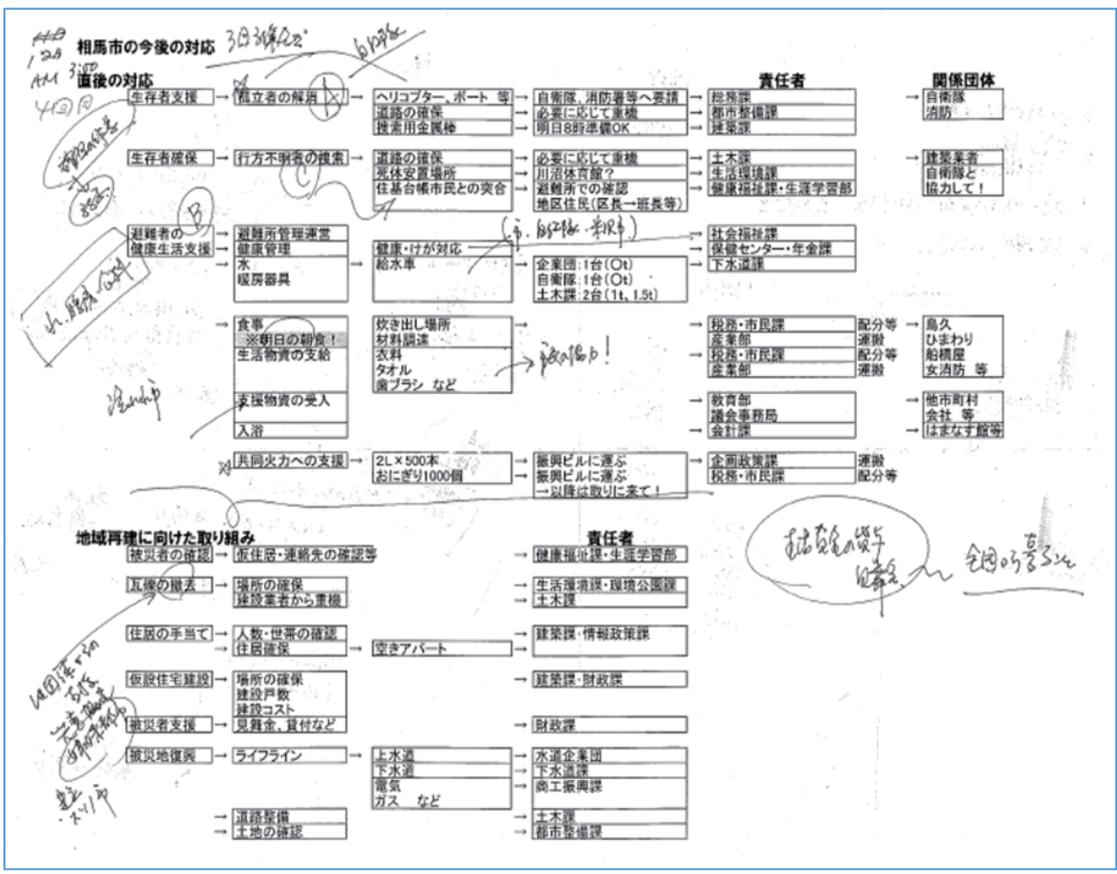
3月12日(土)

3:00 第4回 災害対策本部会議

行動方針を決定し、担当部課割り振り。全職員の情報共有化のために、A3用紙1枚にて周知、徹底。



第4回災害対策本部会議の様子、本部長(市長)撮影(相馬市提供)



第4回災害対策本部会議で決定した方針(相馬市提供)

15:36 福島第一原発1号機爆発 20キロメートル圏内避難指示

3月14日(月)

11:01 福島第一原発3号機爆発

21:00 自衛隊からの避難要請

(立谷市長)

あのときは流石にビビったが、線量計で調べていたが線量は高くない。この線量では、人体の影響は放射能の影響より、避難する影響の方が大きいと、信念を持って避難する必要はないと判断した。医者と市長が一緒だからできた判断だった。

不安で出ていくのはしょうがない。それは、気持ちの問題だから。だが、行政として、市を出ていくという線量ではない。国が出て行けと言わない限り、避難するリスクの方がはるかに大きい。自衛隊に逃げろと言われたが私の判断で押しとどめた。

**3月15日（火）**

**6:14 福島第一原発4号機爆発 30キロメートル圏内屋内退避指示**

**3月16日（水）**

（立谷市長）

市議会で「相馬市東日本大震災被災者生活支援金等支給条例」を可決。市独自の支援金一人3万円（対象：住宅が全半壊・流出・床上浸水）。

一人に3万円、配るべきと。配るときに、5人家族だから5人分で渡すのではなく、対面式で住民基本台帳と突合しろと言った。避難所の様子を見ておもったのは、避難の実態を捉えるには、生きている人と住基との都合を必要があると、最初に指示していた。その手段として、金を配った。

**3月26日（土）**

**仮設住宅着工**

**4月25日（月）**

**学校給食室を使った避難所での栄養管理 朝夕食は、学校給食室で調理し配給。**

調理員は避難所から市が雇用(35人)。昼食は仕出し弁当を配給。

**4月26日（火）**

**震災孤児義援金条例（7月から支給）**

遺児・孤児51名に 月3万円（平成24年6月改正条例 大学・専修学校入学者に76,000円/月の奨学資金を支給）

**4月30日（土）**

**仮設住宅へ入居開始**

地域単位でコミュニティを維持。仮設住宅マネジメントを実施。

**5月22日（月）**

**放射線対策説明会**

**6月3日（金）**

**相馬市復興会議 市、住民代表による復興会議、有識者による復興顧問会議**

**6月11日（土）**

**仮設住宅完成**

**6月17日（金）**

**避難所閉鎖**

**6月27日（月）**

**孤独者対策「仮設住宅に給食配給」（1,500世帯年3.2億円）、仮設住宅入居時に、米1人30キログラム**

夕食は学校給食室で調理（高齢者・独居世帯ご飯+おかず2品で集会所にて会食、一般世帯おかず2品は集会所で配布）

**7月以降**

**仮設住宅での障がい者・買物弱者支援**

被災者を臨時雇用し、身障者訪問チェック員（身障者 188 人を戸別訪問・相談）10 人。リヤカー販売員（仕入れは「はらがま朝市」から）16 人

**2012 年 4 月 27 日（金）**

**防災集団移転促進事業認可**

**5 月 2 日（水）**

**災害公営住宅の相馬井戸端長屋 1 棟目完成（ダウ・ケミカル社から寄贈）、2012 年 8 月 2 棟目完成（台湾赤十字組織から支援）**

## 大堀町長からのメッセージ

新地町長 大堀 武

## ●頭真っ白、あんな津波が来るとは

11年前、あの時は議会の委員会だった。担当ではないので総務課長席にいた。3月から運用を始めた全国瞬時警報システム（Jアラート）が赤く点灯して、いきなり本番が来た。なんだ、これはという思いだった。書庫が倒れないよう、寄りかかって押さえた。

小学生の時に1960年のチリ津波を経験し、海まで見に行った。引き波になって残った魚を取った人がいる。そういう人が今回も堤防にいないか心配で、案の定いたようだ。漁協にはすぐ沖へ逃げろと言った。一隻が沈没したが、なかなか海は捜索できなかった。

津波が松並木を超えて一瞬にして入ってきた。車が次々と沈む。これは大災害だ。どうしたらいいか、頭の中が真っ白になった。防災マップもよくなって、常磐線の線路で津波が止まる想定だったが、国道6号まで達した。あんな津波が来るとは思っていなかった。

震災前から図上訓練を住民と実施していた。要援護者を声掛けして連れて行くことも組み入れた。死亡者はいないはずだった。一軒一軒、声掛けしているが、息子が来るからと言って聞かなかった人がいた。屋根を直して亡くなった人もいた。

## ●津波は逃げるしかない

私は消防団歴が24年、本部分団長をしたし、訓練指導員を20年してきた。消防団には津波は逃げるしかないはずとずっと言ってきた。とんでもなく速いし、50センチの水に漬かったら人が立っているなんてできない、車も動かせない。消防意識だけでは駄目だ。自然には勝てないのだから、まずは身の安全確保だ。団員にも家族がいる。11年前は津波まで30分くらいあるから、1回広報して逃げろと伝えた。関係ない地域から来てぎりぎり助かった団員もいたし、海で津波を見てあわてて戻ってきた団員もいた。残念ながら1人亡くなった。身内を避難所に連れて行ったあと、もう一回海側に突っ込んでしまった。

## ●元のコミュニティを維持

日中の災害で、居場所が確認できない人がたくさんいた。分からない人を次から次へと書き出した。元のエリアごとにまとまって避難したからコミュニティを守れた。物資を配るのも安否確認も情報提供もうまくできた。ばらばらだったら大変だった。新地町は住宅再建も速かった。

## ●自宅被災、車3台も失う

11年前、自宅は津波が1階を抜けて半壊だった。車3台も全部駄目だった。定年前にリフォームしたばかりだった。2階で過ごすか、週に3日は役場に泊まった。退職金と保険で改修した。三役で被災したのは私だけだった。忘れたいし、今も海岸は歩きたくない。前を向くよう気持ちを切り替えてきたが、被災して良かった部分もある。被災した人の気持ちは被災した人にしか分からない。「この人も大変だな」と、つい涙が出ることもある。役場の定年を2カ月延長して社会福祉法人に入り、特養を一つつくった。また役場に戻るとは思っていなかったが、与えられた仕事を一生懸命やりたい。

### ●人命第一

首長としては人命第一だ。職員が亡くなったら一生、首長に悔いが残る。死なせたと言う思いをずっと抱える。3・11で職員は亡くなっていない。ただ、駅や危ないところに様子を見てくるよう命じた職員については戻ってくるまで心配だった。見てくれるだけですぐに逃げろとも伝え、何とか逃げた職員がいた。

### ●復旧、国の力を実感

3月に自衛隊のヘリで上空から町を見たときは悲惨で、もう戻らないのではないかと、復旧するなんて夢にも思わなかった。入江がいっぱいできていた。国の力と金は大きい。

### ●つくらなかつた避難タワー

海拔の電柱表示は、震災の直前に完成した。100万円以上かけた。町民が海拔のことを意識することになっていたらよかったと思う。議員からは、避難タワーをつくれと言われていたが、総務課長として絶対やらないと言って、予算要求はしなかった。つくらなくてよかった。地盤が悪い土地にタワーを建てたら倒れるかもしれないと考えた。実際マンホールは液状化した。タワーがあればそこまで行けば大丈夫だと思われるのが嫌だった。逃げるのが遅れてしまう。地震があつたら高台に逃げるしかない。

### ●応援消防車両は消灯して

各地から消防車両が20台か30台来てくれたが、町内に入ったら赤色灯を回さないでほしい。右往左往しているときにびかびかやられると、住民が不安になる。

毎朝5時に起きて避難所を回った。8時半までに戻ってきた。通うと苦情が出なくなる。町民からおしかり受けたのも、いい思い出だ。

